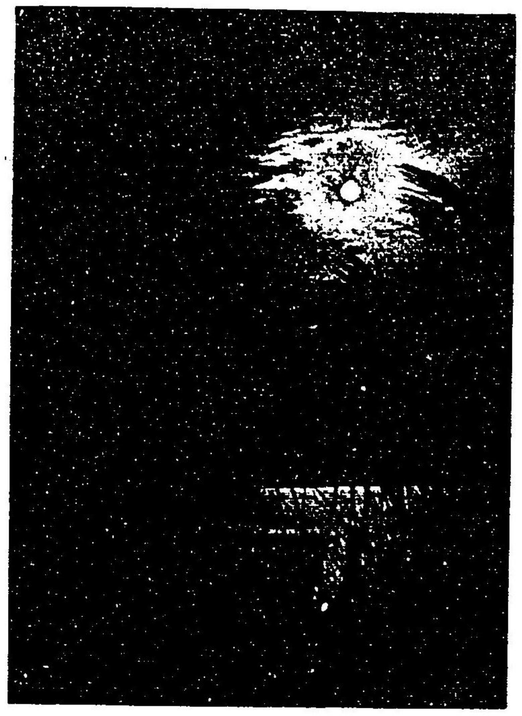

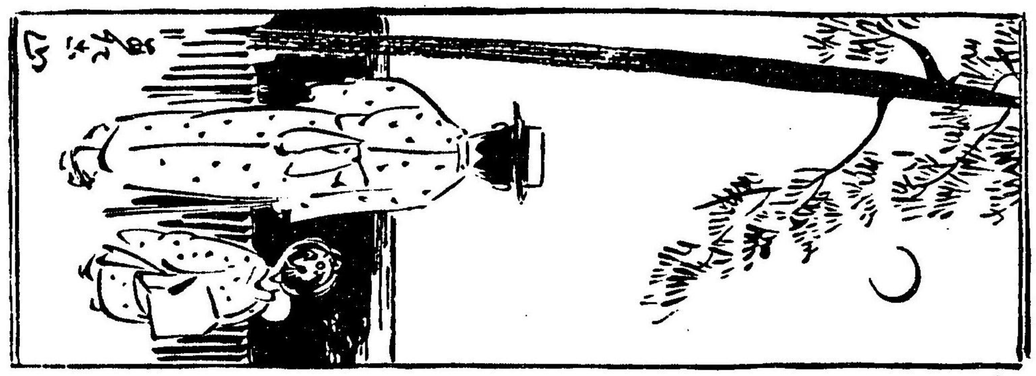

帝國圖書館藏

合み、悪眼殺氣を吐く、狂奔飛鳥の如く流連してダマスコの郭門に窟入耶蘇の徒を迫害せんかためなりき、而して郭門を出てんとするや、基督福音を世界に向つて宣傳せんを以つて任ずるに至りぬ、何ぞ夫れ矛盾の甚だしきや、而も是れ實事あるを奈何、即ち使徒保羅が前半生涯に移れる一大廻轉の光景にあらずや、彼は何か故に斯かる大轉化を生涯に移れる一大廻轉の光景にして、猶ほ悔ひさるを致さしめたる、彼と雖も自ら語る能はざる處、其の何か故に然るかを知らざりしなり、唯た曰く、大光落下して天に聲ありきと、是れ拈華微笑當對の消息を洩示するもの、所謂大光とは何ぞ人は之れを千古の秘密、万世の神秘と云ふ、予は是れを精神妙機の感動として解釋せんと欲するあり

蓋し人生五十年、未た甚た短なりと云ふべからす、而して一代の運命を瞬間の轉化に決せしもの、獨り保羅のみに限らざるなり、鐵を噛んで如意輪堂前に

歸らしとかねて思へば梓弓

なき數に入る名をとゞむる

の辭世を遺さしむるの運命は、櫻井驛上。遺訓の日に豫想すべく、五大原頭、星は墜つる秋風に神魂を九泉に銷するの日は草蘆の三顧、感慨して立つの時に決せられ、公孫大嬢の劍舞に草書の神韻を感得せる張旭、ヘロドタスの史に潛然として史筆の靈を傳へたるチユシチデス、少女が捧げ出せる、みの一つだになき山吹の一枝に女衆の武將となれる道灌、皆な是れ精禪一種の感應、照機相換の道交より來れるものにあらずして何ぞ。

神秘と云ふ、洵に神秘なるかな、秘密と云ふ、洵に秘密なるかな、如上轉化の機微有言を以つて求むへからず、有心を以つて得べからざるを悲しむ、十年居を同ふして遂に朋友とならざるの人、一たび相見して百載知己の契をなすものあるは何ぞ、莊嚴なる感歎吾聞くこと百度又た千回、未た曾つて意に會するものなきあり、却つて無文野翁の金言に脫然として光風清月の境を認得する者あるは何ぞ、曰く、口舌能く説明すべからざるあり、一大轉化の心頭、三世不可得あるものにあらずや。

然れども人生に一大轉化あるは事實なり、保羅はこれに據つて万世の保羅となり

正行これに依つて忠孝両全の龜鑑となり、孔明然り道濟然りしなり、呼、人生に於ける一大轉化、これ必ずや偉大なる人物が、生涯の或る時を期して經過せざるべからざる峻峭なるか、因つて以つて大小を識別する人物一生の分水嶺なるか、然り、人生の一大廻轉、是れ參禪脱落身心底大なる人物は必ず大なる禪悟の下に化成せられたりてふ、靈界の大事實は、千古万古凛として盡きず、長へに其動機を後昆に傳へつゝあるを看よ。

時あるかな、獨り宗教界と云はず、政治界と云はず、文學に工藝に、百般海陸の事事に至るまで、世界は一大人物の靈腦を渴望して待つに堪へさらんとするの時、沛然として禪學あるものゝ學者間に唱導研究せらるゝに至れるを見る、實に我邦に於ける近時學界の盛學かるかな、即ち鋭心要禪の聲、今日に喧しき處以、吾人之れを認め又た之れを欣ふ、凡そ偉人の出現、禪的感應を第一の要義とすればなり、而も尚ほ未た見る能はざるは何ぞや、偉人未た長成せざるにあるか、長成して猶ほ發動すべき好秋天に遇はざるためか、曰く、然らず、形骸の末を逐ふて精神の本を逸せるが故ず處あり、

何をか逐形逃神の末枝と云ふ、禪機は活物なり、心靈の廻轉は事實なり、求むる處客觀にありとするも、得る處主觀に存するを自覺せざれば、轉機と云ひ脱落と云ふも疣にあらざれは則ち贅、而して漫然禪學を唱ふ、小智及べば哲理の粹、宗教の精を讃し、短識逆せざれば、曰く、漠然たり、曰く、神秘なりと。是れ佛口蛇心の徒、偉人當に有るべくして、見るべからざるもの、誰か之れを偶爾なりと云はんや、抑も亦た逐形逃神の末枝にあらずして何ぞ、予の愚直なる、彼等口談の才子者流と伍して、堅苦枯根の過を、倶に共に再演するを欲せず、乃ち本書の本領、寧ろ書中所載の二十有四人各箇夫れ自身の地位に立ちて、其の廻轉の經過を尋繹し、禪機發展の歴程を追殿するの寓意に存するあり。豈に鍛文錬句の拘泥に、仔細するの閑暇を有せんや、

本書の所期は斯の如し、而も是れ實に幾多至難中の至難たるもの、錄頭に上り盡して初めて明月の皎々明やかなるを望み、水底散し盡して後ち大江の悠々万里なるを見るべし、著者弱冠にして陳腐の性、加ふるに浦柳の質を以てす、不幸未だ人頼を聞かず、何に況んや地館とや天嶺とや、禪機妙動の分水嶺に達する抑も何の日にか期せん、而して自ら進んで事に此の至難の業に從ふ、筆を執り紙に臨むあとに未た

曾つて禪神の冥助を請はすんばあらさりき、而も猶ほ顧みて其間斷沒理の多きを憂ふ、乃ち卷尾一々其援引參考の書目を列ねて本書の據處を表明し、遠慮あらく江湖博雅の叱正を希ふの弱点を露白し了んぬ。

然りと雖とも、本書は素、傳記にあらず史論にもあらず、活禪錄あり、或は敘述や論議や、文稍々枯簡に失して微意の之れに伴はさるものあるは、洵に著者淺學不文の致す處、筆端梅花の香を欠くは自ら大に恥るの点ありと雖とも、記中處々重復經過に似たるものあるは、實に止むを得さるに出つるもの、感慨極まるの處、芭蕉も『松島やあゝ松島や〈〉』の外、吟すべきの詞藻を失ひ、貞室をして『これは〈〉とはかり花の吉野山』の重言をあさしむ著者豈に貞室芭蕉の伎倆ありと云はんや、其の甚つく理由に至つては同一なりと云ふのみ、讀者諸ふ反復重觀の勞を、本書に向つて容まれさらんあとを、

自序縷々として卷首に題するあと爾り、筆路匆忽陳ぶべくして洩せるものは、後引之れを補ふ、敢へて長蛇の勢に擬して然るには、あらさるあり、彼の徒らに字句の末に拘はり、靈怪なる禪機を瞞し去らんとするもの、又た何をか成し得るものぞ、蟷蜋

依然として常在、片々浮雲の如何ともすべからざる處、美人を天の一方に望めば、意氣正に千秋。

一如居士　藤波恒識す

活禪錄目次

◎序　題……
◎指花と破顔……
◎剎竿の倒却……
◎水花と銘義……
◎凡珠は非珠……
◎滿水と投針……
◎道劫の同居……
◎無想と最大……

◎感謝と不斷……
◎受訓と研究……
◎教授と解說……
◎同姓と性名……

◎米白と米國……
◎部屋と部落……
◎弟妹と兄弟……
◎夏が不足い……

◎[illegible]……
◎[illegible]……
◎[illegible]……
◎[illegible]……

◎[illegible]……
◎[illegible]……
◎[illegible]……
◎[illegible]……

目次

◎禪機劃時代　藤波一如
◎餘　滴
◎詩と禪及び禪
◎目　次
◎目　次
◎禪方便引の書目
◎後　記

活禪錄

題辭

藤波一如著述

白蓮泥中より抽き出て、其美を單に花蕚に在りと稱するは非なり、予は寧ろ泥中不顯の根抵に存せる美の發顯に過ぎざる者とおす、人生の、花、偉績の美、未だ曾つて禪機の命根を枯失して成れるものあるを看ず、然らば即ち活禪の事、是れ須らく吾人の顧慮に値すべき好箇の活問題たらんか。

識見は如何に高尚なるも、學殖は如何に博大なるも、未だ以て自己胸底の安慰を得るに足らずんば、予は禪機の上より、這般の者流を呼んで、通途世智の凡夫と云はんのみ、蓋し彼等の喋々する學說、又た彼等が喋々する學理、予また之れを耳に聞けば必ずしも沒趣味と云ふべからず、只た疑ふらくは、その所謂調學理は、彼等各自の腔子裏最後の平安と何の關係かする、又た其所謂學說と、彼等自身の心動消息と合一す

るや否や、嗚呼ハイカラー者流の口才辯智、獨り能く何事をか成し得るものぞ、人を相手にせず天を相手にせよ、命もいらず名もいらず、官位も金もいらぬ人は、仕末に困るものあり、この始末に困る人ならでは、艱難を共にして、國家の大事は成し得られぬものありとは、西鄉南洲の云ふ處、是れ誠に精禪發動の妙機、寧ろ區々學得の分際を以つて得べきの境涯ならんや、他あし、是れ理外法外の理法とも云ふべきもの、理義にはあらず精神にあり、論辨評解の範圍にあらざればなり。

顧ふに禪や、學藝の精、宗教の粹、眞箇大丈夫漢の要諦たるもの、活世界の大事、禪悟に因つて成就すべきと同時に、禪機の發動は、偉大なる人物に因つて實現せらるべきなり、是れ青史の明白に証する處、獨り其証跡の身外過去の史傳中に求むべきのみにあらず、一たび禪機煥發の味香に沓着せんか、各自その實歷を自得自証し得べしとなす、而も水自ら流れて自ら知らざるか如、禪機自ら其の發動を自得して後來るべきものに非ざるを忘るべからず、

蓋し、許多の道理を研究し、幾多の推理を敲修するの哲學及ひ科學は、論理あるもの、法則に準據して、天地の万象を說明せんと擬するもの、禪は則ち然らず、單提獨弄

直下に其の關捩を會了するにあり、會了するは理法の謂にあらずして其の境涯あり、虛影にあらずして其の本體あり、寫眞にあらずして其の眞體なり、一言以つて之れを覆へば、直覺頓進、天地の妙機を悟得するにあるのみ、茲に於てか、善惡の情量を超え、有無の偏計を脫し、差別の相を出て、平等の體に入り、平等の奧に坐して差別の堂を忘れず、無際の空間に了達して無限の時間を能得す、而してあの底や、花紅柳綠、冷暖自知、山は連亙、水は嶷蚓、鳥は梢上に般若を囀り、蛙は蓮坐して正覺を唱ふ、是れ之れを平當純白の自然界に出入するものゝ消息とあす、所謂天空海濶、彼れ南州翁の如き大度量を得んと要せば、正にあの消息を自已に吐却せずんはあらず、此の故に大人は小兒の如く一見愚に似るを致す、眞に大化大同の妙域に了遊せるにあらざるよりは、得て達しべきの境地にあらざるあり。

夫れ宇宙は眞理の顯現たらずんはあらず、眞理は必す圓滿あるを要す、悲智完體は人的理想の極致なればあり禪は眞理を悟了するにあり、自ら圓滿たらざるなきを知んや、乃ち禪は眞理を悟了すと云ふ、眞理を發見し解釋する謂にあらざるや瞭々、即ち自己心身其儘、眞理と打成一丸合躰妙融するの謂、別言すれば、自己の全幅、眞理

夫れ自身となるにあり、故に四山迫り來るも天邊の月の如く、生死岸頭に立つて遊戯自在を得、或は靈通無碍の活神を澄靜ならしめ、或は千軍万馬一時に四襲し來り孤影重圍の中に陷るも泰然虛心、目前の大敵に對して餘裕綽々、胸襟一毫の畏怖墨碍おき膽大を致さしめ、あらゆる人生の弱缺過患の心的病根を救盡するに至るは素より當然の理數にして、其の滴瀝の餘事おれをなさしむるのみ。

古哲先聖、一たひおの妙機に接交するや、時に應じ機に隨つて各種の名を賦しぬ、佛家に曰く、禪機または佛性と、儒者の曰く、道心と、哲士曰く、理想或は真智良能と、耶徒曰く、上天生息の道性と、語跡各別なりと云ふと雖とも、等しく是れ人性最大の深遠幽邃おる處、彼の奮然として義に勇み、命ちを献げて事に仁に死するの堅實性あると同時に、落花草露に世態の須臾を歎じ、孤雁流水に人生の向途を哀むの血涙性あるか如き、尤も矛盾に似て能く調和せる、人事の高潔正大おるもの、皆な爰より發動せさるなし、眞箇禪機は、人世本然、俱有の大事實おるかお、而してその是れを了得し顯現するもの稀なるは何ぞや、常人皮相に拘泥してろの骨髓に感應せず、凡士事物に執着して其の靈機に道交せざるかためおり、

人の此世に生を稟くるや、誰か榮華を願はざらん、而も其の果敢おきこと、花の開落するが如きを恨む、富貴は吾人の共に望む處、而して其の永く賴むべからざるおと浮雲の集散するに似たるを奈何せんや、北邙一片の煙、阿房一炊の焰、今是昨非昨是今非は人事の常態、得んと欲して得べからず、得るも尚ほ久しく保つべからざるの現實界に、如何んが處して其もゆるか如き慾望を滅絶せんとはする。

試みに想へ、荊棘の生するは何の爲めぞ、蝮蛇の匿卻するは何の由る處ぞ、黑雲の月に於ける、彼れは意味おく蔽ふにあらず、白露の草頭に於ける、彼れ理おくして消落するにあらさるべし、爾かく人世の流轉する、万物の變換する、人生をしてその禪機の靈體に接觸せしめんかためのの、天地法然の攝理にあらさるなきを知らんや。

果然、宋の東坡、廓然としておの妙機を會了するや、叫んで曰く、溪聲是れ廣長舌、山色豈に清淨の身にあらさらんやを、知らず、誰か此の邊たり涯たる、無邊轉變の天地に俯仰して、無常に常住を觀じ、流轉源上に不易の活泉を敲き、進んで常住たり不易たりと名つくる處の、尚ほ人間界のものたるを知つて百尺竿頭、更に一歩を加へ、所謂不言不語、非有非無、非々無無の境に、虛絶道斷の一大覺光を體得するものぞ、既におお

れを體得すと云はゞ、その人や必ず偉物、否な偉人にあらざるよりは道般の禪機、得て體認する能はざるなり。

語を寄す、忙々たる活世界幾多の人士、書を讀み文を閲す素より可なゝ、只た活眼以つて活書を讀むを要し、靈光一閃靈文を閲するを必とす、苟も靈文活書を活讀靈解せんと欲せば、身心先つ修得工夫の眞驗を自らし、而して後ち其の蟲蝕點々の文字々下に、活躍しつゝある生々の眞意義に觸着せずんばあらず、書盡く信すれば書なきに如かずとは、豈に孟軻の一私言に止らんや、恨むらくは世俗の流、徒らに文字に眩し、鳥跡に躓くものゝ多きことを、禪界の巨物、大聖不立文字を喝破せるもの驚として之れに由る、只た夫れ不立文字と云ふ、その不立文字の四字に執着せよとの義にはあらざるなり、片々たる『活禪錄』一部の文字や、その不立文字の眞旨を道破せんに擬して、提起する立文字たるなり、非情の人事、山河の有情に唱呼して不泣の血涙萬斛の胸裏に滿然たり、我にあらず彼にあらず、文字に依つて尚ほ文字に着せざる是れ著者理想の消息、一部主張の事由、一に茲に存せずんばあらず。

『透過雲門無舊路　青天白日是家山
機輪通變人難到　金光頭陀拱手還。』

『獨座秋庭月色新　乾坤何處更問人
高歌度與清風去　幽意自隨流水春
千聖本無心外訣　六經須拂鏡中塵
却憐擾々周公夢　未及惺々陋巷貧。』

拈花と破顔

曾つて『宗門雜錄』を讀むに曰く、王荆公佛慧泉に問ふて曰く、禪家に謂ゆる世尊拈華は、何の典より出つるやと、泉曰く、藏經も亦た載せずと、公の曰く、予頃ろ翰林に在つて偶ま〳〵大梵天王問佛決疑經三卷を見るに、經文載する處甚だ詳かなり、梵王靈山に至り、金色の婆羅花を以つて佛に獻ずず、乃至、世尊座に登り華を拈して衆に示す、人天百萬悉く皆な措くことなし、獨り金色の頭陀のみあつて破顔微笑す、佛曰く吾に正法眼藏涅槃妙心實相無相あり、摩訶迦葉に分付すと、辨ずるものあり、此經は多く帝王事佛の請問を談ず、故に秘藏して世に聞者おきなりと、是れ好辨者の妄辨のみ、而山云はずや、此經は妄說僞作のみと、予は其の然るや否やを速斷するの勇氣なしと雖とも、禪や元と不立文字の宗、敎外別に心を以つて心を傳ふと主義するもの、文經の妄僞何の輕重か是れなさんや、而も此經今日に在りと云ふ、典據の有無に管せず、佛祖面受の口訣なりとして見ば、却つて脣吻の趣味を覺ゆるにあらずや、拈じ來れば瓦礫も是れ黃金、一念機を忘すれば大虛玷なしと知れ彼の妙心を掬紙裏

に求めて喃々し、活法を口談上に付して喋々するの徒は、鬼窟裡に向つて活計を作するもの、焉んぞ古松般若を談じ幽鳥眞如を讀むの消息を解せんや、知るべし雲谷幽深の處、更らに靈松の歲寒を歷るあることを、人知不到變易を見さるの地、死せず生ぜず、意根を坐斷して鷄足山に入定し、遙かに慈氏か下生を待つの大迦葉や、空觀を以つて會すべからす假歸を以つて了すべからざるなり、知らずや一翳眼に在れば空華亂墜すと、頭上漫々たり脚下漫々たり、予豈に能く金色の頭陀を盡すと云はんや、盡さんと欲せば覿面消息なし、唯た手を微笑の膝上に撒して破顏の長空に臥さんと擬するのみ、而も水急にして月を流さゝるの渾溪や、岸頭總べて崔苑たり、誤つて墮落せんか、左顧千仞右顧萬劫たらん。

迦葉尊者、姓は婆羅門種なり、懶翁曰く、身光殊特にして能く諸天及ひ日月等の光を飲む、皆な悉く見へず故に飲光と云ふと飲光とは迦葉の譯語なり、多子塔前に始めて世尊に遇ふ、世尊曰く、善來比丘と、乃ち鬚髮自ら除けて袈裟體に著く、蓋し轉凡入聖して見思の塵沙を斷せるの時的寫法、依つて正法眼藏を以つて付囑し十二時中頭陀を行して、未た嘗つて一日も空過せす、顏色醮悴身体枯槁、加ふるに襤褸の破裟

に、塵埃の掃を以つてす、服飾の美惡に依つて上下の卑見をなすは、由來凡士の常套なり、一會の大衆未だ迦葉を尊しとせさるもの、豈に所以なしとせんや、世尊は未を後にして本を先にするの大導師、乃ち處々三百の會ごとに、半座を分つて迦葉を居らしむ、既にして百万衆會の上座たり、因みに靈山會上、八万衆前にして、世尊拈華瞬目す、大衆默然たり、唯た摩訶迦葉のみあつて破顏微笑す、果然衆角多しと雖ども一麟にて足るごとや、世尊曰く、吾に正法眼藏涅槃妙心圓明無相微妙の法門あり、大迦葉に付囑すと、謂ふ處の拈華や、一子相傳、曾つて外人の知るを容さず、蓋し相逢ふて面を知らず、共語して名を知らざるもの、誰か迦葉を知り釋尊を了せん、抑も無相圓明の道とは何ぞや、拈華の端的は暫らく云はす、其瞬目せし處如何んと參到し看よ、吾人の揚眉瞬目と世尊の拈華瞬目と二なく別なり、世上の語話微笑と、迦葉の破顏微笑と、豈に一毫も異なるごとあらんや、而も一物僅かに留れば則ち浮塵隨つて引起すと聞く、若し吾に揚眉瞬目あり語話微笑ありと云はゝ、西天に釋尊あり迦葉あらん、豈に拈華微笑の正機ならんや、看よ釋尊拈華瞬目せし處に釋尊滅却し去り迦葉破顏微笑せし處に迦葉悟得し來るごとを、知るべし正法眼藏即ち吾有にして

無相圓明却つて自己に存するを、喫んで迦葉となすも迦葉なく、指して釋尊とするも釋尊なし、夫れ圓明の法は貸借にあらず、何を以つて他に與へ人に稟けんや、此れ是れを稱して以心傳心の付受とは云ふなり、然りこの不傳の傳を現さんがために釋尊華を拈して常住不變の本體を知らしめ、迦葉破顏して命脈不斷の妙用を識らしむ、知らす如來の法水誰あつて呑まん、圓明の了知、思量分別の心念に涉らざるあり、若し夫れ諸緣を放捨し万事を休息して、鷄足峯頭に龍華の春を期すと云ふが如きに至つては、獨り迦葉の不滅のみを以つて會すべからす、釋尊また常住あり、何すれぞ衆生のみ斷滅すべけんや、亘古亘今、朝夕佛を抱へて起き、夜々祖を抱へて眠むる、吾と佛祖と本來両面を絶す、何者の遠眼漢ぞ、二千載の昔時にのみ靈山の衆會を求めんとする、釋尊の肉身今猶ほ暖かに迦葉の瘦骨更らに新たなるを看さるか、豈に迦葉と釋尊とのみに限ると云はんや、吾人また曾つて靈山會上に有在して轉展變易なきもの、法華經に曰く、常在靈鷲山、及餘諸住處、大火所燒時、我此土安穩、天人常充滿、と、然らは靈山の會や久遠實成永劫不斷の衆會たるべし、要する處は、唯たそ の精進と否とによりて、佛祖或は出頭し或は沒脚するのみ、語に云ふあり、不精進は

則ち殺佛、精進は則ち佛下生出現なりと、苟くも佛子たるもの、豈に殺佛の罪業を敢へてすべけんや、宜しく精進微通して以つて、すみやかに空劫已前の慈父と相見了也すべきなり、嗚呼君未だ寶永山の富士嶺邊に在るの消息を解せずと云ふか、豁然一番自己本來の面目に證契せば、諸佛と共に行住坐臥し、言語喫飯して刹那も隔離するなけんなり、知らず人々吾有の釋尊と、常在の迦葉とを認得し了せるや否や、而も本來位次あるにあらず、錯了して那邊に蹤由を覓るおかれ入息陰界に居らず、出息万緣に涉らずと云ひ、法々本と自ら圓成し、念々悉く皆な具足すと云ふにあらずや、誰れか能く葛藤窟裏より出頭し來るものぞ。

刹竿の倒却

向上自行の門や、藤枯れ樹倒れて、已見の舊情、憍慢我慢の山崩れ去んぬ、却來化他の門や、所得法性の溪水、法海に瀑漲して、傳燈今日に石火流る、倒却刹竿の著者、喚べば應ゆるの底阿難の省悟、夫れ廣且つ大なるかな、要す万古碧潭空界の月、再三撈摝して始めて應さに知るべし、予は今阿難に見んと欲す願ふらくは更に一物の尊堂に獻するなからんことを。

蓋し阿難とは誰ぞや、王舍城の人、姓は刹帝利、斛飯王の子、實に佛世尊肉身の從弟たり、臘月八日如來成道の夜を以つて、此の世の天地を見たり、容顏端正、竺土十六大國の中、對隣すべきものなし、見る人ごとに歡喜す、故に歡喜と名づく、蓋し阿難の譯語なり、首楞嚴經を閲するに曰く、爾時阿難、因乞食次經歷婬室、遭大幻術摩登伽女、以娑毘迦羅先梵天呪、攝入婬席、婬躬撫摩、將毀戒體、と、美少年由來女難を免れがたし、危ひかな阿難幸ひにして僅かに脱することを得たりと、世尊十大弟子中、多聞第一に居し、廣學博通なり、佛に侍持する二十年、敎和上の事豈に其右に出つるものあらんや

首楞嚴に又た曰く、阿難見佛頂禮悲泣、恨無始來一向多聞、未全道力、懇懇啓請、十方如來得成菩提妙奢摩他、三摩提禪那、最初方便、と、即ち彼れ多聞なりと雖とも、未だ佛の心印を得ず、涅槃妙心に體達せず、餘人所不見の心地を開明せさりしあとを、傳に曰く、迦葉畢婆羅窟に於て、佛在世四十九年、横説竪説せる道教を結集せんとす、阿難の入室を許さず、蓋し彼れ多聞のみ未だ證果せさるを以てなり、阿難悲泣し、奮勵思惟して證果を得、迦葉曰く、既に證果せりと云はゝ神通を現して入室せよと、阿難乃ち小身と現じ鍵穴より入る、獨り怪しむ、父母所生五尺の身、如何んぞ小身を現ずと云ふ、是れ發菩提心の初位に遐り、已見多聞の憍慢を捨てたるの詩美的筆法、知らず鍵穴より入るとは何れの處ぞ、嗚呼猫齡知るものは元より知る、知らさるものは歴劫も知ること能はず、鍵穴焉んぞ阿難のみの入處あらんや、請ふ脚下に顧みよ、人々日夜往來の處は何の通路あるやと、阿難既に畢婆羅窟に入りぬ、大衆の懇請に應して一代の聖教を悉く宣説せり、如來の所説と一字の差なきあと、一器の水を一器に傳ふるか如く、阿難は是れ如來の再來あるかと疑はしむ、阿含經に謂ゆる、佛法大海水流入阿難身と云ふもの、誠に温美の言にはあらさるなり、而も尚ほ迦葉に給士する

二十年、常在侍者の班にありしは何ぞや、未た入佛祖の大道を悟らず、圓明無相の法門に入らさるか故にあらずや、只た夫れ未悟なり不入あり、多聞ありと雖とも博通なりと雖とも、凡夫癡暗のものと何の異る所がある、華嚴經に看よ、譬如貧窮人、算他寶、自無半錢分、多聞亦如是、と、寧ろ多聞は人道の障礙たるにあらざるあきか、即ち道を得んと要せば、多聞博通抑も〳〵末のみ、直前直下、たゝ勇猛精進すべきに存す、登に他あらんや、而も青天白日、他のために更らに東を指し西を劃すとは云はず、雪上に霜を加へ牛に騎つて牛を求むるは、吾人の敢へてすべきの事にあらざるなり、古人曰く、佛法を知らんと欲せは、將さに時節因緣を見るべしと、今其の時か、因は迦葉に依りて勘破されぬ、阿難問ふて曰く、師兄、世尊金欄の袈裟を傳ふ、外別つに箇の甚麼をか傳ふと、會法の時因は寂然昭著し來れり、迦葉乃ち阿難と召す、阿難應諾す、迦葉聲に應して曰く、門前の刹竿を倒却し著けよと、不傳の傳法、事已に畢んぬ、果然阿難また聲に應じて證悟せり、乃ちあの證悟の底や、呼んで天上天下唯我獨尊と云ふと雖とも、實は文字言語の盡すべき處にはあらさるあり、宜べなるかな金襴の袈裟、自然に阿難の頂上に來入せりと云ふことや、謂ふ處の金襴の袈裟とは何ぞや、無相

の福田衣、人々敬奉の如來敎即ち是れのみ、寄語す、世上多聞博通の士よ、依文解義の裏に、經旨敎意を知らんと欲せば未だし、苟も明かに眞實正道の悟底に參詣せんと要せば、須らく已見舊情、憍慢我慢を棄て、初發心に廻向し佛の四智を會すべきなり阿難尊者は即ちその活きたる實例にあらずや、迦葉に給士する正に二十年茲に始めて根機純熟し、一鶴聲を放つて阿難と召す、宛として空谷喚ふに隨つて響をなすに似たり、この裏、不思善不思惡有心に住せず無心に居せざるを看る、而して阿難の應諾や石火石中より飛び出づるが如し、而も顏々相對して影像を絕し二面烈破して師資契證せるもの、阿難と召すと云ふと雖とも、豈に阿難を喚ふものあらんや、阿難應諾すと云ふも、是れ答辭にはあらざるあり即ち以心傳心即通の的旨たるものを是れ、倒却し著せよ門前の刹竿とは、西天聆義の古習、敗者は即ち刹竿を切り倒さるゝとかや迦葉と阿難と、並びに刹竿を揚く、阿難既に出身すれば、迦葉即ち倒却竿刹一出一沒豈に天理の妙機にあらずや、曰く、人境は不二、迦葉と刹竿、阿難と刹竿、刹竿互に竿刹をおさば、出沒の理何時にか現ぜん、迦葉身心脫落の刹竿、倒却すると同時に、阿難脫落身心の刹竿即ち顯はる、乃ち言下に證悟して師資の道、通徹しぬ、既に迦

葉は刹竿を倒却せり、身土不二なるが故に、山河亦た自然に崩壞せずんばあらず、阿難の頂上、佛衣自然に來入せるは、本來の面目現前せるの證、而も中路に於て空王に事ふるあと勿れ、杖を策つて直ちに須らく本鄉に達すべきのみ、偏位して赤肉團上壁立千仞に止まるあとをせば、方寸總べて鐵城と化せん、淨躶々赤灑々の處、百尺竿頭更らに一歩し看んか、十方刹土直ちに全身を現し來らん、此裏喚べば應する底、抑も何物とする、谷神か木精か、阿難か迦葉か、果た自己か、心を以つて心を傳ふの消息や、木人夜半に語ると雖ども、外人の知るを許さゝるあり、迦葉と阿難、元と是れ那人の一體、兩面に出世せるのみ、而も那人と云ふ、何人とかせん自己か他箇か、跡じ來れば阿難迦葉一人とすべきにあらず、否あ古今東西、山河人畜、何れか箇々獨立万仞せる、彼れ那人の千變万化にあらざるなきを知らんや、借問すらくは、誰あつてか、那人を識得するかにあり、曰く、阿難と召す、阿難應諾すと云ふにあらずや、醒め來れば林下十年の夢、湖邊の景物一咲新たなるものあらんかな。

「あら磯の
波もえよらぬ
たか岩に
かさもつくべき
のりあらばとそ」

木義と錯義

識らざるもの是れとは如何、野村の紅は元と桃花のあづかり知らざる處、桃杏もの言はずして徑を成すは、理屈にあらずして事實あり、法は本來の法のみ、豈に人をして此の事を得せしめんとの妄念あらんや、汝我れに解せらるゝの底、更らに靈雲をして、省悟不疑の地に到らしむるものあつて存す、是れ不識不知にして、豁然緣に觸し刹那に所知を忘ずるの動機にあらさるなきか、彼れ佛界の大偉物、大乘の鼓吹者知名ある起信論は其餘瀝に成れる、一小銀波たるに過ぎざるあり、知らず巖頭千仞巨淵万丈の主張は那邊ぞ

馬鳴大士は、波羅奈國の人、亦た功勝と名つく、曾つて夜奢尊者に參し、最初に問ふて曰く、我れ佛を識んと欲す、何物か即ち是なると、尊者の曰く、汝佛を識らんと欲せば識らざるもの是れありと、然り身心脱落々々心身、誰か能く是れを識るものぞ、馬鳴曰く、佛既に識らずんば焉んぞ是なることを知らんやと、宛然として教家者流の口吻、尊者曰く、既に佛を識らず焉んぞ不是あるあとを知らんやと是れ波に隨つて涙

を逐ふの活手段にあらずや、馬鳴曰く、此れは是れ鋸の義と、彼れは未だ南山に鼓打ては北山に舞ふの消息を解せざるなり、尊者の曰く、彼れは木の義と、彼れとは不識の謂なり、而して尊者復た問ふて曰く、鋸の義とは何ぞやと、蓋し天地懸隔たり、馬鳴答へて曰く、師と平出すと、乃ち却つて問ふ、木の義とは何ぞやと、而も毫釐の差あるなり、尊者一喝して曰く、汝我れに解せらると、馬鳴言下に豁悟しぬ、實に參學の最初、必ず尋求すべきは是れ佛にあらずや、佛祖傳々、盡く是れ學佛の漢のみ、謂ふ處の佛とは何ぞや、不識是れなり、只た夫れ不識なり、音聲を以つて求むべからず、色相に依つて得べきにあらざるなり、三十二相八十種好、豈に謂ふ處の佛あらんや、然らは何者か則ち是れなる、識らさるものの是れなり、識らさるものとは誰ぞ、馬鳴は正に是れろの人にあらずや、豈に馬鳴のみ然りと云はんや、溪聲是れ廣長舌、山色則ち清淨の法身なり、未證の前後已了の間際に依つて佛の增減を論すべからず、三十二相を帶し八十種好を見すと云ふ可、三頭を持し八臂を有すと云ふ不可あげん、天上の五衰人間の八苦、或は被毛戴角に畜生を現じ、或は鉄擔架鎖に地獄を示す、傀儡子眴に下けたる人形函、佛出さふと鬼を出さふと、自心に頭出頭沒して異相多面たり、生死去來

何れか是れ眞實人の體なるものぞ、歷劫永劫、法身五道に輪廻しありながら、甞つて了知の範圍を脫す、朝々夜々我れに隨ひ造次顚沛にあがら、毫も分辨の規矩を示さず、之れを淨慈に聞く、不思議は一段の要、不可得は三世の心と、遍の裏有心を以て得べからす、無心を以つて求むべからす、語言寂默共に遣通し得べきの限りにあらさるあり、邪解するものあつて曰く、有識元とより佛にあらず、不識不量正に是れ佛と、既に不識是れ佛ありとせば、何ぞ煩はしく不識者是れなりと云ふや馬鳴の大智を以つてして未だ解せさるなり、故に曰く、佛既に識らすんば、焉んぞ是なるあとを知らんやと、否あ、既に佛を識らさるあり、誰か是れ佛ならざるあとを知る、果然、佛は不識の外に求むべからす、是れ豈に不是と云ふべけんや、詮し來れば耶蘇も如是儒道も如是、八字に打開して兩手に分付するの處、夜奢も馬鳴も不受一点にあらず、天堂と云ひ地獄と云ふ、未だ少分も借貸するなり、平山せるあと、怡然として鋸に似たり、故に曰ふ鋸の義と、尊者の曰く、彼れは是れ木の義と蓋し不識の底や、虛空咲つて點頭すと雖ども、黑漫々として消息の知るべきなし、不着一点不假半知、無心の木頭の如く、無我の露柱の如く然り、然も處解尙ほ餘習を殘して師義未だ明知すべ

き難し、乃ち復問復答汝我れに解せらるに至つて、無心一片の靈光、擔板凝結の暗雲を破り、古來今の情窠を脱し、豁然として師資の道疏通しぬ、而も錯了して不識不受の處、處々總べて不識ありとする、勿れ、則ち不識なりと云ふと雖ども、未生已前に向つて實參實究をなし、未胞胎の裏、深く不識の自性を辨せずんばあらざるなり、徒らに佛面祖面を摸索する、素より非人面鬼畜を求覓する、却つて可あるを知らず、不變を以つて見るべからず動著を以つて解すべからず、空と云ひ有と云ひ、色と呼び境と呼ぶ、比々皆あ非なり、嗚呼一鏃三關を破却するの人は誰ぞ、不識是れ自已本來の面目なりと覺知せずや、森羅万象元と是れ一法性の處現、凡聖と顯はれ、前後と分れ來るも、海水浪を起して、浪また波を起すと雖とも、曾つて一滴も增さず、浪滅し浪また浪を滅すと雖とも、未た一滴も失はさるが如く、由來這裏に去來し此中に起滅するのみ、放去放収、暫くは佛祖と呼ばれ、暫くは鬼畜視せらる、聞說らく、阿鼻の依正は極聖の自心に處し、毘盧の身上は下凡の一念に廻へすと、觀し來れば、一面上に衆面を現するに似ずか、即ち佛面と云ふ不是鬼面と云ふ是ならざるなり、君看ずや多年籠中の鳥、今日雲を負ふて蜚ふを、而も今日、蜚ぶと云ふと雖とも、蜚ぶや今日に蜚ぶ

にあらずと知らずや、他の獅子皮を被て、還つて野干の鳴を作すが如きは、吾人の得て再ひすべきの事にあらざるあり、向上の一竅を撥開すれば千聖齊しく君の下風に立たん、曰く、汝我れに解せらると、馬鳴豁然として省悟せり、而も解せられしもの馬鳴に限るべからず、省悟すべきもの豈に馬鳴のみと云はんや、何をか是れ佛、不識者是れあり、馬鳴は即ち此れ是の不識者にして君はまた馬鳴と一如にあらすと云ふか、知らす馬鳴自ら君を馬鳴なりと呼はゝ如何、即ち君は脚下の佛を識らさるものにあらすや、果然君と馬鳴と、馬鳴と夜奢と、元と是れ一體の両面のみ、唯た要す、馬鳴」と君と両面紛糾の處、是れ何者とかする、自ら拈して曰く、不識者是れなりと、夫れ龜上に毛を覓め兎邊に角を求むとは、宗鏡錄に謂ふ處の譬語にあらすや、知らす両箇の猢猻、水月を探つて得る處のもの、果して何者ぞや。

此珠は非珠

假りに例じて平等の本躰を云はゞか、非有相非無相の如意珠や內外玲瓏として邊表を絕し、孤光靈廓として漢來れば漢を現じ胡來れは胡を現ず、此裏豈に昧と塵とを容れんや、差別の妙用に至つては然らず、乃ち然らすと云ふと雖とも離れたりとの謂にはあらさるなり、一月天に在りて影を萬水に現するが如く、七顚八倒の如意珠、喫茶喫飯の摩尼珠、擧手投足の造次に分照し來つて古今の色を見ず、歷劫刹那ともに斷絕せさるを看よ、嗚呼摩尼の如意珠のみ然りと云はんや、佛祖傳法の十四祖龍樹大士の契底は、取りも直さす理即現實の活歷にあらさるなきか、唯た長ろ、墨汁淡はくして禿筆意に從はず、偶々活龍を畫かんと擬して却つて死蛇となし了らんあとを、而も提起し得べくんば試みに拈擧して看ん。

其言に龍猛と云ひ天台に龍勝と云ふ、異名同人のみ、龍樹大士は南天竺國、梵志の胤あり、傳に曰く、始め生るゝの日、樹下にあつて龍宮に入り、始めて成道を得るに由て龍樹と號すと、天姿聰悟、乳哺の中にあつて諸梵士の四韋陀典を誦するを聞き四万

の偈悉く皆お句義に達しき、長して、後ち慾色の苦本たるを知り遂に出家しぬ、時に迦毘摩羅尊者、馬鳴大士に依つて受具傳法し、行化して西印度に至る、彼に太子あり雲自在と名つく尊者を宮中に仰請して厚く供養す、尊者曰く、如來の教あり沙門は國王大臣權勢の家に親近するあとを得されと、太子曰く、今我が國城の北に大山あり、山中に一の石窟を存す、師此に禪寂すべしや否やと、尊者の曰く、諾と、即ち彼の山に入り、行くこと數里、將さに石窟に至らんとして龍樹に遇ふ、龍樹出て、尊者を迎ひ、乃ち問ふて曰く、深山孤寂にして龍蟒居する處大聖の至尊何を神足を枉ぐると尊者曰く、吾は至尊にあらす來つて賢者を訪ふと、龍樹默念すらく、此師決定の性を得て道眼を明らむや否や、是れ大聖にして眞乘を繼ぐや否やと、尊者他れの心通を得て曰く、汝心に昏ると雖とも吾已に意に知る、但だ出家を辨ぜよ何ぞ吾が聖不聖を慮かると、龍樹聞き已つて悔謝具戒を受く、然りしより尊者に隨つて學道するもの四星霜、一日尊者の龍王より摩尼珠を受くるに因み、問ふて曰く、此の珠は世中の至寶なり、是れ有相ありや無相なりやと、尊者の曰く、汝只た有相無相を知つて、此の珠の非有相非無相を知らす亦た未だ此の珠の珠にあらさるあとをも知らざるあ

りと、大智の龍樹言下に深悟しぬ、盾ふに龍樹や異道の學人、神通を具足して龍宮に往來し、七佛の經書を見て三藏の言句を暗んずと雖とも、未だ眞實の道人にはあらさりき、一たび迦毘摩羅に歸依して頓に佛法世法向上向下の兩種、完全の大明眼を開くを得たるもの、豈に師珠双照の餘惠にあらさるなきを知らんや、元と是れ八面玲瓏の寶珠なるのみ、あれに向つて有相なりや無相なりやと問ふの龍樹、自身の所見、有無の相に動著固執しあるを識らずや、摩尼や素より世間有爲の珠なりと雖とも、明珠の眞實相たる、誰か是れを有相とし無相とせん、珠は自ら珠たるに於て何の增減か是れあらん、彼の天女の額に飾るの珠や、輪王の髻に包む珠や、貴人胸邊の珠や、美婦襟裏の珠や、何れを有相と呼び何れを無相と指すべき、要は悉く世間の珠のみ、全く是れ道中第一義の至寶にあらざるあり、終南の師祖云はずや摩尼珠人不識如來藏裏親收得と、玄沙の曰く、十方世界是れ一顆の明珠と、即ち知んぬ、此の珠や、又た珠にあらざるあとを、誰れか非有相非無相の珠を會せずと云ふ、夫れ輪王七寶中に摩尼寶珠あり、一切の珍寶悉くこれより出生すと、而も果報勝劣あるが故に珠寶の受用差別あきあと能はず、或は如來の舍利となり或は衆生の米粒となる、時に佛

身を現し萬法と顯はる一顆と見るも不可なく自心と觀するも可なるべし、五尺の身となり八臂の形となる、被毛戴角森羅万象、豈に心珠自受用の妙諦あるものにあらずや、只た夫れ妙諦、參禪學道苟くも閑具の單靜にあらずと云はゝ、眞實修行の正路、焉んぞ獨り山谷に幽隱して自調の修錬のみ事とし得んや、舊者大梅の常禪師、鉄塔を頂き松烟の中に坐し、溈山の大圓禪師、虎狼を友として雲霧の底に住す、等しく是れ道業純熟の機を待てるものゝみ、而も溪間に獨住すと云ふか、獼猴の如く然り豈に無得道心の至れるものにあらずや、是れ道眼清明ならず名つけて敗種とす、果して然らば、身心未だ調はざるに正傳の知識に離れ、佛制に違して閑居獨住せんか如きは、抑も叢林辨道の本領にあらざるを了せん、何等齊東野人の經言ぞ、狐り に參禪學道を屬つて個人的厭世の邪觀なりと云ふ、佛世尊の入山出山の消息は暫らく云はずして可、豁然尊者の言下に證契し、飜然山林を去つて一書五天の迷頑を破顯せる、龍樹大士悟庭の歷程は、直下活大の證蹟を訓示する正法眼にあらずして何ぞ、非か

滿水と投針

偏界藏さゝるは雲、大野に凝れば有り、雪、芦花を覆へば朕迹を分ち難きにあらずや氷雪よりも冷かなる冷處、米末よりも細かなる細處、甚深巨究の邊、密々不測の底、壓山頌して、一針釣盡滄溟、水獰龍到處巨藏、身と云へるもの、是れ大智慧迦那提婆分上の事にあらずや。

提婆大士は南印度の人、姓は毘舍羅、蓋し商賈の種あり、初め福德の業を求めて頗ぶる辨說言論の術を嗜む、龍樹尊者、正法眼を迦毘摩羅に受得して後、行化して南印度に到る、國人多く福業を信ず、龍樹ために諸佛無上の妙法を說くを聞へて、相遞に樹て曰く、人に福業ある世間の第一、徒らに佛性を云ふも誰か能く之れを覩んと、龍盛曰く、汝佛性を見んと欲せば、先づ須らく我慢を除くべしと、彼の人曰く、佛性は大か小かと、龍樹曰く、佛性は大にあらず小にあらず、廣にもあらされば狹にもあらず、福なく報なく、死にあらず生にあらずと、時に迦那提婆、師子國より來り、龍樹に謁して論義を求む、將さに門に及ばんとす、龍樹是れ凡人にあらさるを知り、滿鉢の水を謂

り、侍者に命して彼れに示さしむ、提婆水を見、默して一針を投ず、侍者鉢を持し疑ひを懷いて返る、龍樹之れ見て歎して曰く、智なるかな若人、夫れ水は器に隨つて方圓に、物に逐ふて清濁なり、瀰漫間なく澄湛測るなし、之れを示すは我が學の智周きに比するあり、彼れ乃ち針を投ず、遂に其極を窮む、此れ常人にあらず、宜しく速かに召し進むべしと、因つて相見る忻然として師資默契しぬ、即ち半座を分つて居らしむ、靈山の迦葉の如きか、龍樹一日座を起たずして月輪の相を現ず、蓋し佛性三昧に入りしあり、提婆衆に謂つて曰く、此れは是れ尊者佛性の相を現して、以つて我等に示す何を以つて之れを知る、蓋し以れば無相三昧は形ち滿月の如し、佛性の義は廓然虛明ありと、言ひ訖れば輪相即ち隱沒しぬ、復た本座に居して默偈すらく、身現圓月相、以表諸佛體、說法無其形、用辨非聲色、と、龍樹一字の說ありしにあらず、提婆また一言の問ありしにあらざるあり、而も師資の命脈、默通證契せるは何ぞや、賓主睦き時純ら是れ妄、君臣合する處正中の邪、樹と婆と、抑も何れを師とし何れを資とせん、僧あり巴陵に問ふ、如何なるか是れ提婆宗と、答へて曰く、銀椀裏に雪を盛ると、圓悟の著語に曰く白馬芦花に入ると曰く、馬祖曰く、凡そ言句あるは、是れ提婆宗あり、只た此

箇を以つて主となすと、想ふに靈大地總べて是れ禪僧門下の客、遂つて提婆宗を體究し得てんや否や、巴陵の答處は且らく措く、馬大師の意那邊にかある、言句是と云はんか過箭新羅のみ、言句不是とせんか跳不出のみ、雲門の曰く、馬大師の好言語、只だ是れ人の問ふあしと、僧あり、便ち問ふ、如何んが是れ提婆宗と、雲門曰く、九十六種汝は是れ最下の一種と、而も是れ多くは事上に就ての答のみ、唯た巴陵や銀椀裏に雪を盛るを道ふ、極めて孤峻なるを覺ふ、些子の鋒鋩を露さずして八面に敵を受け著々として出身の路あり、陷虎の機あつて人の情見を脫するを看る、蓋し道吾笏を舞せば同人會し、石霜弓を彎けば作者諳んずと、龍樹の鉢水提婆の投針、實に銀盌の盛雪、明月の藏鷺なるかな、已に是れ滿鉢あり、圓同大虛無欠無餘、亦た是れ湛水虛明なるものにあらずや、表裏通徹して純一無雜、鉢水彌滿して清透靈明なり、何等の大智漢ぞ、滄海釣り盡すの一針を投ぜるの徹底徹頭や、空界物なきにあらずして色境萬像あきの妙機、針水混して跡あしと雖ども、類して之れを齊しとせば如何、一は圓明無相の清水、徹天徹地虛明廓朗なるが如く、一は妙眞如の靈理に通徹して不測の神錄を得るに似たり、淡水流れ通して地を穿ち天を浸し去るとせば、靈天地是れ法

性の智水にあらずや、而も針のものたる、靈を貫きぬ芥子を破る、水や元より針に破れず、況んや跡を印せんや、針はまた水のために堅きこと金剛に過ぐ、あの師資の外に針水なく針水の外に師資あきの針水、豈に樹と婆とのみの物ならんや、各自の却下、何れか水にあらざる何れか針にあらざる、滿鉢を呑盡すと云はゝ是れ平等觀無差別の謂、而も一針の在つて存するを奈何、吐却すれは又た是れ清水のみ、故に師資通達して茲に二面崩裂し、命脈證契して初めて全針全水の消息を會せん、恰も葫芦藤種葫芦をまつふが如し、攀ぢ去り攀ぢ來りて唯た是れ自心なるを知るへし、而も無差別中に差別底の針あるあとを忘れ、空水を圓呑し服せんか、咽喉を塞斷して七花八烈の斷見に墜せん、要は針水雨般の會をなさず、呑却し去り吐却し來りて、子細に覺觸底の直下に看よ、清潔明白にして虛廓通融あるの邊、正に廓徹堅固あるものあつて存ずるを會了せんなり、但た道のものたる、明眼の人却つて井に落つと傳ふ若し未た提婆を會せずんば、請ふ云つて天邊の月に問へ、赤檐の下清風を起すものは誰ぞと、必ずや天地消息を絕する底の消息を得べきなり、乃ち茲に針水全く法主身を露はすの分際を獲了し得ん。

遠劫の同居

潭底、蟾光空裏明。連天、水勢徹昭清とは、以つて正偏回互宛轉の妙用を明すなり、大智の處謂、空江冷浸月明、天と云ひ、水天秋合月彎々と云ふと同一義、即ち白銀世界玻璃の地、一色明邊點埃を絕する底の消息にあらずや、若し夫れ正偏に落ちす回互に墮せざる、向上の行履を示さんとしては、再三撈漉縱知有、寬廓旁分虛白成と云ふ、蓋し是れ水天一体の境地、潭底の蟾光我れ有ることを知る、而も再三の撈漉旁ねく分つて虛妄の白浪と成り、遂に蹤跡を沒し去るを奈何、豈に非正非偏非回非互、佛祖猶は有るあとを知らざるものにあらずや、即ち一色那邊、機位を轉じ、玉樓飛び出たす風風の兒と云ふもの、此れ是の調のみ嗚呼吾人は、此理の實現を般若多羅大士に於て看るを得るを欣ふものあり。

誰ぞ、般若多羅とは、曰く、東印度の人、婆羅門種の子なり、幼にして二天を失ひ、名氏を知らず、自ら稱して瓔珞と云ふ、時人依つて瓔珞童子と呼ぶ、閭里に遊丐して日を度る、常不輕の類の如し、人あつて汝何ぞ行くあと急なると問へば、即ち汝何ぞ慢ある

と答へ、何の姓ぞと聞けば、汝と同姓と云ふ、其の故を知るあとおし、時に不如密多尊者、東印度に行化して已に國王堅固を度しぬ、一日王尊者と車を同うして出つ、所謂瓔珞童子なるものゝ車前に稽首するを見て、盡大地の妙音は尊者の美唇より發せられぬ、汝往事を憶ふや否やと、童子また瓔珞に似たる麗聲を以て答ふらく、我れ遠劫の中を念ふる師と同居せりき、師は摩訶般若を演じ、我れは甚深修多羅を轉ず、今日の事蓋し昔因に契へりと、尊者乃ち染因を以つての故に、名つけて般若多羅と號さじむと、難するものあり、嘲つて曰く、是れ佛者常套の無稽の訛傳のみと、君は未だ鶴樹の終譚すら猶ほ且理立を盡さすと云ふを知らざるか、苟くも眞淨界裏に向つて、纔に一念の萌芽をなさんか、閻浮早く八千程を化せん、斥鴳の大鵬を笑ふは、以つて大鵬の實力を輕重するに足らざるあり、想ふに、不味本來の道たる、且らく事に約して云はんか、菩薩あり羅漢あり、天人あり乞丐あり、時には過去の如來の如く、或は初機の後學に似たり、而もおれ等しく久遠實成の佛示現の應身たるを悟らずや、即ち一念回光返照の時、眞下如來地に入るとは理に約せるの語、蓋し本來具德の顯現何れにか一毫の闕如あらん、誰か如來と同居し、本尊と和合せずと云ふ、豈に一出一

沒と云はん、共に隻手を出すと云はん、多種と云はす別條とせず、現在は即ち過去たるを知らは、法華經に謂ゆる、彼の久遠を觀るに猶ほ今日の如しと云ふの理は經ゆへからざるにあらずや、人畜同生、凡聖別居せず、是の如きの法、古來今にあらず根境識にあらず、嗣法焉んぞ三際を以つて論じ得べきあらんや、即通の證契、往來入出して現成連綿たり、宛として金針玉線密々として串通するが如きか、觀じ去り視し來れば、彼れ吾れの彼れあるか、吾れ彼れの彼れなるかを忘じ、彼れは何れぞ、何れを吾とせん、纖機見れとも見へず、機鋒聽げとも聞へさるの處、廓然として獨自明了、應機接物の分際あらん、何ぞや郎は摩訶般若を演說し、妾は甚深修多羅を轉するの情況消息是れなり、五蘊已に皆空なりと觀ずれば、色淸淨なり、佛智即ち般若と知れば、一切智るの淸淨たるを疑はず、非異無別に衆生即佛性を了すれば、一如不二に佛性即衆生を會せん、佛性元と外物を容れず、衆生何れにか內法を運ばんや、郎妾の兩機一ならずと雖ども、是れ萬象中の獨露身のみ、多數豈に二あるべけんや、古への不如密多は今の眞如、今の般若多羅は古への萬法、萬法眞如元と空有の別おし、此中若し了して全く無事おらんか、誼用何ぞ妨げん分不分と、古哲の鐵言金あるかな、君よ去つ

て、虛空を森羅万象の體として見よ、果して一糸一毫の面目に對する底のものあり
や、我れまた森羅萬象を借り來りて虛空の用とすれば、遂に一毫一糸の異路と見出
だす能はざるなり、師資昔因の證契、誰れか鳥つて無稽の訛傳とする、事に執する元
と是れ迷ひのみ、多種ありと解するは、節目なり、理に著するまた悟と云ふべからず
兩般ありと會するは、擔板漢なり、十玄談の記者曰く、「鷺蒿立雪、非同色、明月芦花不似
他」と、子細に驗點すれば、一に多種あり二に兩般おきを了す、銀椀に雪を盛り、明月に
鷺を藏するも、類して齊しからず、混すれば則ち處を知ると云ふにあらずや、誰か一
樣の芦花明月の夜、細かに白鳥の汀洲に下れるを看破するものぞ、

「櫻木を
くたきてみれは
花もなし
花をは春の
そらぞもちくる」

無相と最大

洞山曰く、大は方所を絶すと、鑑智曰く、極大は小に同じ邊表を見ずと、又た曰く、極小は大に同じ境界を妄絶すと、堂山乃ち此の意を提へ來つて達磨大士を眞讃して曰く、更無方所無邊表。豈有秋毫大者麽と、一偈能く大小の二見を破却し盡して絶對の妙用を吐却し了せるを看るにあらずや、あれ達祖不起無相の消息、佛祖正傳の微妙法門、圓覺大師空觀、夫れ自身即ち是れのみ、嗚呼劫石は消日あきを期せずと雖とも洪音豈に盡るの時あらんや、江路の野梅、一香頓に西來の意を漏洩してより枯木の花ために開いて劫外の春に遇ふあとを得るに至れるもの、吾人焉んぞ達磨の東土行を讃せずして止まんや、請ふ先つ其畧傳に看ん、不可なきか非か。

姓は刹利種、本の名は菩提多羅、南印度王香至帝第三の皇子なり、香至深く佛法を崇重し、無價の寶珠を以つて般若多羅に信施す、帝に三子なり、長を月淨多羅、次を功德多羅、季を菩提多羅と名づく、般若多羅、皇子等の智慧を試みんと欲し、施さるゝ所の寶珠を以つて、示して曰く、此珠圓明なり能く及ぶものありや否や、月淨、功德の二皇子

共に曰く、此の珠は七寶中の寶、固に隘るものなし、尊者の道力にあらざるよりは、誰か能く之れを受けんと、季子菩提の曰く、此は是れ世寶のみ、未だ上とするに足らず諸寶の中に於て法寶を上とす、此は是れ世光のみ、未だ上とするに足らず、諸光の中に於て智光を上とす、此は是れ世明なり、未だ上とするに足らず、諸明の中に於て心明を上とす、此の珠の光明は自ら照すあと能はず、必ず智光を借りて光らし辨するあとを要す、既に辨じ了らば即ち是れ珠なるあとを知る、既に珠なるあとを知れば即ちその寶なるあとを明らむ、若し其の寶なるあとを明れば寶自ら寶にあらず若し其の珠を辨ずれば珠自ら珠にあらざるあり、珠にあらざることは必ず智珠を假りて世珠を辨ずればあり、寶自ら寶にあらざるあとは必ず智寶を假りて法寶を明むればなり、師の道、智寶あるが故に今世を感ず、然らば則ち師その道あつて其の寶則ち現ず衆生道あつて心寶も亦た然りと、般若その辯慧を歎して乃ち復た問ふ、諸物の中に於て何物か無相なると、菩提曰く、不起無相なりと、般若曰く、諸物の中に於て何物か最も高きと、菩提曰く、人我最も高しと、般若曰く、諸物の中に於て何物か最も大なると、菩提曰く、法性最も大なりと、般若の問處は暫らく借く、菩提の答へ去り答へ來るの

處、驚濤雲に立てども類して齊しからざるが如く、明月に芦花、混して猶は異なるを知るに足らずとせんや、乃ち般若の明德、早く是れ聖降あるあとを知ると雖ども、百花の開く須らく春風を待たざるへからず、空しく銀盌を雪中に混して機の純熟を俟てり、果然時機は到來せり、明星出現、拈華微笑の因緣は純熟せり、父王崩御せる即ち是れ、蓋し又王香至、世を厭ふに及び衆皆あ號絕す、唯た菩提多羅のみあつて獨り柩前に入定すること七日にして出づ、乃ち般若多羅に向つて出家を求む、般若その請を容れ具戒を受けしむ、後ち坐禪するもの七日、既にして佛々祖々自受用三昧の無上智は發せられたり、即ち空裏、蟾光は撮得し了られぬ、般若示して曰く、汝諸法に於て已に通量を得たり、夫れ達磨とは通大の義、宜しく達磨と名つくべしと、因つて號を菩提達磨と改む、所謂西天の二十八祖、東土の第一祖、達磨尊者圓覺大師とは即ち此人是れなり、般若則ち衣鉢を磨に囑し偈を示して曰く、心地生諸種、因事復生理、果滿菩提圓、華開世界起と、磨拜跪、師の敕印を記し了つて問ふに曰く、我れ已に得法す將さに何れの國に至りてか佛事をなすへきと、般若廣く其因緣を示指し偈して曰く、路行跨水復逢羊、獨自栖々暗渡江、日下可憐双桑馬、二株嫩桂久昌々と、重ねて又た

一偈を附して曰く、震旦雖レ濶無レ別路、要レ假兒孫脚下行、金鷄解銜一粒粟、供養十方羅漢僧、と然りしより左右に執侍すること正に一十星霜を重ぬること四たび、未だ曾つて磨闕せず、既にして般若多羅の順世入寂に會ふ、二師あり、佛大光と佛勝多と即ち是れ、俱に佛陁跋陀に師事して小乘の禪觀を學せるもの、幸ひに佛大光のみは因に般若多羅に遇ふを得、決然として小を捨てゝ大に趣き、今や達磨と化を並べ、二廿餘門として稱號せられぬ、而して佛大勝多更らに徒を分つて六宗とおす、曰く、有相、曰く、無相、曰く、定慧、曰く、戒行、曰く、無行、曰く寂靜と、各々己れの解を封して別に化源を展ぶ、磨、彼れ六宗の邪見に纏はるゝを嘆じ、悲心默するに忍びず、淳々として事に教化に隨ふ、六衆ために開悟し咸共に誓つて歸依しぬ、今や達磨の名は十方に譽き渡れり、而して年齒正に六十餘載、籠居靜坐して閑樂に致命を缺づべきの時なりき、何等勇猛精進の極ぞや、震旦大乘の緣熟せりとおして先つ祖塔に拜辭し同學に告別し、而して後ち異見王に分袂して直ちに海頃に至る、王涕淚悲泣禁せんと欲して禁する能はず、乃ち曰く、おの國何の罪かある、彼の土何の祥かあると、盲々の赤誠、人の肺腑を貫くものあるを看ずや、何等斷腸の辭ぞ、王縋けて曰く、叔既に緣あれば吾が

止むる處にあらず、唯だ願くは父母の國を忘るゝおかれと是れ職ひ破れて野頭自及の露と化せる古英雄の心事と、何の徑程をも見さるにあらずや、然れとも達磨は巍々堂々として眠れる獅子の如し、幾千百の法子を捨て、篤信の王及ひ百官を捨て而して祖廟をあとにし父母の墳墓を殘して、六十の老僧は徐々として青汀の白砂を踏んで一枝の葦葉に上り、孤影を銀波面上に寫すおり、時を感しては花も涙をそゝぎ、別れを恨みては鳥も心を動かすとかや、果てしも知らぬ荒磯海、重溟縹々の限りなきに汎んで行く人おはれ、情も知らぬ舟子どもは、今やともつな押し切つて、船を深みに漕き出しぬ、帝もせんかた波路をおかめ、たゝ手を合はす外ゝなき、力及はず百官子弟もとり落にひれ伏して涙に果てし波押し分けて、沖の夕路の雨降る夜ゆふづく波の風吹く日、嵐高浪ことゝもせず鰐住む滄瀛横切して航海三載の霜霰遂に東土不知の南崖に達しぬ、蕭梁の普通元年庚子の歲深秋、霜を飛ばす九月の頃なりしと云ふ、廣州の刺史蕭氏迎請の厚禮を設け之れを館し、武帝に表聞す、詔して京師に赴かしむ、時に萬山の枯木、白曇の花を飾る冬十一月なりき、金陵に抵り法駕出迎す、痛めて宮中に入れ正殿に請せしむ、武帝とは誰ぞ、曾つて袈裟を披して自ら放

光般若經を講じ、天花亂墜して地黃金と變するを感得せる佛心天子即ち是れなり帝達磨に問ふて曰く、朕嘗つて寺を造り僧を度す、何の功德かあると、磨の曰く、無功德と嗚呼是れ臂頭早く惡水を慕頭に澆くもの、而も誰あつてか這箇無功德の句意を透得せば、親しく達磨を見るの人あり、知らす此意什麼の處にかある、帝は嘆約、傳大士等と常に眞俗二諦の論を持するの人、眞諦とは何ぞや以つて非有を明すなり俗諦とは何ぞや以つて非無を明すあり、眞俗不二即ち是れ聖諦第一義、蓋しあれ教家極妙窮玄の處にあらずや、帝達磨の無功德を了得する能はず、便ち此の教中極則の處を拈起して、再び磨に問ふ、如何んか是れ聖諦第一義と、磨曰く、廓然無聖と、黃梅曾つて說く、只た這の廓然無聖若し人透得せば、歸家穩坐一等に是れ葛藤を打すと古人道く、紛骨碎身も未た酬るに足らず、一句了然として百億を超ふと、超ふに廓然無聖の一句の參得し透せば、千句万句何時か礙滯せん、自然に坐得斷じ把得定すべきのみ、達磨乃ち得々として他れに一拶を與ふ、多少か漏逗し了れるを看るにあらずや、而も帝は省し得さりき、却つて人我の見を持して再び問ふ、朕に對する者は誰ぞと、是れ桃を指して杏を罵るもの、あはれ武帝は權りに垢衣を掛けて、是れ佛と云

ふの徒、磨の大悲豈に默して止まんや、乃ち道く、不識と、宛として獅子一兎を捉つも全力を盡すの消息、武帝の眼目定動して落處を知らさらんとす、吁不識の言裏に到つて、誰か能く有事無事、拈し來るに堪ゆると云はんや、端和尙這箇を頌して曰く、一箭尋常落一鵰、更加一箭已相饒、直歸少室峰前坐、梁主休言更去招、と、茲に至つて武帝何とかせん喚んて驢と作さんか則ち是、喚んて馬と作さんか亦た不是なし、而も畢竟作麼生ぞ、只た老胡の知るを許して老胡の會するを許さゝるを奈何、果然武帝不契たり、雲水隔る時君住するあと勿れ、磨乃ち帝の悟るべからざるを勘破し、遂に江を渡つて魏に至り、嵩山の少林寺に過ぎ其の東廊に居す、面壁打坐終日默然たるもの九星霜、時人因つて壁觀婆羅門と呼ぶ、已にして西の方天竺に返らんと欲す、門人に命して曰く、時將さに至れり、汝等盍んぞ各々所得を言はざると、道副なるものあり大儒の碩學なり、乃ち對て曰く、我が所見の如くんば、文字に執せず文字を離れず、而して道用となすと、磨曰く、汝吾が皮を得たりと尼總持は則ち武帝の娘、進み出でゝ曰く、我れ今解する處は、慶喜の阿閦佛國を見るが如く、一見更らに再見せずと、磨曰く汝吾か肉を得たりと、道育曰く、四大本と空あり五陰は有にあらず、而して我が見

處は一法も得べきなしと、磨曰く、汝吾が骨を得たりと、最後に慧可あり、禮拜して後ち位に依つて立つ、磨呵々大笑して曰く、汝吾が髓を得たりと、時に光統律師及ひ菩提流支なるものあり、ともに是れ僧中の鸞鳳たり、達磨の演道、相を斥け心を指すを覩て、每に是非の論議を試む、磨遇に玄風を振ひ普ねく法雨を施す、而も偏局の量、磨の法德天下に布き、上下悉く歸敬するを見るに忍びず、石を擲却して當門の牙齒を缺く、加ふるに大毒を呈する正に五度に及ぶ、第六度に至つて化緣已に畢り、傳法慧可を得して以つて、乃ち門人に告けて曰く、緣則ち盡きぬ逝去すべしと、端坐寂を示しぬ、後魏太和十九年丙辰の歲十月初の五日なり、十二月廿八日洛陽嵩州の熊耳峰頭に葬る、塔を定林寺に起す、後ち魏の宋雲使を西域に奉じ、廻程磨に葱嶺に遇ふ、乃ち手に隻履を携へ、翩々として獨り逝くを見、問ふて曰く、師何くにか往くと、磨曰く西天に去ると、又た雲に謂つて曰く、汝が主已に世を厭ふと、雲聞えて茫然たる耳や久うし、磨と別れて東に適く、復命するに暨んで明帝已に登遐せり、孝莊位に即くに逮んで、雲具さに其事を奏す、帝未だ信せず、命して壙を啓かしむ、空棺存するもの唯一隻の革履のみ、百官ために驚歎せさるなし、武帝追憶自ら磨の碑を撰せんと欲

して未た假あらず、宋雲の事を聞くに及んで乃ち之れを成して曰く、嗟夫、見之不見逢之不逢、遇之不遇、今之古之、怨之恨之と、復た讃して曰く、心有也嘖劫而滯、凡夫心無也刹那而登、妙覺と、正宗記に曰く、唐の代宗皇帝に至り、謚して圓覺大師と號し、塔を空觀と曰ふと、只だ疑ふらくは諸物の中に於て何物か無相なる、看ずや靈龜尾を曳く無心空寂ありと雖ども、實は無相にあらず、即ち不起無相たる所以あり、彼の明々たる百草と云ひ、壁立万仞と云ひ、華嚴に三界唯一心々外無別法と說き、法華に是法住法世世間相常住と說くもの、何れか不起底の一句にあらずとせんや、而も無相にあらす、未だ天地分れさるの時、何處に向つて聖と凡とを辨じ迷と悟とを論せんとする、不起底の田地や、法なく塵を絕す、本來物なきにあらずして虛廓靈明、惺々たる明白の心光曠劫を超へ、不昧絕比曾つて他の伴に依らず、以て思量の能く議すべき處にあらざるを知る、最大中の最大なるものにあらずや、宜べあり大を不可思議と名つけ、不可思議を法性と云ふあとや、試みに拈し來れば、佛祖正傳の法門や愈々高く、微妙の不起底、須らく身心の脫落を要し、所謂諸佛の冥機冥應冥薰を要す、庶幾くば一超直ちに如來地に入り、何の階級これなきを得ん、而も片智の半解强へて一色

邊に墮し二光三病に滯るあとをせんか、投機入頭得て期すべからざるに了らんのみ、國國人去るとも他れ亦た回らさるの愚を演するもの、豈に武帝にのみ笑殺し去るを得んや、千古万古空潭の月、清風匝地何の極かある、早下に機位を轉するの手腕あくんば、木人は夜半に履を穿ち去りて、石女は天明に帽を戴へて歸らんのみ、後ち八十有四年を歴て我朝に來遊の事、虎關禪師の釋書に載す、出所恐らくは本朝文粹に記する處の、達磨和尚、富緒河に至つて斑鳩の太子に寄す云々と云ふ、廣の後生の文に據れるものか、吾人得て其信否を知らず、只た其の知らさる處に於て闕如たるは仲尼の明訓、胡居ぞ叨に辯を弄せんや、錄公、達祖を贊するの辭中に曰く、夫れ斯土佛種、萠芽の初め、三草猶ほ未だ概からず、二木亦た蔵帯たり、豈に天香の昌々に堪ゆる所あらんや、惟れ時機の生酸なり、宜べあるかな、吾が祖の餒顔を作せるあとや足跡を印ずるあとあるに至つては、後世屈蟠、三千里の苗根たりと、蓋し万方に遊展して石壁無礙なるものは、菩薩の意生身にして、分身百億、生死自在なるは、諸佛の妙用と聞く、誰か楞伽異説の消息を解するものぞ、

『清水にハ
うらも表も
なかりけり』

息緣と不斷

空朗々地緣思盡、了々惺々常廓明とは、是れ堂山の慧可大師を頌せるの偈語、一連の二句、能く慧可の有相に着せず斷滅に落ちず正偏宛轉の脫躰現成底を謳出して餘蘊なきを看るにあらずや、傳に曰く慧可大師は俗姓を姬氏、洛京武牢の人、父寂、未た子あらざるの時、常に自思すらく、我家善を崇とぶ、豈に令子なくして止まんやと、禱るあと既に久し、一夕異光あり、室を照すあとを感ず、其母因て孕む、乃ち一兒を得たり、長するに及び、曾て照室の瑞ありしに因み、光と名つく、幼より志氣群ならず、久しく伊洛に居して博く詩書に涉り、尤も玄理に精通せりと、慧可、年齡盛んにして家產を事とせず、常に好んで山水の間に逍遙す、每に歎ずらく、孔老の敎は禮術の風規、莊易の書は未だ妙理を盡さずと、因て決然儒道を睡棄して、洛陽龍門の香山に抵り、寶靜禪師に依つて出家し、本穆寺に見を受く、廣く講席に出入して編く大小乘の義を究む、一日般若經を讀み、超然自得の域に達す、時に年卅立に加ふる二、却つて香山に返り、晝夜靜坐するもの、つふさに八載、倏忽として一神人を寂默の裡に見る、可に謂

つて曰く、將に果を受けんと欲せば何ぞ此處に滯るあとをせんや、大道は遙遠なるにあらず汝夫れ南せよと、乃ち名を神光と改む、翌日頭痛するあと恰かも刺すが如し、靜禪師見るに忍ひず、ために之れを治せんとす、時に空中聲あつて曰く、此れ乃ち換骨なり常痛にあらすと、依つて其頂骨を視るに、五峯秀出の狀に似たり、即ち告げて曰く、汝か相告辭たり、將さに所證あらん、神人汝をして南せしむるは、斯れ則ち少林の達磨大師なり、必ず汝か師たるへしと、可その教を受けて達磨大士を嵩山の少林寺に訪ふ、大通二年窮臘の寒天十二月初の九夜なり、左なきだに煖炉風を痛むの時、冬天よし風雪なしとするも、深嶺の幽谷豈に人物の松下に倚立すべきならんや竹節老檜なほ折碎を恐るゝの日、嵩山の大雪、匝地沒峰し、少室の颯風、無數の白團を飛して溪を埋め呎尺を暗ふす單褐素鞋の一孤影、破雪切風して道を求む、吁幾ばくの艱難とかせん、辛ふして庵前に著くと雖とも、庵主の無情なる入室を許さず、而も一廻の傍聊たる與へざるなり、無情の雪は庵主の無情と相組して、いやが上にもいや增して積り行くなり、依然として窓前に合掌して悄立する旅僧の腰下は、今や雪に埋みぬ、面を吹くの山風、寒氣を呼ひ來りて骨隨を徹貫し去らんとす、彼れ吾に辛

らければ吾また無情、風吹かは吹す雪降らば降れ、坐せず休せず竪立不動、只だ曉天の光明を待つのみ、而も彼の無情は庵主の無情の如く無情なる能はず、そゝろ落涙の滿々を禁ずる能はず、禁せんとして猶ほ落ち來る涙を見ては、却つて涙を亟ぬるのみ、不甲斐なき身を省みては却つて亦た身を顧みるのみ、忽ち奮然として自惟すらく、昔人道を求むるに骨を敲て髓を取り、血を刺して饑を濟ひ、髮を布き泥を掩ひ崖に投して虎に飼ふ、古へ尙ほ此の如し我れ又た何人ぞと既にして天は遲明の頃を示しぬ、達磨大士僅かに戸を開し慈可に問ふて曰く汝久しく雪中に立つ、當に何事をか求む慈、可悲涙して曰く、惟だ願くは和尙慈悲、甘露門を開き廣く群品を度し給へと、情願切々人の肝を動かすを覺ゆ、而して達磨は何とか云ふ、乃ち曰く、諸佛無上の妙道は、曠却精勤して行へがたきを能く行じ忍ふに非るを而も忍ぶ、豈に小德小智、輕心慢心を以つて眞乘を冀はんと欲せんや、徒らに勤苦を勞するのみと彼れは未た積雪堪風を以て輕心のなす處とし、終夜不動を以て慢心の致す處とするか乃ち戸を閉ちて又た語らず、可たるもの焉んぞこの慈誨に接して奮勵せざるを得んや、密かに利刀を採つて自ら左臂を切斷して呈す、達磨大士之れを見て其法器な

るを知り、示して曰く、諸佛最初に道を求む、法の爲めに形を忘る、汝今臂を吾が前に斷つ、求むることと亦た可なる在りと、因て與めに名を易て慧可と云ふ、爾來左右に給士する將さに八星霜一日大士に問ふて曰く、諸佛の法印、得て聞くべきかと、達磨曰く、諸佛の法印、人より得るにあらすと、可又た問ふ、我心未だ寧からず、乞ふ師ために安んせよと、曰く、心を將ち來れ汝がために安んせんと、可曰く、心を覓むるに不に不可得ありと、曰く、我れ汝がために心を安んじ竟んぬと、有る時又た示して曰く、外諸緣を息して內心喘ぐことなく、心牆壁の如くにして以て道に入るべしと、而も多言多慮轉た〻相應せざるなり、果然慧可は尋常說心說性すれとも道理に契はず、蓋し事を執する元是れ迷ひのみ、言を承ては須らく宗を會すへきなり、乃ち大士は秖た其非を遮るために無念無體を說かさるのみ、室中玄機を見るに曰く、有る時達磨大師に侍して少室峰に登る、達磨問ふ道何の方にか向つて去ると、可曰く、請ふ直ちに進前せば是と磨曰く、若し直ちに進まば一步を移すことを得ず、然り須らく回光返照の退步を學すべし、知らずや當到觸着すれば彌大の罪、退步承當特地に新なることを、可の神機豈に遣箇の消息を契悟せずして止まんや、他日大士に告げて曰く

我れ既に諸緣を息むと、何ぞ夫れ突如たるや、是れ謂ふ處の身心脫落と同か將た不同か、大士曰く、斷滅と成し去るあとあしや否やと、君笑ふ勿れ、是れ孫兒を思ふ老婆の親切なり、可曰く、斷滅を成さずと、蓋し實參の實語、大士曰く、何を以つて驗を爲んと、可曰く、了々として常に知る、故に言の及ぶべきにあらすと、法華經に曰ふ、唯獨自明了、餘人所不見と、又曰く、諸法寂滅相不可以言宜と、可は則ち斯經の心を會せるものに非ずや、宜べあり達磨、彼れを稱して、此れは是れ諸佛所證の心體あり、更に疑ふあと勿れと云ひしあとや、遂に即ち衣法共に附して曰く內法印を傳へて以つて證心に契ひ、外袈裟を附して以つて宗旨を定むと、故に可を稱して震旦の第二祖とあすあり、達磨圓寂を示せしより、可繼へて禪林の玄風を闡きぬ、恨むらくは老松の梢ます〳〵高ふ茂て、愈々風に嫉まる、仲侃、辨和の邪說に惑ふて可に加ふるに非法を以てす、時に年一百七歲、即ち隋の文帝開皇十三年癸丑の歲、春三月十六日あり是より先き、可法衣を僧璨に附囑して曰く、我れまた宿累あり、今必ず之れを酬んと乃ち鄴都に於て隨宜說法す、一音演暢すれば四衆讚歎す是の如きもの三十載、韜光跡を混じ儀相を變易す、酒肆に入り屠門を過き、進んて街談を習ひ厠役に隨ふ、眞箇

身心脱落底の鉄牛漢ならさるよりは焉んぞ夫れ斯の如く、正偏の宛轉を滑脱おらしむるを得んや、當時一人あり可に問ふて曰く、師は是れ道人、何が故に是の如くなると、可聞えて大笑一過、乃ち徐ろに答へて曰く、我れ自ら心を調ふ、何ぞ汝が事に關せんと、後ち笑城縣醫救寺の三門の下に於て、無上道の法要を開演せるに聽衆林の如く會す、辨和法師なるものあり、時に同じく寺中にあつて涅槃經を說く、學徒一たび可の法を聞くを聞えて、稍々として引き去る、蓋し理數の當に然るべき處、惜むらくは辨和未だ此理に躰達せず、猥りに勝德の高士に向つて憤慢の凡情を發し、邑宰翟仲侃に讒謗の毒舌を致す、遂に仲侃をして無罪の可、而も白頭の老顏を處斬せしむるに至る、曾て聞く希臘の聖哲ソクラテース、無辜に誣へられ笑つて毒酒を一呑下し去り、猶太の賢聖キリストは、兇徒のために十字架に揚げられ、猶ほ天に向つて彼等の罪を謝せしとかや、慧可亦た怡然として委順聊かも逆はず、却つて自ら宿債を償ふとなす、吁古鋭心を照らし東西共に感應道交するものにあらさるなきを知らんや、正法眼藏行持篇に曰く、初祖幾千万の西來ありとも、二祖若し行持せずんは今日の他學措大あるべからすと、眞に至言と謂ふへし、達磨大士初めて西來し、長く

箇大の眞機を待つて久しく默然、一たび慧可を得るも曾て指說するなし、唯だ外諸緣を息して內心喘くことなく、心牆壁の如くにして以つて道に入るべしと云ふ、實に是れのみ、可また了々として常に知ると、即ち諸佛の所證や茲に盡く、何ぞ古今を以つて分ち、自他に依つて隔つべきあらんや、是の如く能證所證や以心傳心や、不遠和同し來りて東西に傳通し賢愚に融接し去るの活機、誰か瓊紙裏に求めんとはす る、山は突兀海は漫々、外諸緣を息むれは內萬慮おく惶々として昧さず、了々として本と明かなり、語に曰く身心脱落脱落身心と、予は慧可大師に於て其實を識るを得たり、後日磁州滏陽縣の東北七十里の淨地に葬し了んぬ、唐の德宗皇帝、追贈して措かず、乃ち大祖禪師の大號を諡すと云ふ。

覓罪と懺悔

若し夫れ一部の信心銘、之れを字數の上より云はゞ僅々五百八十四のみ、即ち至道無難唯嫌揀擇より言語道斷非古來今に至る素と一紙大に過きず、而も其内容たるや、優に祖門禪林の骨目たるもの、歴代の祖師之れを擧揚せさるなく、趙州古佛の流尋常之れを信愛して自行化他の要諦としぬ、彼れ宗門の第一書碧巖錄また之れを出す一再に止らず、就中洞上の尊信最も甚たしく、永平祖錄の中、之れを拈擧するもの今數ふるに閑なきを覺ゆ、且つ眞歌は拈古し整祖また拈提す、何ぞ夫れ整々たるや而して之れ實に三祖大士僧璨禪師の作る處、單に文の俊を以てしても百代の鑑とするに足る、而も是れ悟道の餘瀝に過ぎさるなり。

僧璨大師は其何れの許の人なるや得て知るべからさるなり、傳燈錄二十九祖章に云く、一人の居士あり年四十を踰ゆ、名氏を言はず、事に來り禮を設けて二祖に謂すと、然り彼は終世氏名を言はさりき、蓋し聞く彼れは素癩病の人、則ち祖先の名氏を汚さんを慮り、終に自ら其生所すら昧ませるに非るなきを得んや否や、姑め僧璨可。

大師に問ふて曰く、弟子の身、風恙に纏はる、願ふ和尚罪を懺し給へと、果然彼れは其天刑の難病に苦困しつゝありしなり、可曰く、罪を將ち來れ、汝かために懺せんと、是れ達磨の二祖に對せると同一の筆法、　良久して曰く、罪を覓むるに不已得なりと彼れ既に二祖の心印を會了せる非すや、可曰く、我れ汝かために罪を懺し覓んぬ、宜しく佛法僧に依つて住すへしと、知らす慈可自ら此言あり曾て達磨に謁せる時のことと、今昔の感夫れ多少ぞや、璨曰く、今和尚を見るに已に是れ僧なるあとを知る、未だ審らず何をか佛法と名つくと、餓虎の食を養るに似たり、可曰く、是れ心是れ佛、是れ心是れ法、法佛二なし僧寶亦た然なりと、草庵を出つるの時孔明既に三分の計を一定しありと知らずや、璨の慧俊豈にこの慈訓に會了せすして止むべき、乃ち曰く今日始めて知んぬ、罪性内に在らす外に在らす、中間にも在らす、其の心の如きも然り佛法また無二なりと、蓋し罪性云々の句、本と維摩經弟子品に出づ、聞ふに璨曾つて之れを讀みて疑ひ決せず、今可祖の直指に依つて、從來の疑團、忽然として瓦解氷消す、則ち今日始めて知んぬと言ひし所以なるか、可大師の喜ひ想ふべきなり即ちために剃髪して曰く、是れ吾が寶なり宜しく僧璨と名つくべしと、氏名ためにあき風

恙の一居士は、今や吾寶と稱され僧璨とはなりぬ、其年三月十八日、光福寺に於て受具す、然りしより以來、病患漸くにして愈えぬ、蓋し癩病は常疾にあらず、業障の致す處、罪性の不可得を了知し、心法如然を學悟せるの璨や既に本來自性の清淨なるあとを識得して、正に死此生彼の差異を脱却せり、何ぞ罪業と善根との辨知あらんや四大本と是れ空五蘊遂に存せず、父母所生の眼、悉く三千界を透破して、今や皮肉骨髓を解脱し了んぬ何れにか風恙の病障あつて本來の清淨心を現前せさらん、唯た知らず得道奇特の消息、誰あつてか會了せん、讃謗は讃謗のみ璨の食患と何の關する處ぞ、既にして方丈に執侍すること、正に二載を經たり、一日可大師璨に告げて曰く、菩提達磨遠く竺乾より此の土に來り、正法眼藏を以つて吾に密付せり、吾また汝に授くと、乃ち偈を示して曰く本來緣有地因地種華生本來無有種華亦不曾生と、衣法共附囑し了つて又た曰く、汝已に得法すと雖ども、暫らく深山に處すべく、未た行化すべからず、當に國難あるべしと、璨即ち舒州の皖公山に隱る、果然、後周の武帝極力佛法を破滅せんとするに逢ふ、依つて變形以つて太湖縣司空山の間に往來し、居するに寧處なく、實に十餘載の困苦を積む、時人能く知るものなし、沙彌道信なるもの

あり、後ちの四祖大醫禪師即ち是れ夙に璨公の會下に參して省悟す、一日璨、道信に告げて曰く、先師吾傳通して、より鄴都に往きて三十年を經ぬ、今吾れ汝を得たり何ぞ此に滯らんやと、即ち羅浮山に適て優游すること二載、後ち舊址に還る、士民奔趨して大に檀供を設けて招待深厚の禮を極む、璨乃ち四衆の爲めに、廣く正法眼藏の心要を宣說し訖つて、法會に於て大樹の下に、儼立合掌して終る、隋の煬帝大業二年丙寅の歲、冬十月十有五日なり、時に士民不安の頃、未だ之れを塔するに遑あらず唐の玄宗天寶五年に至り趙郡李常、官に舒州に移る、璨の墳を發ばき之れを焚くに舍利を得たり、事、朝廷に聞す、玄宗依つて鑑智禪師と諡し、覺寂の塔と稱ぜしむ、蹈ふ處の信心銘は則ち其宜說せる心要の語を錄せるもの、子細に參徹し看んか、更に藏身することを見ず他は是れ目前の法にあらず、又た耳香の所到にもあらざるより而も一絲毫の礙滯あるにあらず、一微塵の異路あるにもあらず知らず騎鳴鶴唳幾時か休せん、性空本來內外長短の對待なく、万象の中の獨露身なり、歸業と菩提と即空ならば蹤跡何の處に留まらん、靈法界是れ心、靈沙界是佛、本より閑かなり、法と云ひ僧と云ふ亦た是の如し、等しく是れ姓空の脫躰的現成、自ら明了ならんのみ。

無縛と解脫

璨祖曰く、心空淨智無邪正、箇裏不知縛脫、何縱別五蘊及四大、見聞聲色終非他、と、是れ道信大師を頌せるの語、本來解脫求の心空、何れに邪正の對待あるを得んや、既に是れ解脫の當躰なり箇裏縛脫むへきなきや當然のみ、豈に四大五蘊のみと云はんや、一切の諸法何者か一元より起らざる無住の本根より万法を立するも万法還つて一に歸するを見よ、一即一切々々即一動靜轉止悉く是れ心空淨智の脫躰現成なりと知らすや、而も這箇を了得せる道信とは抑も如何なる怪物とかする。

傳燈錄及ひ正宗記等の書を案ずるに、諱は道信、俗の姓は司馬氏、世々河內に居せしが、後ち蘄州の廣濟縣に徙る、信生れなからにして群儿に超異し、幼より空宗諳の解脫門を慕ふ、宛として宿習の如かりしと、隋の開皇十二年壬子の歲、信の年始めて十四、三祖僧璨に參し、問ふて曰く、願くは和尙の慈悲、乞ふ解脫の法門を與へよと、是れ二祖三祖得脫初因の問處と同一の急点、璨の曰く、誰か汝を縛すると、是れまた一祖二祖の答處と一徹なり、信曰く、人の縛するなしと、果然々々、璨曰く何ぞ更に解脫を

求むるやと、然り是れ信のために解脫の法門を與へ覺れるなり、信の大機、言下に契悟せるもの當然の理數にあらずや、乃ち璨公に侍執して服膺勤勞するもの九星霜の久しきに及ぶ、後ち吉州に於て受戒し、侍奉するあと尤も謹めりと璨公屢々彼れに試むるに玄微の事を以てす、而して今や熟緣の期なるを道破ま、衣法を以つて信に付して偈すらく、華種雖因地。從地種華生。若無人下種。地盡無生。と、乃ち祖風を續き攝心寐るあとなく脇席に至らさるもの六十載、唐の高祖武德七年甲申の歲、鄧たる靳春に返り破頭山に住せるに、學侶臻集雲の如し、貞觀癸卯の歲、太宗皇帝、信公の道味を嚮ひ風彩を瞻んと欲す、詔して京に赴かしむ、信上表して遜謝す、而も許さす詔下三たひに及ふ、信終に疾を以て辭す、帝四度の使に命して曰く、如し果して起たすんは即ち首を取り來れと、使者至り旨を以て諭す、信聞き訖つて乃ち頸を引べ刃に就かんとして神色自若たり、使者加ふるあと能はず、廻つて狀を以て奏聞す、帝彌々歎慕の情を加ふるのみ、特に珍給を賜ひ以つて其志を遂けしむ、高宗の永徽辛亥の歲閏九月四日、突忽として門人に垂誡すらく、一切の諸法悉く皆な解脫す、汝等各々自ら護念して未來を流化せよと、言ひ訖つて安坐圓を示しぬ、卅壽七十有二、本山に

塔す、翌年夏四月八日師の塔戶故なくして自ら開く、俄相宛として生前の如かりしとかや、爾後門人ために敢へて復た閉ちずと云ふ、後ち代宗の大曆中に諡して大鑒禪師の號を賜ひ、塔を慈雲と稱す、醵つて想ふ佛者は三界の大導師なりと聞く、一期帝威の四命に動せず、辨道修練して所志退せず、死期尙ほ解脫の法門を開宣して生死無縛の理を了知せしむ、予は道信大師に於て大導師たるの實例を得たるを喜ぶ實に千歲の一人、超絕非凡の聖者にあらずや、佛家の修練、總べて解脫の法門と號すれども主佛猶ほ他を縛することあし、更に何の生死あつてか强へて解脫せんとはする、謂ふ處の解脫の法門とは何ぞや、行住坐臥喫茶屙屎、從本來寂滅相即ち是れ、元より身心迷悟の論量し得へき境界に非るあり、彼の心と說き境き、煩惱と云ひ菩提と云ふ、等しくあれ自性の異名に過きず、即ち名は千殊なりと雖も躰に二致なし、試みに問はん迷と云ひ悟と云ふの人よ、那箇か是れ迷にして這箇に是悟なる、と、返照一番各自に看んか、風情を盡して別に聖解おきを知らん、既に之れを知んぬ豁として十方の佛元と是れ眼中の花と眺し來るを見るべし、茲に於てか山河隔てなく水波別異なし、且つ夫れ進一步、這般解脫の難關を超越し去らんか、佛向上の事理たる卅

尊知らす祖師知らす、所謂無縛無解彼なく此なし、又た何の故あつてか事々名を立し物々形を分たん、而も欲色無色の見三界あり、而して彼れに苦酢甘辛醎淡の調味あり、唯た要す、味ひ來りて滋味おき處、曰く美味あり、見去つて色塵を絕する處、曰く眞色あり、即ちこの處底を會了する是れのみ、果して這箇の田地に至り得せしめは其人即ち四祖と一躰、四祖また正に其人と別異なからんなり、知らず、無縫塔の戸窓忽然として開け來るの消息、誰か是れを會得するものぞ、生前の相貌、容容として顯現し來ると云ふにあらずや。

何姓と性空

信大師、一日黃梅路上に出遊して一の小兒に逢ふ、骨相奇異にして常童に秀拔す、乃ち問ふて曰く、汝何の姓ぞと、知らす四祖何の姓をか問ふ、童子答て曰く、性は即ち有り是れ常姓にあらすと、銳鋒當るべからす、信又た問ふ、是れ何の姓ぞと、問ふ處兎去つて尙ほ株を守るに似たり、童子の曰く、是れ佛性と、彼れは帷幕の內にあつて既に勝つまとを千里の外に決しありしに非ざりしか、信重ねて問ふ、汝姓おきやと、玆に初めて兎の去りし跡を看しか如し、童子曰く、性空なるか故に無おりと、吁この童子何等の奇特ありてか、爾かく礙滯なきを得る、果然、道信獸々の裏に其法器なるを識り、侍者をして彼の母に請ふて出家せしむ、時に年僅かに七歲おりきと、吁あの七歲の童子を誰とかおす、敎外別傳佛心の宗乘第三十二祖、東土の五祖と稱され達磨の衣法を大醫禪師より附囑せられたる、黃梅弘忍大師即ち是れ、鑒山頌して月明水潔秋天淨、豈有片雲點大清と云ふもの、實に忍師の心髓を得たりと思ふ、請ふ先つ彼れの世歷に看ん。

弘忍大師は、蘄州黄梅縣の人、俗姓は周氏、蓋し母の姓なり、父なくして生れたるを以て、人呼んで無姓兒と云ふ、生れて岐嶷、童遊の時一の智者に逢ふ、歎して曰く、此子七種の相を闕て如來に逮はずと、後に大師に遇ふて得法し、化を破頭山に嗣く、信大師彼れに弘忍と名づけ、付法傳衣の時偈を示して曰く、華種有生性、因地菩生々、大根與信合、當生々不生と、遂に學徒を以つて之れに委す、信大師一日衆に告げて曰く、吾れ武德中に廬山に遊び、頂に登り破頭山を望み、紫雲蓋の如く白氣あつて横に六道を分つを見き、汝等會すや否やと、衆皆默然たり、忍師の曰く、是れ和尚他後に横に一枝の佛法を出すあからんやと、意眼天に通するか如し、信師曰く、善しと、然りしより後ち、終に上元二年に至り、忽爾として徒に示して曰く、吾が事既に畢んぬ、則ち行くべしと、直ちに室に入り、安坐して逝きぬ、壽七十有四、塔を黄梅の東山に建つ、顧ふに兩祖初遇の時の姓論や、父に稟けず母に受けず、佛に繼かず祖に繼かずして本然の姓はあるあり、謂ふ處の佛性是れのみ、抑も參禪學道する何の爲めぞ、元と是根本の義に達し、心性の理を廓明せんがためにあらずや、假令死に死に死んで生れ生れ、面々形を異にすとも、心性焉んぞ變改あらんや、何に況んや本性四姓を以て辨じ

得べき、知るべし、情執の所見、身體髮膚是れを父母に稟くと雖ども、身即ち五蘊に非すとせば、總べて我に伴ふものあきと同時に、已と異なるものあきことを、宏智禪師その廣錄の中に、忍大師を眞讃して曰く、前後兩身、今古一心と、生々の身々既に一にあらずと雖ども、前際後際二心あしと知らすや、宜べなり古人の一切衆生、從無量劫來不出法性三昧と云し事や、這般の消息を體得し踐得し了せば、廓然として自他の隔なく古今の別あきの實踐に相應し得んなり、蓋し法性の全躰、露堂々として靈源明かに浩潔たり、本來一物あしと體達せば、我心秋月の如くして碧潭毫塵を留めず何等無明の片雲あつてか、法性自清の大淨を汚點し得ん、熱鉄盤上曾つて寸塵の立つを許さず、法性本來空なるが、故に著し持ち來るも、忘塵を置くに處あきを奈何せんや、代宗皇帝追尊して謚を大滿禪師と賜ひ、法兩の塔と號せしむ。

米白と未篩

打臼聲、高、盧碧外、實に黄梅の三下は古今を裂破して佛々祖々を震愕せしむ、然かも聾盲は雷霆の霹靂すら知らざるあり、嶽雲白月夜深清、曹溪の三箴は優に師資の證契を傳ふと雖ども、餘人の窺ひ知る處にあらざるを爭何、雲もおく月も桂も木も枯れて拂ひはてたるうはの空かおとは、是れ慧能大師心印の消息を詠めるの詞藻にあらずや、僧問す慧能とは抑も如何んの人ぞ。

俗姓は盧氏、慧能とは其名なり、其先は范陽の人ありしが、父行瑫、武德中故あつて南海の新州に左官せられ、遂に占籍して永住の地とおしぬ、能幼にして嚴父を喪す、其母頗ぶる淑德貞操なり、堅く志を守つて子を鞠養す、貧窶つぶさに辛慘を極はむ、能は孝心の士なり、如何にして慈母懇育の深恩に報せんとする、風は破窓を射て燈影暗らく、月は疎屋を穿ちて夢猶ほ結び難し、吁大母のためならば、身の辛苦何をか辭せん、破れ蓁沓苔衣、裾を結んで肩にかけ、峨々峭峻の溪に下り、水を汲みては菜を摘みて、供奉の資とし、或は巖々として物凄き山陰に孤狼の叫ふを聞きおかから薪を樵

りて市に賣し、米に代へての活計は、實に千日の粟のみに非るなり、今日は雨さへ蕭々として梢の風は劒にも似たらんかし、谷の小男鹿、峯の蟬、一聲の松の風、池水に映る雲の影、皆な觀念の便りかと、荷ひて通ふ伏柴の、薪賣りてん、いざ市中にと、行くや行手の或家に、客の經を讀むを聞きけるが、應無所住而生其心と云ふに至りて、そゞろ感歎の情に堪えず、乃ち客に問ふて曰く、此れ何の經ぞ、何れの人にか得たると、客答へて曰く、此は金剛經と名づく、黃梅の忍大師に得たりと、能聞き訖つて家に歸り母に告くるに聞經のことを以てす、依つて法のために師を尋ぬるの意を明かし、扶別の恩命を請ふ、何等哀憐の悲劇ぞや、母に孝なるの子、而かも一人の子を杖柱と使る外おきか弱の母を棄てゝ行かんとする孝子の心中、夫れ多少の胸裂ぞや、木々の下露木の葉の雫、それならずくに袖に傳ふは血か涙か、母は女なり、さすがに恩愛不能斷、飛立つばかりの哀れさに、引止めんと思ひの外、心の雲も秋の夜の月、はれ〳〵しくも歸せしは、母こそ實に慧能の母なりき、笛に寄る鹿、火に入る虫、愛欲故に苦しむ世の中に、おの母子ばかり如何に殊勝の事なりしとするぞ、道元禪師、その正法眼藏行持の卷に於て、たちまちに老母を捨てゝ大法を尋ぬ、おれ奇代の大器あり、拔群

の辨道なり、斷臂たとひ容易ありとも、この割愛は大難あるべし、この割愛は輕かるべからずと記されしもの、誠に翻忘の言には非るなり、能はいよ〳〵母をのおして家をば立出でぬ、母はあとに悄然として行く子を遙かに見送れり、白居易の詩に曰く、南浦凄々別西風嫋々秋、一看腸一斷、好去莫回頭と、母子の情、恐らくは是れに增すもののありしおらんか、能行く〳〵韶巡に於て高行の士人、嗣志略に遇ふ、一見奮交の如し、尼無盡藏は、即ち志略の姑常に好んで涅槃經を讀む、能端坐之れを聽き訖つて ために其義を解說す、尼即ち其字を問ふ、能の曰く、字は識らず、曷んぞ能く義を會せんやと、能の曰く、諸佛の妙理は文字に關せずと、一言能く博學の尼公を驚殺しぬ、次で昌樂縣の西、岩室の間に至り、智遠禪師に逢ふ、遠の示に從ひ、辭し去つて黃梅の會下に造り、忍大師に參謁す、忍師能に問ふて曰く、汝何れより來れると、能答へて曰く嶺南よりと、忍師重ねて曰く、何事をか須めんと欲すると、能曰く、唯た作佛を求むと忍師笑つて曰く、嶺南人佛性あし、若爲んが佛を得んと、能決然として曰く人には即ち南北あり、佛性豈に然らんやと、夫れ忍師は人を知るの人あり、乃ち訶して曰く、槽廠に著き去れと、能諾々として忍師の足を禮し、退へて即ち碓坊に入る、勞に杵臼の

間に服くること八ヶ月、一日忍師、衆に告げて曰く、正法解しがたし徒らに吾が言を記し、持して已が任と爲すべからず、汝等各自意に隨つて一偈を述べよ、若し語意冥符せば則ち衣法共に付せんと、上座神秀あるものあり、偈を作るあと成る、已に數度呈せんと欲して、堂前に至れば、そゝろ心中恍惚として偏身汗流搬して呈する能はず空しく四日を經たり、遂に乃ち南廊の壁間に一偈を書して曰、身是菩提樹、心如明鏡臺、時々勤拂拭、勿使惹塵埃と、忍師經行して忽ち此の偈を見、則ち秀の述する所を知り、讃歎して曰く、後代之れに依つて修行せば、亦た勝果を得んと、時に能碓坊に在り偈を誦するを聆えて、同學に謂つて曰く、美なるかとは則ち美なり、了するかとは則ち未た了せずと、夜に入りて能自ら燭を秉り、童子をして、秀の偈の側に一偈を寫さしめて曰く、菩提本非樹、心鏡亦非臺、本來無一物、何假拂塵埃と、忍師また是れ能の偈する處と知り、乃ち衆に謂つて曰く、是れ誰か作る、亦た未だ見性せざるの人なりと夜に逮んで忍師竊かに能の碓坊に至り、問ふて曰く、米白まりしや也た未だしやと能の曰く、白まれり、未だ篩るあらざるのみありと、忍師默然たり、杖を以つて曰を打つこと三下、能亦た無言、箕の米を以つて三たび簸ふ、忍師笑爾として出て去る、能

欣然として入室す、忍師乃ち衣法共に能に付し訖つて曰く、昔し達磨初めて至る、人未た信せず故に衣を傳て以つて法を得ることを明す、今信心已に熟しぬ、衣は乃ち爭の端なり、汝が身に止めて復た傳へざれ、且らく遠く隱れて時を俟つて行化すべし、所謂受衣の人は命、糸を懸るが如しと、能曰く、當に何れの處にか隱るべきと、忍師の曰く、逢懷即止、遇會且藏と、能感泣禁ずる能はず、衣を捧けて師室を出つ、黃梅の麓にあつて一條の流れあり、忍師自ら送つて靑嶮の上に立つ、能拜膝師を揖して曰く和尙願くば速かに還り、久しく子を勞せしむる勿れ、我は既に得道し了んぬ、正に自ら渡らんのみと、忍師曰く、汝既に得道すと雖ども、我猶ほ渡すべきなりと、月下の碧潭、一葦二聖を乘せ、忍自ら竿を採つて彼の岸に渡たしぬ、忍師は再ひ舟に棹さし還るなり、能獨り陸に向ひ師をあとにして長途に登る、師資の情趣を知るもの、たゝ靑空の月と、澗溪の水とあるのみ、舟中陸上見返り見送るの時、谷を隔てし谷の風、谷の嵐に吹きつれて、餘處の梢や歎くらし、果然一山七百の衆知るも絕えてなし、あれより忍師上堂せず、來りて咨問するものあれば、我が道行きぬ、何ぞ更らに之れを詢んと、一人あり問ふ、師の衣法何んの人か得たると、忍師答へて曰く、能くするもの得

たりと、茲に初めて能師の得たるを知り、即ち共に奔り逐ふ、時に惠明あるものあり鄱陽の人、嘗つて署を受けて四品將軍の號あり、少して永昌寺に出家し、道を慕ふて忍師の會下に依る、衆人と共に能を逐ふ、卒先して大庾嶺上に能師を追著す、能師乃ち、以爲らく此の衣は信を表す、力を以つて爭ふべけんやと、衣鉢を取つて盤石の上に置き、叢林の間に隱る、惠明至りて、之れを揭げんと擬するに、又大盤石の如し、惠明豈に畏れざるを得んや、乃ち歎聲を發して曰く、我れ法の爲めに來る衣のために來るにあらずと、能師遂に草間より出でゝ盤石の上に端坐す、惠明禮を作して曰く、望むらくは行者、我がために法要を示せと、能師の曰く、不思善不思惡、正與麼の時、那箇か是れ明上座本來の面目ぞと、明言下に省あり、復た問ふ、上來の密語密意の外、還つて更らに密意ありや否やと、能師曰く汝がために語るものは即ち密にあらず、汝若し返照せば密は汝が邊りにあらんと、明の曰く、惠明黃梅に在りと雖ども實に未だ自己の面目を省せず、今指示を蒙むる人の水を飲んで冷暖自知するが如し、今行者は即ち惠明が師なりと、乃ち再會を期して東西に分る、然りしより後、能師懷集四會の間に隱るゝ正に十年、儀鳳元年丙子の歲、春正月八日、南海に屆りて印宗法師の法

性寺に於て、涅槃經を講するに遇ふ、能師廊廡の間に寓止す、正に是群羊未だ睡獅を知らざるの時、幡風高く吹いて刹旛を飜颺す、二僧あり對論するに曰く、一は師の動なりと、一は風の動なりと、往復酬答、宛として鵑鳴の如く蛙噪に似たり、睡獅は微音に眼を醒まして起てり、能師乃ち出てゝ曰く、俗流の輙く高論に預るあとを容るゝ可きや否やと、二僧の曰く、諾すと、師能直進して曰く、風の動くにあらず、旛の動くにもあらず、仁者の心動くのみと、時に印宗の此の語を聆き竦然として覺えず起立し能師に問ふて曰く、行者は定んで常人にあらざるべし、師は是れ誰とかすると然り白樂にして始めて千里の駿を知る印宗また多少の人ぞや、能師具さに實を以つて告ぐ、印宗遂に弟子の禮を執り禪要を受けんと請ふ、次て二月八日、法性寺の智光律師に就て滿分戒を受け了つて、明年二月八日、衆に告けて舊隱に歸らんと要す、時に印宗緇素千余人と與に、能師を送つて寶林寺に歸す、韶州の刺史韋據なるものあり師を請じ、大梵寺に於て妙法輪を轉ぜしむ、並びに無相心地戒を受く、門人紀錄して一書となす、有名なる六祖檀經とは即ち是れなり、後ち曹溪に返り、廣く大法雨を降らし甘露の門を開く、學人常に千數の上に出てしと、世壽七十有六、沐浴して端坐示

寂す、顧ふに慧能や嶺南の賤樵、碓房の庶者のみ、元と斧伐を習つて溪間に游涉し、竹つて明窓の下、古鏡照心の學得あるにあらず、金剛の一句に發心し、杵臼を碓坊に勤勞すと雖とも、未だ一たひも席末に參して、坐禪の問道の學解ありしを聞かず、而して僅々八ヶ月の精勤、能く明鏡非臺の照心を會了せるは何ぞや、即ち瀉瓶の時に曰く、米白まれりや也た未たしやと米粒本と是れ法佛の眞苗、逃悟の命根、冒つて荒田にありと雖とも自長して脫白露淨たり、未た篩らさることありと雖とも、篩り來り簸り去れば、內外上下行くとして善ならさる處なし、打臼の三下、米粒自ら並して心機倏然として顯現し、箕米三簸して禪風曹師に傳はる、誰か禪悟の徹底に對つて、解文參禪の能否を問はんとはする、彼の一言半句を把持して家門の法道云々と云ひ一知半解を拈擧して圓頓の運載喃々と云ふ、何ぞ妄稱胡乱の甚たしきや、若し道裏の消息を會了せんと要せば、曰く曹溪ありと、唐の憲宗追尊して大鑑禪師の號を謚し、塔を元和靈照と稱せしむるもの、即ち慧能大師の事是れなり。

「梅のはなとたへて曰くうめの花」

聖諦と階級

問ふて曰く、當に何の所務か即ち階級に落ちざる、答て曰く、汝冒つて什麼をか作し來る、曰く、聖諦も亦た爲さず、曰く、何の階級にか落ちん、曰く、聖諦も尙ほ爲さず、何の階級か之れあらんとは是れ靑原の行思禪師が、冒つて曹溪の法席に參せるの日、慧能大師に依つて得たる問答の會處にあらずや、大智禪師、這箇の消息を偈して曰く

聖諦不爲階級無、能離澗水鳳蒼梧、見聞一々隨他去、日用都如井觜驢、

と、想ふに烏道本來猶絕跡然り日用の往來直ちに烏道本來空の道程たり、而も空と云ふと雖も空相にわらず、烏道と云ふも跡を留むるあきなり、換言すれば烏道は聖諦不爲、猶ほ虛空の如し、則ち獨立無伴の境界、何邊に向つて水鳥往還の跡を尋ねんや、豈堪玄路覓階級、玄々微妙の一路、十聖三賢等の階級を覓めて得さるは當然のみ、而も當處を離れずして常に湛然、離れて覓れば永却看るべからさるに終らん、云ふことを見ずや、學人の洞山に問ふことを、曰く、如何んか是れ烏道と、洞山曰く、一人に逢はすと、又問ふ、如何んが行かんと、山曰く、直ちに須らく脚下無私にして去るべしと、知らす此消息

を會了せる行思禪師とは、果して那般の人とかする。

傳燈錄の記者曰く、吉州青原山の行思禪師は、本州安城の人、姓は劉氏なり、幼歲にして出家し、群居して道を論ずるおとに師唯り默然たりきと、次て曹溪の會下に於て能大師のために法器視せられ、學徒千數の首座に居る、慧可言はざれとも、達磨之れを得髓と謂ふに同じ、既にして得法して吉州青原山の靜居寺に住し、曹溪と共に化を比す卒に石頭を接してより曹溪麟下の衆、先を競ふて來り集まる、蓋し石頭は曹溪の法眷、能大師の命に依つて思師に繼げるなり、後ち唐の開元二十八年庚辰歲冬十二月十三日、陞堂衆に告別し、跏趺して永逝しぬ、僖宗皇帝ために弘濟禪師諡眞の塔諡とす、蓋し曾つて群居論道の時、殊に唯り默然たりしもの、誰か不群の功夫用心を知らんや、果然刀斧斫れども開かざるの田地に徹通し、究到し盡し來りて聖諦も猶ほ爲さず、何の階級か之れあらんと云ふ、然り假令階級を立せんとするも、空裏元より立すべきの界畔おきを奈何せんや、彼の依文解義の徒、聖諦不爲の痕字を捉ひ來りて、一切法空の見をおし、萬法泯絕の解をなす、特に看すや、聖諦虛明の田地、果日よりも明かにして、不爲靈廓の眞性は了々たる圓明の智あり、明々として覆藏せざる

の身や、四大假和合の動靜を以て辨すべきにあらず、了々たる圓明の智や、思慮分別の覺知にて論量すべき分際にあらさるあり、而もこの覺知は圓明の智を離れず、動靜また靈廓眞性の他に覓むへきにあらす、即ち見聞境智に緣依せざるの處、直ちに其脚下を洞見し看よ、惺々焉として不問の智あり、明々然として不覺の靈契あるや必せり、予曾て之れを先哲に聞く、多言多慮轉たゝ相應せず、絕言絕慮處として通せざるおしと、但し思禪師會裏の消息を了せんとするの時、人々須らく其舌を祝よ、尙ほ在りやおしやと、謂ふ無舌の人をして解語せしめ、無耳根の漢をして聞持せしめて正に那人をして點頭語笑せしめんかな、唯た知らず那人とは抑も那人ぞや返照一番し看よ

非無と拂子

疑はず有無の言師資既に明了あるあとを、然かも今何をか拂子と云ひ、何をか西天亦たなしと云ふや、常用の物、由來議論に依つて得へきには非るなり、看よ青原拂子を擧して曰く曹溪還つて這箇ありや麽やと、希遷の曰く、但た曹溪のみにあらず西天にも亦たなしと、原曰く、汝曾つて西天に到るあとなしや否やと、遷曰く、若し到らば即ちあらんやと、原曰く、未在更らに道へと、遷曰く、和尚も也た須らく一半を道取すべし全く學人に靠るあとなかれと、原曰く、汝に向つて道ふことを辞せず、恐らくは已後人の承當するあけんと、遷曰く、承當は無にあらず、人の道得するあしと、原乃ち拂子を以つて打つ、遷打下に省悟して青原の法嗣となれるを、蓋し原の行思大師や、人と爲り餘と同じからず、曾つて二三に落ちず一以つて之れを貫くの人、拂子を一提々起する百千端、而して希遷師の承當や分外に攀ちず毫髮も差へず、火と火との如く水と水とに似たりとやせん、乃ち希遷師の悟程に看んか。

希遷とは其諱なり、諡を無際大師、端州高安の人、陳氏の子なり、其母孕んで菫茹を嗜

まず、生れて孩提にありと雖ども曾つて、保母を煩せしめず、後冠し、然諾として自許す、隋郷の獠民暗愚鬼神を畏る、淫祀して殺牛釀酒の習をなす、遷之れを憂ひ往いて淫祠を毀ほち牛を奪つて歸る、而も郷老尚ほ禁する能はざりき、十四歳にして曹溪の大鑑大師に參す、得度して未だ具戒せざるに先んじて、曹溪將に示寂せんとするに會ふ、乃ち能師に問ふて曰く、和尚百年の後、希遷未審し當に何人にか依附すべきと、能師曰く、尋思し去れと、次で能師順世し了んぬ、遷つねに靜處に於て端坐、寂として生を忘るか如し時に上座南嶽の懷讓和尚、問ふて曰く、汝か師已に逝す、空坐して奚んかせんと、遷曰く、我れ道誠を稟く、故に尋思するのみと、讓曰く、汝に師兄あり、行思和尚と云ふ、今青原に住す、汝が因緣彼にあり、祖の旨は甚た直なり、汝自ら迷ふのみと、遷聞き訖つて祖の龕を禮辭し、直ちに青原に到る、原問ふて曰く、人あり嶺南に消息ありと道ふと、遷曰く、人あり嶺南に消息ありと、道はずと、原重ねて曰く、若し恁麼ならば大藏小藏何れよりして來ると、遷曰く、盡く這裏より去ると、原又問ふて曰く、汝何方よりして來ると、遷曰く、曹溪より來ると、原曰く、什麼をか將ち得て來ると、遷曰く、未だ曹溪に到らずとも亦た失せすと、原曰く、恁麼ならば曹溪を去るあとを

用て什麼を作さんやと、遷曰く、若し曹溪に到らずんば爭てか失せざるあとを知んやと、問ひ去り答ひ來るの所、金鰲海を擘きて猛虎の齦を拔かんとすれば、怒雷山を破つて蒼龍の角を截らんするの概あるにあらずや、遷また原に問ふて曰く、曹溪大師遷つて和尚を識るや否やと、原の曰く、汝今吾を識るや否やと、遷の曰く、識らば又だ爭でか能く識り得んと、原曰く、衆角多しと雖ども一麟にして足れりと、遷また問ふて曰く、和尚曹溪を離れて、什麼の時よりしか此の間に至ると、原曰く、我れ邪た知らず、汝何時か曹溪を離ると、遷曰く、希遷曹溪より來らずと、原の曰く、我れ亦た汝か來處を知ると、遷曰く、和尚幸ひに是れ大人なり且らくも造次あることなしと、這箇の問答や、宛として門を閉ちて明月を推出し、非を穿つて荐天を鑿開するに似たりと云つて可、希遷師の如きは實に奈叉の機の人と云ふべし、石頭大師は草庵を大石に結びて石上に坐禪す、昼夜に寐らず、坐せざる時あし、衆務を虧闕せすと雖ども十二時の坐禪必らず勉め來れり、今清原の一派の天下に流通するあとは、石頭大力の行持堅固の然らしむるありと、道元禪師が其の正法眼藏行持の卷に於て石頭希遷禪師を讃せるもの、誠に所以あるあり、且つ聞く青原一日遷師をして壺を持し、南

嶽の讓和尚に與へしめて曰く、汝壺を達し了つて速かに歸れ、吾に箇の鍤斧子あり汝に與へて住山せしめんと、遷彼れに至つて未だ壺を呈せず、便ち問ふ、諸聖を慕はず己靈を重せざるの時如何と、讓の曰く、子が問、太だ高生、何ぞ向下に問はざると、遷曰く、寧ろ永劫に沉淪を受くべくとも、諸聖に從つて解脫を求めずと、讓便ち休す、遷つて靜居に歸る、青原問ふて曰く、汝去つて未だ久しからず送書遣せしや否やと遷曰く、信も亦た通せず書も亦た達せずと、原曰く、作麼生ぞと、遷師即ち前話を舉げて了つて、却つて曰く、發せん時和尚に箇の鍤斧子を許すあとを蒙むる、便ち請取せんと、青原一足を垂る、遷禮拜し尋で辭して南嶽に往くと遷師の答處や問處や、峭峻々たり孤迥々たり、金毛跳つて蒼龍の窟に入り、倒まに鐵馬に騎つて須彌に上ると許せんか、參同契と名つくる一篇あり、辭旨幽深、頗ぶる注解に富み、夙に斯林の寶訓視せらる、是れ實に希遷禪師其人の靈毫に依て作られたるもの竺土大仙心、東西密相附、人根有利鈍、道無南北、祖靈源明皎潔、支流暗流注、執事元是迷、契理亦非悟、門々一切境、回互不回互、回而更相涉、不爾依位住、色元殊質像、聲本異樂苦、暗合上中言、明分清濁句、四大性自復、如子得其母、火熱風動搖、水溼地堅固、眼色耳音聲、鼻香舌鹹酢、然於一々

法依枝葉分布、本末須歸宗、尊卑用其語、當明中有暗、勿以暗相遇、當暗中有明、勿以明相視、明暗各相對、比如前後步、萬物自有功、當言用及處、事存函蓋合、理應箭鋒柱、承言須會宗、勿自立規矩、觸目不會道、運足焉知路、進步非近遠、迷隔山河固、謹白參玄人、光陰莫虛度、と、是れ希遷大師、自身實歷の活書にあらずや、且つや一日舉論を看、萬物を會して己とおすもの其れ唯り聖人かと云ふに至り、拊机一番して曰く、聖人に已れおく已れおらさる所おし、法身は無象なり誰か自他を云ふ、圓鑑靈照にして、其間だ万像の體玄自ら現す、境智一にあらず孰れか去來を云はん、至れるかな斯語やと云ふが如き又たある時上堂して曰く、吾が法門先佛の傳受、禪定精進を論せず、佛の知見に達して即身即佛、心佛衆生、菩提煩惱、名異に體一あり、汝等當に知るへし自己の心靈、體斷常を離る、性垢淨にあらず、湛然圓滿にして凡聖齊同あり、應用無方にして心意識を離る、三界六道唯心自現、水月鏡像豈に生滅あらんや汝能く之を知らば備はらさる所おけんと云ふか如き、尊しく是れ眉毛乾坤を觸碎し鼻孔震宇を飲乾する底の所見、靈智曹溪に同しうして活機青原と別なからんよりは、焉ぞ夫れ斯の如きを得んや、而も是の如きを得たるもの、青原學徒の處、全身の獨露を認め、擊打の裏、又有

るあとを悟れるに依るを知らば徒らに聲色の中に馳走し、見聞の末に求覓して、佛經祖語を諳誦し解路の葛藤に墜するの愚は、吾人得て再演を敢てすべきにあらざるなり、嗚呼畢拂擊打の神機、直下に己れを忘れ己れを知る、希遷大師は夫れ死蛇を弄して活龍となすの人か、而も誰の靈性か、遷師を隔てん、古今の心地焉んぞ感應道交せざるの理あらんや、要は志を發すると否とにあり、遇師の能否如何にあるのみ、昇沉形ちを異にし苦樂の品同じからざるもの、理まさに遐般の外に出でざるなり、廣德二年門人梁端に請じ下して廣く玄化を闡かしむ、貞元六年庚午の十二月二十五日、三番九十有二歳にして圓滅を示しぬ、門人塔を東嶺に建つ、長慶中、無際大師と諡し塔を見相と稱す。

是か不是か

平常活潑々の那漢や、佛祖の謾りを受けず、上下左右縱横無碍の境界に體達し、咲んで揚眉瞬目の人と作すは、當機覿面觸處自在の底、藥山の惟儼大師は、則ち此の界底を尠破丁せるの傑僧にあらずや。

諱は惟儼、絳州の人、姓は韓氏、生れて十七、潮陽西山の惠照禪師に依つて出家す、唐の大歷八年、衡嶽の希操律州に執て戒を納る、博く經論を究め、嚴かに戒律を持す、一日翻然として自ら嘆して曰く、大丈夫當に法を離れて自ら淨なるべし、誰か能く屑々として細行を布巾に事とせんやと、乃ち石頭の無際大師に謁し、問ふて曰く、三乘十二分敎は某甲粗ぼ知る、嘗て聞く南方に直指人心見性成佛と、實に未だ明了からず伏して望むらくは和尙の慈悲指示せよと、頭曰く、恁麼も也た得ず、不恁麼も也た得ず、恁麼不恁麼總べて得ず、汝作麼生ぞと、儼措くあとなし、頭重ねて曰く、汝が因緣此にあらず、且らく馬大師の處に往き去れと、儼師乃ち命を稟け馬祖に參し、仍つて前問を伸ぶ、祖曰く、我れ有る時は伊をして揚眉瞬目せしめ、ある時は伊をして揚眉瞬

目せしめず、ある時は揚眉瞬目するもの是か、有る時は揚眉瞬目するもの不是か、汝作麼生ぞと、儼言の下に徹悟し便ち禮拜す、重ねて曰く、汝甚麼の道理を見てか便ち禮拜すると、儼曰く、某甲石頭の處に在ては、蚊子の鐵牛に上るが如しと、祖の曰く汝既に是の如し善く自ら護持せよ然りと雖ども汝の師は石頭なりと、他日祖、儼に問ふて曰く、汝近日の見處作麼生ぞと、儼の曰く、皮膚脱落し盡して唯だ一眞實のみありと、祖の曰く、汝が得る處、謂つべし心髓に協ひ四肢に布く、既に然も是の如く三條の蔗を將ち來つて肚皮を東取し、隨處に住山し去れと、儼の曰く、某甲又是れ何んぞ、敢へて住山せよと云ふやと、祖曰く、然らず、未だ常に行て住せずと云ふあとあらず、未だ常に住して行かずと云ふことあらす、益さんと欲して益する處なく、爲さんと欲して爲す　處なし宜しく舟航と作すべし、久しく此に住するなけんと、儼乃ち祖を辭して石頭に返りぬ、蓋し馬祖の會下にあること三年、供奉一日の如かりしと想ふに馬祖の道取する消息や、他輩と一ならす、馬祖謂ふ處の眉目とは何ぞや、曰く天地是れのみ、天地則ち眉目なれば、伊をして揚せしむるは、天を看るの謂にして伊をして瞬せしむるとは、地を宗とするの由にあらさるなきか是とは伊に習ひるに

て伊は教に誘引せらるゝと知らずや、不是と云ふは伊をして教しめさるの意にあらす、而も伊をして教しめさるは不是の義にもあらさるなり、汝作麼生と問はれたる藥山の會處は何れぞや、儼師と共に拜禮し去つて可なりとすべきか按するに佛法を會せんと欲せば、須らく時節因緣を看るべしとは、古哲の後毘に遺するの金句然り揚眉も時なれは瞬目も時なり、既に然らは天地も時のみ、時を離れて天地あるなく天地の而今に時あしとせんや、時もし有限あらんか天地もまた有限あらん、時若し無限ならんか天地また無限ならん、旰汝時や、汝は實に明星出現の毋なりき、拈華出現の父ありけるよ、然り時あるかな、若し時ならずんば、汝作麼生ぞと馬祖の藥山に問へるの玄旨得て會すべからさるなり、儼師は即ちあの時を了して禮拜せるのみ、今や儼は曾つて石頭會下の儼にあらすして石頭に再謁せり、一日儼師坐に在るの次で、遷師これを覩て乃ち問ふ、汝道裏にありて什麼をかなすと、儼の曰く、一切なさずと、遷師曰く、恁麼おくは即ち閑坐なりと、儼曰く、若し閑坐ならは即ち爲せるなりと、遷師曰く、汝道ふ爲さすと箇の甚麼をか爲さゝると、儼曰く、千聖も亦た識らずと、遷師聞き了つて呵々大笑、讃して一偈を示す、從來共住不知名、任運相將只麼行、

古上賢猶不識。這次風流豈可明。と、子を知るもの誰か親に如かん、師資の双鏡自ら影して自ら寫す、豈に石頭の靈智に非ずんば、馬ん子藥山の問處に向つて此讖あるを得んや、藥山の妙機は石頭の靈智の影寫たらずんはあらざるなり、後に石頭の無語せるを看よ、曰く、言語動用沒交涉と、儼答へて曰く、言語動用にあらざるも亦た沒交涉と、頭の曰く、我が這裏、針劄不入と、儼曰く我が這裏は石上に華を栽るが如しと、頭之れを然りとす、然り而も之れを然りとせざるものは、槐樹を指して柳樹を罵るの徒、誰か溪水を赤しと云ふ、元と是桃花の色影を知らずや、顧ふに六祖曹溪の會青下原南嶽に分れ、馬祖あり石頭あり、之れを江西湖南と稱す、馬祖の下、百丈天王あり、溈山仰山百丈に嗣て、溈仰宗の一家をなし、黄檗亦た百丈に參し其法嗣臨濟に至つて臨濟宗の一流となり、天王の下、龍潭、德山、雪峰と相傳し、雲門雪峰の會下より出てゝ雲門宗の一流を始め、玄沙また雪峰に嗣て雲門に對し、其資羅漢を經て法眼あり、乃ち法眼宗の一支また一家をなしぬ、石頭藥山、雲巖を經て、洞山曹山に至り、曹洞禪の一家枝に出づ、臨濟の下、黄龍楊岐の二流あり、所謂五家七宗とは即ち是れ、而もこの五家や七宗や、南嶽青原の兩家に發す、而してこの兩家些少の各別あきまと、儼師

悟程の實歴に據つて歴ゆへからさるあり、即ち曹溪の兩角元と是れ露地の白牛迥々たるものにあらすや、石頭に參し馬祖に明らめ、馬師の會下に通して頭師の法統を嗣く、何れか糸毫の差あらん、直ちに木根を截つて佛心に契ひ、的々承稟して敢外に之れを傳ふの禪や、誰か其名に淫して五家七宗等しく別流をなすと云ふ、惜むらくは由來野狐精の禪者多く、檜板漢の者流少きまとを、蓋し儼師の悟たる、見知盡き情解失す、自ら不知と云ふと雖ども、既にまれ實人たり碧落一点の塵まく、大地纖毫の疵なきことを識り、石上に華を栽るに似て縱跡なきまとを會得せるもの、乃ち曰く、我れ今汝がために這箇の語を說て無語底を顯す、他れ那處か本來耳目等の說あからんと、然らは儼師の悟處は人々既に具足し來れるものあるや瞭、而も那處や耳目の形あるにあらす、焉んぞ見聞を以て辨し得んや、一切は不爲なり、從來ともに住し來りて卒に名つくべきを知らすと雖とも、或は生せしめ或は死せしめ、去來動用せしめ、見聞覺知せしむるもの、これ正に這箇にあらさるなきを知らんや、分外に正法を求む元より非、他時に見性を期す可あるを見ず、恁麼の受用不斷、豈に證據を他に求むべけんや、儼師後ち澧州の藥山に居す、太和八年春二月、將に順世せんとす

るに臨み、叫んで曰く、法堂倒る〳〵と、衆皆な柱を持して之れを撐ふ、師手を擧して曰く、汝我が意を會せすと、言ひ訖つて示寂す、行壽八十有四歲、入室の弟子沖虛、塔を院の東隅に建つ、敕して弘道大師と諡し塔を化城と曰ふ。

趂散と復召

思量せずして現ずるの底、唯だ獨り自ら明了おらんのみ、宛として孤舟に掉さずして月明の渡むに似たらんかし、緣に對せずして照すの處、餘人何ぞ知るを得んや、看よ頭を回せば古岸蘋として未だ搖かざるあとを、參交し了せる禪機の一味、豈に味ひ易からんや、而も之れを味了せるの士あり、雲巖の無住大師即ち是れ。

聯燈會要の記者の云ふが如くんば、師は鍾陵建昌の人、王氏の子なり、少して石門に出家し、初めは百丈の海禪師に參して未だ玄旨を悟るに至らず、因緣不契の致す處か、百丈の歸寂するに會ふ、左右に侍する前後實に二十載の久しきに及ぶ、而して遂にあの不幸を見る、曾猛精進の士にあらさるよりは、焉んぞあれより奮進更に上退の神靈を發揮し得ん、必ず挫折し了るべかりしに、飛師は元より不世出の上機、豈に初期を中途に挫くべけんや、乃ち去つて儼大師を藥山に訪ふ、儼師の曰く、甚麼の處よりか來ると、飛曰く、百丈より來れりと、儼の曰く、百丈何の言句あつてか衆に示すと、飛の曰く、尋常に曰ふ我に一句子あり百味具足すと、儼の曰く、鹹は則ち鹹味、淡

は則ち淡味、濃あらす淡あらす、是れ常眹作麼生か是れ百味具足底の句ぞと、晟對ふるあし、儼師ねて曰く、目前の生死を爭何せんやと、晟曰く、目前に生死あしと、儼曰く百丈に在るあと多少の時々と、晟曰く、二十年と、儼の曰く、二十年百丈に在つて、俗氣も也た除かすと、他日侍立するの次て、儼師また晟師に問ふて曰く、百丈更らに甚麼の法をか說くと、晟曰く、有る時道はく、三句の外に省し去れ、六句の外に會取せよと儼曰く、三千里外且喜くは沒交涉と、嗚呼晟師は到底大器晚成の士か、儼師重ねて問ふ、更らに甚麼の法をか說くと、晟曰く、百丈有る時上堂せるに大衆立定せり、柱杖を以て一時に趂の散らして、復た大衆と召す、衆首を回す、丈の曰く、是れ甚麼ぞと、儼曰く何ぞ早く恁麼に道はざる、今日汝に因つて海兄を見るあとを得たりと、直下更らに纖塵あければ全機處に隨つて齊く彰るとかや、百丈示寂して猶ほ死せず、今日儼師のために見えらる、權柄手に在り殺活時に臨むとは、夫れ儼師の謂か、晟即ち言下に契悟しぬ、曾て蛇と作つて草に入りありし晟は、今や龍と化して天に上らんとす、果然として大器は既に晚成せられたり、想ふに參禪學道や、元と心を明らめ旨を悟るにあるのみ、雲巖、百丈に參し來る二十歲、遂に不會に終ふ、藥山に待して未だ甚だ久

習の修學せるにあらず、而も言下に會了せるもの、禪豈に久參廣學に依つて得へきならんや、只た知らず雲巖何をか會了せる、蓋し一段の宗風、元と異路底の事あるあし柱杖を以つて一時に趂散せるの意や、實に獨脫無依の底、却つて大衆と召すの機や、南山と鼓を打ては北山に舞ふの處、覺へず首を回して悟る處の消息に至つては區々の思量を以て分別し得へきの境にはあらさるあり、汝に因つて海兄を見ることを得たり、悟處は是れのみ、由來會了の人、この悟處境に一句道を著すれば、即ち曰く、相見了也と、晟師始め百丈に參し、後ち藥山に上りて、師資相會了せるもの、實に千里同風、柳條却つて一糸も隔てさるの理由にあらさるなきか、而も一たひ遺箇の田地に承當せんか、たゝに自己曠劫以來の事を知るのみあらず上は佛々祖々より、下は有鼻孔底の衲僧に至るまて、一覷に覷了し、一劄に劄破し去つて、百丈に相見了也せる藥山を已れに認め得へきなり、唐の會昌元年辛酉の歲十月朔を示す、二十六日沐浴し訖つて主事の僧を喚ひ、齊を備へしむ、二十七日に至り人の去るなし、夜に逮んて師寂し、了んぬ、世壽六十、茶毗に付して石墳に瘞む、敕して無住大師を謚し塔を淨勝と稱す。

『空華的々元無像
貌得成時想不眞
放下筆頭須著眼
虛空背上現同身』

禪宗五家の龍頭

迦葉微笑してより、西天の二十八傳、東土の二三に至る、五燈錄所載の記は、今姑らく論せずして可、六曹祖の下、青原と南嶽とに分れ、馬祖出てゝ南嶽に次ぎ、石頭は青原の流を唱ふ、江西湖南の稱此に始まりぬ、馬祖の下、獨り盛んに赴て轉傳、遂に潙仰、臨濟、雲門、法眼の四派となり、石頭の下、藥山、雲巖を經、洞山に至りて曹洞の一派なる、臨濟の下、復た楊岐、黃龍の二派を出だす、世に是れを總稱して禪宗の五家七宗と云ふ、俱に直下、本根を截つて佛の內心に契ひ、的々承稟、敎外別に法を傳へて、之れを佛心宗と謂ふ行貌頗ふる定止に似たるを以つて、李唐始めて禪宗と名つく蓋し訛稱たるなきか、而も禪と云ふと雖とも、元より六度通敎の禪にはあらざるあり、所謂敎外別傳如來禪たるもの、以心傳心祖師禪たるもの即ち是れ、混濫して同を以て見るは宗に私淑して義を逸せるかためのみ、六度万行や本と我に備はる、何を苦んで通敎六波羅密の一禪那に求むるあとをせんや、我に備るの道人未た知らずとならは、別に機緣語句の分明なるものあり、乃ち禪宗の五家に看

んと欲す、龍頭と題するは專ら其の派祖に論著するを示すもの、豈に夫れ蛇尾と云ふの謗意を寓して然か云ふものあらんや、夫れ然り豈に夫れ然ちんやと云ふ見る人の意旨異るあればなり、予また强辨せざるべし、昨今禪海の濁淚、具さに其の實例を吾人に示しつゝあるを奈何、予は先つ溈仰に見て、漸次五家の宗風に及ばんかな。

溈山と仰山

轉側たり回轉たり、一轉最難の處、此れ也た難しと云ひ、著語也た易しと云ふ、玄々復た妙機にあらずや、一市して禪牀を送るに、海枯れて而も底を見さるの譬、古今を裂破すとの一句は、迅雷一聲天下人ために再聾し去る、有無の語は杓柄の短長を論ずるなり、佛性とは何ぞと問ふ人のあらは、胡蘆轉せりと答へん、一を聞へて十を知るは、世俗の俊達、而も機かに向上を問へは對答するあと能はさるは何ぞや、眞とに取捨に由つて不如なるか致す處、看牛三年、眞到を知ると雖ども、他口を借らずして猶ほ蹄跡あるを見るにあらずや、徹底を會せんと欲せは業識茫々、喚者の是れ本なるか應者の是れ末なるか、一步一跡脚下に看取するを要す、塞を知つて塞を云はさる

の落處や、刀斧研れとも開げず、誰か如來藏裏に收得する一顆の摩尼を窺測するものぞ、若し不斷にして入ると云はゝ、未た涅槃を見すと云ふの反語のみ、久しく傷胃を患んで美食を受けさるの徒あり、法身の說不說は佛家の大難、枕子を推出して影像を呈す、豈に劍刃上の事を用ゆるものにあらずや、例令倒枯と云ふも本と藤樹の存するあり、笑裏に刀あし只た逃梁の聲のみ、而も深く刀創を得たるは參學の實證然るなり、木人夜半に語る、傍人の耳に入らず、万波の聲は海上に歸して消するを見よ、是の中誰れか滴水ありと云ふ返擲を解せずして返擲せんとす、本と兒戲に類す全威を知らんと要せば、一出六出共に整せんあり、千古榜樣の家風や、眞に玄津、只た夫れ玄津、故に毒蛇袖裏に入つて堤防を解せさるものには、險の又た險たるものにあらずや、人あり問ふて曰く、一は八窓を啓きて万國を朝せしめ、一は高く峯嶽に枕して星斗を下視す、作用するもの時や如何と、一如曰く、谿深くして杓柄長しと、あれを輝照發揚して光々相合むの消息と解す、果して非なきか、云ふ處、爛泥に似たるありと雖とも棘刺長きあと三尺あるを看る、敲牀三下、善く其機を盡すと云はすして可からんや、山下途路の受用を作さんと欲せば、牛を牽へて一頭の水牯牛を讀め、鼓

に始めて溈山仰山の面目、赤洒々として脫白露顯し來るを看ん。

溈山諱は靈祐、百丈を嗣き、仰山諱は慧寂、溈山に嗣く、乃ち其師洞山を資けて、百丈所傳の一宗を大成し、溈山仰宗を唱ふ、洞山曹山相依つて青原法統の一流を弘通して曹洞宗と云ふに似たり、而も曹洞の宗名や、予は六祖曹溪と泐祖洞山とより來れりと云ふの論を正格と信ず、今は其の一說を出すのみ、枝葉の談、是非畢竟して本題の輕重に關するあきを認むればなり、溈山初め百丈に參し、深夜少火の緣に百丈の心を傳へ、仰山又た曾つて耽源に謁して已に玄旨を悟り、次て溈山の會下に投じて兩鏡双照別影あきの師資を契す、豈に千歲の奇遇なるものにあらずや、百丈一日、溈山に試問すらく、咽喉唇吻を併却して作麼生か道はんと、吁、百卒は得易く一將は得かたし、溈山夫れ將か果た卒か、溈山の曰く、却つて請ふ和尙道へと、敵の密謀に乘して圖かる、豈に百万の軍師にあらずや、溈山は百丈の路を借りて經過し去れり、百丈曰く我れ、汝に向つて道ふあとを辭せず、恐らくは已後我が兒孫を喪はんと、百丈の面皮厚きあと三寸、和泥合水、又た老婆の心切の致す處か、而も百丈の鍋子は已に溈山のために硬劍々奪し去られたるなり、先哲曰く、平地の上、死人無數、荆棘林を過き得ば

是れ好手と、百丈は百世の宗師、乃ち荆棘林を拈し來りて溈山を驗せんと擬す、若し彼れをして榜板漢の亞流たらしめば、必ずや句裏に死却して道はん、咽喉唇吻を併却して更らに口を下すの處なけんと、而も變通底の人あらしめんか、脚下逆水の波あつて存せん、乃ち問處に向つて一條の活路を見錄を傷め手を犯さずして敵を自滅せしめん、果然溈山は榜板漢にはあらさりき、却つて請ふ和尙道へと、隨波逐浪、擊石火の如く閃雷光の如し、他の問處を返して答處に代ふ、毫末の氣力を費さずして斷嚴の頭邊に上る、活眼紙背に透るの士にあらさるよりは、焉んぞ斯の如くなるを得んや、當者、北條早雲儒士を召して三略を說かしめ、首に主將の法、務めて英雄の心を攪るに在りと聞て、乃ち曰く、止めよ、吾れ既に之を得たりと、赤手八州を包羅するの識見を以つて、黃石老公の心髓を攪りたるものは、古今傳へて美談となす、然り快人は、一言良馬は一鞭、万年も一念に包み、一念即ち万年を擧す、溈山直截の識量や、未擧已前を攪磨し去んぬ、而も百丈や、却つて他に采せすして、道ふあとを辭せす云々と云ふあれ人のために釘を抽き楔を拔くの妙腕と知らずや、觀じ來れば一路の生機、峭峻々として壁立千仞、師子互換弄假像眞なることを、予はあの語の風措宛轉自

在にして、又た能く封疆を把定するを愛するなり、曰く、却つ請ふ和尚道へと、是れ虎頭に角を生して荒草を出で、十洲春盡きて花凋殘し、珊瑚樹林日果々たるの光景にあらずと謂はんや、蓋し天關を掀して地軸を翻じ、餓虎を擒らへて泥龍を辨するの活手腕や、元と頑鈍者流の夢寐にも思到すべからざるの處、即ちこの活手腕あり、始めて句々相投じ機々相應するの光風霽月を見るべきにあらずや、潙山一日仰山の方丈に入り來るを看て、乃ち轉面壁に向つて臥す、仰山曰く、某甲は是れ和尚の弟子形迹を用へされと、潙山起るの勢を作す、仰山便ち出て去る、潙山乃ち寂子と召す寂子とは仰山の名なり、仰山頭を回す、潙山曰く、我れ適來一夢を得たり、汝試みに我がために原ね看よと、仰山、一盆の水を取り來る、潙山便ち面を洗ふ、少頃にして香嚴至る、潙山曰く、我れ適來一夢を得て、寂子我がために原ね了んぬ、汝更らに爲めに原ね看よと、香嚴因つて一盞の茶を點し來る、蓋し一上の神通小々に同じからざるなり而も嚴や下面にあつて了々として領得しぬ、潙山の曰く、二子の神通、驚子目遠に過ぐと、顧ふに三藏十二部經の門頭戶底や、捜紙素とより不淨を拭ひ去るも不可なし一字不說の室內底に至つては、參見すべく言說すべからざるなり、夢を說く既に痴

人たり、何に況んや夢中の夢をや、却つて其の判を請ふに至つて、天下の至愚、何物かこの上に加へん、仰山の水を獻するは、其夢を覺ますなり、覺めて猶ほ夢の心地す、香嚴の點茶を進むる處以、三人相對して師資の道、實に親しきを看よ、眞に混金と璞玉と的々衆帶なきもの、その夢中の夢を見ると云ふが如きは、万機休罷するの、庞牛に角なきもの是れのみ、古人曰く、沒量の大人語脉裏に向つて轉却す、若し是れ頂門に眼を具せば擧着して便ち落處を知んと、眞なるかな、一日仰山、僧に問ふて曰く、近離何れの處ぞと、僧の曰く、廬山と、仰山曰く、曾つて五老峰に遊ふや否やと、僧の曰く、曾つて到らずと、この僧の語や直なり、只た忘前失後に似たるを憾みとす、仰山の曰く闍黎曾つて遊山せずと、人の眉毛を惜取するの仰老、何の死急を着けてか爾か云ふや、雲門これを聞へて曰く、此の語皆な慈悲のための故に、落草の談ありと、記し去つて一問一答歷々分明なるものあるを認むるにあらずや、殺人の刀活人の劒、元と是れ鏌鋣の妙用のみ、山上の路を知るは去來の人是れなり、知らず、這の僧、親しく廬山より來る、然るを仰山何を以つてか、闍黎曾つて遊山せすと云ふ、若し這の僧をして香嚴の如くあらしめば、仰山何ぞ命に據つて行じて後面幾多の葛藤を見ることを

免れ得んや、故に雲門は慈悲の故に云々と若語しき、而もあの落草の談と云ふ、險峻にして堪攫し易からざるを覺ゆ、實に出草入草誰か尋討するあとを解すと云ふ、一手擡し一手弱す、白雲亟々として紅日の果々たるを見る、草茸々として烟霧々、凡あく聖あく、偖界不藏實に無心の境界とや云はんか、左顧瑕かければ右盼已に老たるあり、君見すや寒山子、行くこと太た早し、十年歸るあとを得されば來時の道を忘却するあとを、寒山子の詩に曰く、欲得安身處、寒山可長保、微風吹幽松、近聽聲愈好、下有班白人、傍々讀黃老、十年歸不得、忘却來時道と、按するに、心は是れ根法は是れ塵両種は猶同し鏡上の痕の如きか、痕垢盡る時光り始めて現ず、心と法双び忘じて性即ち眞なりとは、是れ永嘉の語、眞箇あの一則の意旨落處を見んと欲せは、痴の如く兀の如くならんを要す、若し然らずんば永劫に語言の中に走馳して、何れの日か渴仰に遇し得んや、法眼の頌に曰く、理極忘情謂、如何有喩齊、到頭霜夜月、任運落前溪、菓熟兼猿叟、山長似路迷、擧頭殘照在、元是住居西と、擬して以つて渴仰眞際の會了に資料し得んあり、知らす君了得せるや未だしや、

臨濟の活禪

露柱巷ぐ處、是れ風か將た聖か、過箭新羅は予の問處にあらさるなり、木槨と云ふも終に喚應あし、予は醒々躁々を要すと云はざるなり、高聲に叫んで曰く、凡か聖かと、彼の徒らに一劃の小利を貪ほるの輩は、未だ出格の半分だにあるあとなし、伐冰の家元と聚斂を事とせずと知らずや、疑ふらくは、摘住の下を何事をか領す、縱ひ自ら肯んずるも須らく吐却すべきにあらずや、一頓を放過しては一飽を收得す、美食滋味肚に滿てば、百飢も能く忘却すと雖とも、昧食は遂に忘失すべからざるあり、而も両回吹毛を振ひ、善く補衰の手を用ゆるの時や、未見何物か是とする、長連牀上唯た足を伸して臥すを見るのみ、寸間に風雷起つて汝を益す何ぞ痛痒を自覺せざる、而も自覺せりと云ふの時や、又た是れ塊を逐ふもの、人わつて迷聞せんと擬すれは、自救不了たるに終らん謂ふ處の、無位の眞人の出入とは何ぞや、忽若として瓦解冰消せば、何の處に證據を覓めん、諸人の出入即ち、是れ應さに眞人を證據すべし、咄、出入を證據する處乾屎橛のある事を看さる、か而も轉路を知らんと

要せは、彼れ中下を離却すと云ふ、是れ上の問か將た中下の義か直ちに目己機宜の滲桶を脱却し去らさるへからず、予は今君と共に、大愚一發して初めて血滴を見るの漢、臨濟の會下に參着して、其の狐か鬼かを勘破し看ん、擬議すれば三十棒を受けて去らんのみ。

鎮州の慈照大師、諱は義玄、世に呼んで臨濟と云ふ、蓋し院號より來れるなり、初め黄蘗の會下にある三載、行業の純一、また其の右に出つるものなかりしと傳ふ、首座歎して曰く、然も是れ後生なりと雖とも、衆と異なり、と、乃ち指して堂頭に參して、如何んが是れ佛法的々の大意を問はしむ、聲未だ絶だざるに黄蘗便ち打つ、三たび問ふて三たひ打たる、濟歸り來りて、首座に白して曰く、幸ひに慈悲を蒙り、某甲をして和尚に問はしむ、三たび問を發して三たび棒を喫しぬ、自ら恨むらくは障緣深旨を領せず、今且らく辭し去らんと、宛として細雨衣を濕すも看て見へず、開花地に落ちるも聽くに聲なきの情況、日は將さに暮れなんとして江上遠く孤帆の影を眺め、草緣深翠の處旅情切々たるの風景にあらすや、首座の曰く、汝もし去らは、須らく和尚に辭し了つて去るべしと、因つて首座先つ堂頭に到りて曰く、問話の後如法なり、若し

來つて和尚を辭する時、方便して伊を接せよ、已後穿鑿一株の大樹となり、天下のために陰涼と作らんと、次て濟方丈に和尚を辭す、蘗曰く、別處に往くを得ざれ、高安大愚の處に向つて去れと、嵩臺の月は暗猿の曙を照らすなり、石室の烟り焉んぞ古桂の秋を含まさらんや、臨濟乃ち師命に遵して大愚に到る、大愚處を問ふて後ち曰く黄蘗何の言句かあると、濟前話を擧して曰く、知らす過ありや過なきやと、愚曰く、黄蘗恁麼に老婆心切、汝かために徹困を得る、遽つて有過無過を云ふやと、湘潭の雲盡きて臨山出て、巴蜀雪消えて春水は來らんとす、果然、臨濟言下に省悟せり、乃ち曰く黄蘗の佛法元來多子なしと、花は劍佩を迎へて星初めて落ちたりと雖とも、柳は旌旗を拂つて露の未た乾かさるものあり、大愚乃ち擕住して曰く、尿牀の鬼子、適來は有過無過と道ひ、今は却つて多子なしと道ふ、何の道理をか見る、速かに道へ、速かに道へと、濟大愚の肋下に於て築くこと三擧す、愚托開して曰く、汝が師は黄蘗なり、我が事にあらずと、濟辭し黄蘗に歸る、蘗の曰く、來々去々何の了期かあらんと、濟曰く祇た老婆心切なるかためありと、便ち人事し了つて侍立す、蘗の曰く、何の處にか到り來ると、濟曰く、和尚の指授を蒙りて大愚に參せり、と、蘗曰く、大愚何の言句かある

と、濟前話を舉す、濟の曰く、若何んか道漢の來るを得ん、待て痛く一頓を與へんと、濟曰く、何の來るを待つとか說かん即今便ち喫せよと、後に隨つて便ち掌す、蘗の曰く者の風顚漢、這裏に來つて虎鬚を採ると、濟便ち喝す、蘗の曰く、侍者箇　の風顚漢を引へて參堂し去らしめよと、知らす茲に至つて臨濟打たるゝ處の痛棒の痕を見るや否や、蓋し十方坐斷して千眼頓に開らけ、一句截流して萬機寢創とは、是れ臨濟悟程の光景にあらずや、一日定上座、臨濟に問ふて曰く、如何んが是れ佛法の大意と、誰か此の問に對して茫然たらさるを得るものぞ、濟禪怵を下り、樹住して一掌を與へ、便ち托開す、また是れ今日捉敗の老婆心切にあらさるおきか、定佇立せり、果然として鬼窟裏に落ちて蹉過し了んぬ、傍僧曰く、定上座何ぞ禮拜せざると、冷地裏に人あつて覷破す、南山に鼓うては北山に舞ふものにあらずや、定禮拜するに方つて忽然省悟せり、看よ此の現成公案や、直出直入、單往單來、急雨の點するか如く、雷迅の走るに似たるあとを、乃ち是れ臨濟の正宗、所謂五家獨得の一派風と看るべきもの、若しこの用底に透得し去らば、一莖草を拈起して丈六の金身と作すを得ん、定上座たるもの何等の奇特あつてか、臨濟に一掌せられ、禮拜し起ち來りて、其の落處を了せる、他日

鎭州に在りて齋より回る、橋上に歌ふる到つて三人の座主に逢ふ、一人問ふて曰く如何んが是れ禪河深の處須らく底を窮むべきと、定擒住して橋下に拋向せんと擬す、時に二座主連忙し救して曰く、休よ〳〵是れ〳〵上座に觸忤す、且らく望むらくは慈悲せよと、定の曰く、若し是れ二座主にあらすんば、他れの窮めて底に到り去るに從かせんと、これ等の手段、全く是れ臨濟の作用にあらすや、旨あるかな雪竇の頌出して、斷際全機繼後蹤、持來何必在從容、巨靈擡手無多子、分破華山千万重と云へるあとや、臨濟の巨靈、大怪力を持し、手を以つて太華を擘開し、水を放つて黃河に流入す定上座の疑情に至つては、山堆く缶の積むか如し、一掌托開せられて直下に瓦解冰消するを得たるもの、焉んぞ是れ濟と定とのみの分際あらんや、臨濟後年將に示寂せんとするに及び、三聖に囑して曰く、吾れ遷化の後、吾が正法眼藏を滅却するあとを得されと、聖曰く、爭でか敢へて和尙の正法眼藏を滅却せんと、濟の曰く忽ち人あり汝に問はゞ如何んが對せんと、聖便ち喝す、濟の曰く、誰か知らん、吾が正法眼藏、這の瞎驢邊に向つて滅却するあとをと、塔影暮雲重る處、猫丈も後を思ひ、斷崖の殘照、落暉淡はき邊獅子も子を懷ふ、三聖の一喝は曾つて寸毫の餘蘊を見す、後人の急速を讓

するは今日の的意に預り知らされば、而も正法眼藏滅するありと云ふか、瞎あるかな、看ずや、猛虎一嘯する處、師資共に喪して清風今に竹林の吹きあるあとを、山・菓籍を經て多く自ら落つと雖とも、元と是れ圓妙無相の正法眼法の然らしむる處水蓼竹を穿つて飛ふあとを停めざるもの、豈にまた萬象中の獨露身にあらずや、毘耶城を打破して維摩詰を靠倒する底の慧照や、妙用を刺那に喪ひ、情塵を石室に翹すと雖とも、偏現しては沙界を該ね、收攝しては微塵に歸するの脫落底本來の面目を看過して可ならんや、知らず臨濟と共に同死同生底を得るの人や誰。

雲門一字禪

門外何の聲ぞ、雨滴々、門外何の聲ぞ、秋風來る、君と相和して君知らず、吾亦た相唱へて吾識らざるあり、人ありて問ふ、何を以てか昨日は是にして今日は非あると、一如ために答ふる處を知らず、即ち吾閑暇あしと、想ふに好事もあきに如かずと聞く、彌々言へば彌々遠きを認むればなり、體露全風を了せんと欲せば、徒らに樹酒葉落の句を追ふあとあかれ、短日將に暮あんとす、誰が家の兒ぞ、深谿足跡を絕つの處、何れに向つて知人を覓めんとはする、請ふ看よ、古岸釣竿を把るの人や誰古哲の曰く、靈光獨耀、迥脫根塵、體露眞常不拘文字、心性無染本自圓成、但離妄緣、即如々佛と而も雲門々として水漫々たり明月の芦花に映するか、芦花の明月に映するか、自ら看取すべきのみ、蓋し條あれは條を攀ち條あけれは例を攀づと、誰か衆流を截斷して涓滴を存せさるものゾ、君がために一線を通せんと擬すれば、自照して孤明を列するを奈何、花謝し去つて樹に影あしと云ふ、黑漆桶裏に黑汁を盛ると何れゾや、見と不見と兩頭俱に坐斷するを要す、雲門一日衆に示して曰く、古佛と露柱と相交は

る、是れ第幾はく機ぞと三千里外人の會するなし乃ち自ら代て曰く、南山雲を起し北山雨を下すと、而も青霄覩るなく點滴亦た施さゝるにあらずや、要は後人をして箇の入路を通するのみ、即ち入路を通ずと云ふと雖とも、元と是れ力所も入らざる底雲門慈悲のため故に無中に唱和せるもの、知らず雲門悟底活殺の妙用は如何。

匡眞禪師、諱は文偃、雲門と號す、雪峯の俊嗣たり、初め睦州に參す、州や施機電轉、直ちに湊白し易から■ざるの漢、常に人に接するや、纔かに門に跨れば便ち擒住して曰く、道へ〳〵と其人擬議不來あれば直ちに推し出して曰く、秦時の轟轟鐵と、雲門また推出さるゝあと、前後三回、纔かに至つて州の門を敲く、州の曰く、誰そと、門曰く、文偃と、州纔かに門を開く、門乃ち跳入せり、州擒住して曰く、道へ〳〵と、門擬議す、便ち推出さる、時に門の一足、門閫の內にありしか、急に閉鎖せられて、其脚を拶折せり、生肉何ぞ無感あるを得んや、門乃ち忍痛覺へず聲を作し忽然として省悟しぬ、後ち雪峯に到り、問ふて曰く、如何んが是れ佛と、峯曰く、寐語することなかれと、門禮拜して去る、一住三年に及ぶ、雪峯一日問ふて曰く、子が見處如何と、門曰く、某甲が見處、從上の諸聖と一糸毫も移易せすと、爾來雲門、常に好んで三字の禪を說き、又た一字の禪

を說く、僧あり問ふ、父を殺し母を殺しては佛前に懺悔す、佛を殺し祖を殺さば什麼の處に向つて懺悔せんと、門の曰く、露と、又た問ふ、如何んが是れ正法眼藏と、門曰く普と、多くは是れ睦州の慣用の手段、直下擬議を容れず、靑空却つて霹靂の聲をなすもの、誤つて一句語を下せば、猶ほ鉄槊子の如し、後ち四哲の大漠を出す、乃ち洞山の初、智門の寬、德山の圓香林の遠、皆な是れ不世出の大智識たり、是れ雲門の見地明白にして機境迅速の致す處にあらざるなきを知らんや、その垂語たり代語たる、弧峻々たり、或は擊石火の如く、或は閃電光に似たり、誠に神出鬼沒の精あるかな、去却一拈得七上下四維無等匹徐行踏斷流水聲縱觀寫出飛禽跡草茸々煙霧々空生巖畔花猩籍彈指甚悲舜苦多莫動着動着三十棒と、花の晨月の夕、聲朗らかに吟じ見んか、不立文字底の文字や、正に不能語の妙趣あつて存するを覺へん、而して是れ雪竇老漢が、雲門の垂語して十五日已前は汝に問はず、十五日已後に一句を道ひ將ち來れと自ら代つて云く、日々是れ好日とのの公案を領せるもの、然り雪竇の宗眼明徹にして縱横の文才あるにあらざるよりは、焉んぞ能く雲門の垂語代語を頭了し得んや、嗚呼光陰は矢の如く、日月は流るゝに似たり、十五日の前後、半ばゝ河南、半ばゝ河北、朝

暮に道着すれば來日は是れ十五六たらん、果然、日々是れ好日にあらずや、若よ誰が家にか明月清風なしと云ふ、君知るや知らずや、海神貴を知つて價を知らざるあとを、而も予は雲門を解すと云はず、只た彼れが禪宗五家中の、雲門宗の高祖と仰かるゝ所以の宗風、その家特殊の規摸と見るべき、一二の會用を拈じ來りて、君の好料に資せんと欲す、また妙ならずとせんや。

蓋し、佛性の義を知らんと要せば、須らく時節因緣を觀るべし釋尊成道以來、住世四十九年、衆會實に三百六十と稱し、頓漸權實を開說するあと、無量八万四千、敎家者流之れを一代時敎と謂ふ、僧あり雲門に問ふ、如何んが是れ一代時敎と、門曰く、對一說と、雲門胡爲れぞ他れと共に紛糾の解說をあさすして、却つて箇の對一說と云ふ、是れ老鼠の生薑を咬むものにあらずや、放去收來、釘を斬り鉄を截るか如く、一大藏經を盡く三個の字中に收消して、四方八面、人をして穿鑿する處なからしむ豈に獨脫孤危にして光前絕後あるものにあらずや、一人あり、解して曰く、一時機宜の事に對するの謂と、一人あり然らずとして、曰く、森羅万象元と是れ一法の印する處、乃ちあれ對一說にあらずやと、又た一人あり曰く、只た是れ那箇の一法を說くのみと、一如あれ

等の解說に着語して曰く、衆盲の評象、什麼の交涉かあらんと、知らず君の鷹得序は如何、要するに問は答處に在つて答は問端に存す、且つ以爲らく、殺人の刀、活人の劍は雲門宗上古の風規、豈にまた今時の樞要にあらざるあきを得んやと、一僧雲門に問ふて曰く、是れ目前の機にあらず、亦た目前の事にあらざる時如何と、門の曰く、倒一說と、おれ荒草の裏に身を横ふもの、雲門の雲門たる處以、茲に獨自明了せるを看ずや、先きには對一說と云ひ、遂に日倒一說と云ふ、只た一字の差のみ、而して千態万別ある所以、一點也た他れを設すること能はざるあり、遣僧の問や、本と是れ主家の話、却つて賓客に道ふもの、雲門の答や、一時に他の庭を打破し去るもの、好肉上に瘡を剜るの手段、蓋し、言迹の與り白雲万里、異途の由つて生ずる處、露柱燈籠、何ぞ曾つて言句あらん、水は冷に火は熱しと云ふの言語や、豈に水火あらん、冷熱焉んぞ言語あらんや、君未た會せずと云はゝ、須らく轉動せよ、始めて落處を了得すべきあり、尙ほ會せずんば且らく伏して雪竇頌讃の處分に聽け、曰く、對一說、太孤絕、無孔鉄鎚重下、楔、閻浮樹下笑呵々、昨夜驪龍拗角折、別々部陽老人得一概、と、万丈の愚蟲の如く、百万の鉄陣の如し、何れにか一毛の入處ある、倒一說分一節、同死同生爲君訣、八万四千

非鳳毛三十三人入虎穴別々擾々忽々水裏月と、青天白日、頭に迷ひ影を認む、着忙して雲門を什麼とか作す、平田和尚一頌あり曰く、靈光不昧、万古徽猷入此門來莫存知解ど、顧ふに道のものたる横徑あし、若し雲門の悟程、その荆棘林を透過し、穩密の田地に着到するを得ば、自在啐啄の機を展べ、無碍殺活の劒を用ゆるあと、韶陽老人の一橛を得たると等しく、擾々忽々たる水裏の月と異るあけんのみ、雲門豈に吾れ人の外にあらんや、而も雲門宗を以つて禪宗五家の一派として看んと擬するか、非か

法眼の玄機

天空うして絶塞邊雁を聞き、葉盡きて孤村夜燈を見る、夫れ聲前の一句は千聖不傳山は長く水は遠し、知んぬ何れの處ぞ、両岸の草花空しく月明をなすのみ、誰か聲前に向つて辨得するものぞ、法眼初め玄機一發するを以つて雜務を棄て、結侶湖外に行かんと擬す、雨に値ふて城西の地藏院に寓し、琛和尚に遇ふ、琛問ふて曰く、此の行何くにか之くと、眼の曰く、遷延として行脚し去ると、琛曰く、行脚の事作麼生ぞと、眼の曰く、知らずと、琛曰く、不知是れ最も親切と、眼言下に豁然大悟しぬ、蓋し、上器は一槌にして成れり、琛和尚もし出群の鑑なくんば、焉んぞ人を成して不疑の地に鉤在せしめ得んや、而も眼の成る、外誘を借りて能く然るにあらざるなり、不知是れ親切元より能く不知を知ればにあらずや、客あり夜半山中に來り、翠を横たへ石に坐して松風に彈す、松風の曲罷んで抱琴し去る、落月一聲天外の鴻、僧問ふて曰く、聲色の両字如何んが透得せんと、法眼曰く、大衆若し此の僧の問處を會せば、聲色を透るあと也た難からじと、これ他の鼻孔に因つて自家の氣を通するもの、知らず聲色を透

るもの、二六時中何れの處にかある、而も君、出て丶道語せんと擬するあかれ、恐らくは法眼のために棒を拽て蒿趁下せられん、蓋し聲色純眞、物々借らず、何をか外に求め何をか内とおさん、佛の眉間毫光ありと云ふにあらずや、あれ頭々顯露身々全眞の謂、而も井を閉けば沙に泉眼を塞却せらる、道眼の通ぜざるは何物に礙せられて然るや、改頭換面人遂に知らざるあり法眼云はずや、あれ眼に礙せらるゝなりと、老吏關を開きて浪士に道を示すは、深密の慈悲然るなり、然も沙塞眼礙に拖せば、塞礙は即ち君のものならん、直下に根門を脱却すれば、何處に沙を著け眼を著んや、請ふ空華の乱墜するを怪むなかれ、一翳眼にあればなりと知れ、看よ、子昭法眼に到つて問答の次で、眼のために只だ万象中の獨露身の如き、是れ万象を撥するか万象を撥せざるかを問はれし時、昭は撥せすと云ひ、眼は両箇と云ひ、左右の參者は撥すと云ふ而して眼は万象の中獨露身と云へりしあと、そ惜ひかな當時、子昭未だ實に獨露せず、身を盡覆して撥不撥に瞞し去られぬ、豈に眼裏一翳を存するものにあらずや法眼は以つて他の脚跟を驗し、正眼以つて妖を照す、眼華なく異彩あきの處、五家の一流、法眼宗高祖の特得底にあらさるあきを得んや。

法眼禪師、諱は文益、法を地藏の眞應に嗣ぐ、清涼老人即ち是れ、其の如何に啐啄同時底の機漠ありしかは、不知親切の一番能く彼れか東風花實を含むの量を示しぬ、若し夫れ啐啄同時の活用に至つては、聲色露獨、優に其の消息を傳ふと雖とも、古樹風を含んで常に雨を滯び、寒岩四月始めて春を知ると傳ふ法眼や實に知り易からさるの古樹か將た寒岩か、試みに彼れの皮下を霑り、滯雨知春の存處を探らん、玄則禪師は法眼の麟兒たり、曾つて青峰に問へるの處を拈し來りて眼に再問すらく、如何んが是れ學人の自己と、峰の答に曰く、丙丁童子來りて火を求むと、法眼之れを聞き訖つて曰く、好語、祇だ恐らくは汝が會せざらんあとをと、則の曰く、丙丁は火に屬す火を以つて火を求む自己を以つて自己を求むるに似たりと、眼曰く、情とに知る汝が會せざるあとを、佛法若し是の如くならば今日に到らずと、則便ち問ふ、如何んが是れ學人の自己と、眼曰く、丙丁童子來つて火を求むと、玄則言下に省悟せりと、密ねに怪む、丙丁の求火、青峰と法眼と、同火か異火か、將た火々相合するあるか抑もまた相背せさるあるか、玄則たるもの、何を以つて悟を得と云ふや、咄、四面元と門なし、何れよりか入らん而も吾自ら却回すと云ふ、何の交渉するあけんあり、由來從前の汗馬

人の嘲るなき、只た要す重ねて蓋代の功を論せんことを天地も蓋載する能はず、虛空日月も容照する能はず、無佛の處露堂々として法眼を脚下に看すんは、木馬風に嘶き泥牛月に吼へて去らん、僧あり法眼に問ふ、慧超、和尙に咨す、如何んが是れ佛と、曰く、汝は是れ慧超と、答話の底や、所謂聲を超へ色を越へて大自在を得、縱奪時に臨み活殺我れに在るものにあらず、や、即ち淸涼の答處、正面驀直たり、若し汝は慧超にあらずと云はゞ如何、十方の慧超、飯を嚙りて去るべし、而も法眼猛虎の鬚を拔き、淸涼蒼龍の角を截らんと要せば、直下に一條の正路を撥開すべきなり、彼の只管らに言句上に向つて解會を作すの輩は、對面千里を隔つる喪身の失命者のみ、焉んぞ氷窟の開花炎天の落雪を知らんや、之れを解すと云ふものあり曰く、慧超便ち是れ佛所以に法眼爾か答ふと、ある者は曰く、大に牛に騎つて牛を覓むるに似たりと、一人あり會して曰く、問處便ち是れと一如曰く、擔板淡、沒巴鼻、野狐精の情解のみと知らず君は、あの全機を見んと欲するか、他なし慧超此に於て悟了し去れるが如く、管帶參究し言下に桶底の脫すると等しく言外に歸を明らめ、方さに瘡傷おきを得ん、即ち一擧すれば直ちに落處を知る、法眼下之れを箭鋒相柱と謂ふ、豈に此家一風の規

範あるものにあらずや、如何んが、是れ曹源の一滴水、曰く、是れ曹源の一滴水とは、眼かの僧問の答處、黑漫々の裏、法眼の面目、脫白露淨し來るを看るべし、韶國師は法眼の承嗣たり、頌を作つて眼に呈して曰く、通玄峯頂、不是人間、心外無法、滿目靑山と、法眼一見して何とか云ひし、只た道の一頌、吾が宗を繼ぐべしと、想ふに、擧處顧みざれば即ち差互し、思量せんと擬せば何の劫にか解脫を得ん、江國春風吹不起、鵲鳥啼在深花裏、三級浪高魚化龍、癡人猶戽夜塘水とは、彼れ從顯が法眼の關棍子を了得し、慧超の落處を會得して、咬み難く嚙み難く、透り難く見難き節角爵訛の處を頌出せるの句、鋒を傷ひ手を犯さずして常在現成、永劫の法眼を、吾人に紹介しつゝあるにあらずや、舊者、慶藏主、人に問ふ、如何なるか是れ三級浪高うして魚龍を化すと、予は也た必せざるあり、且らく君に問ふ、化して龍と作り去る、即今何れの處にかあると、自ら代つて曰く、龍頭に踏着するは門を挾し戶に傍ふの人なりと、株を守つて兎を待つは自他共に再演すべきの事にはあらざるなり、誰れか維摩經に所謂、從無住本立一切法との文を拈じ來りて、如何んが是れ無住の本と問はんとする、形は未質より生じ名は未名より起ると知らずや、法眼即ち是れ自己本來の面目のみ、擇天柱地豈に他

あらんや、呵々

曹洞の機風

那邊微々として測るべからす、幽邃本地の風光たる、忘想分別の情軌を離る、實に寂轉の妙道身心脱落の消息にあらずや、這邊平日用光の中、伊說をして讃然あらしむるもの、眞箇靈山會上無說の說、即ち脱落心身の底是れなり、其倒退三千、獨り錯會を云ふが如きは、只た是れ一箇無明の焰、人間の大丈夫を鍊り出すの謂、佛々祖々、あの錯會に因つて擡頭を免れしにあらずや、玉壺の裏、自ら轉身の分あるを認むればあり、看よ無影樹の下、嗒然頭するあとを、向上の事向下の事、何れを指して佛とせん、祖と云はんや杓柄の短長は家々元より知る處、向上の人仰面して之れを看ると云はゝ、あれ莽鹵たり、甘きを知らんと欲せば、先つ苦きを讃らさるべからず、兩猿一は月中の桂を攀ち、一は九淵の珠を弄す、而もあの道途に冥ぜんと云はゝ、眞にあれ屋裏の胴子、ために別甌に炊香供養し去つて可あり、那身說法の餘韻、娟々として三箇の泥牛海に入りて一牛水を離るゝの奇音を傳ふ、所謂万里無寸草の處とは何れぞや、咄、無寸草の處に去らんと欲せば、汝が影を地に落すことあかれ、出門是れ草と知

らずや、寧ろ寸草の根を要す、一喝一棒亦た是れ枝葉の事に屬すをや、病者にして不病人を看るべく、不病者爲んぞ病人を看ん、髑髏識盡きて眼初めて明かなるの義、道用の妙諦則ち然るなり、而も理應眞諦や、孤峯日照して千年綠りに、谿水月沈んで万丈寒し、抑も曹溪の碧潭、一は滾々として南岳を廻ぐり、一は洋々として、洞山に來り會して、曹洞家一流の禪界を劃くるに至れるもの、了の碧潭の源や、既に慧能に於て探玄し了りたり、いて洞山會下の波濤、千尋何物を藏するかを、搜究し看ん。

筠州洞山悟本大師、諱は良价、雲巖に嗣く、初め南泉潙山等の會下に參し、無情說法の了解、能く五位回互正偏の格を定め、南嶽以下の四流に對して直下、曹价の家風を立て、玆に所謂禪宗五家の一規矩を成しぬ、而も彼れが他家以外の主張は何れぞや即ち洞山徹底の妙用は如何、蓋し乾坤を定むるの一句は万世の共に遵ふ處、虎兒を檢ふるの大機は佛祖尙ほ口を閉づ、是れ世に洞山絕得の一鐵鎚たるものにあらずや、直彰下更らに纖翳なければ、全機處に隨つて齊く彰るとかや、洞山の家風の鉗鎚を明めんと要せば作家の爐鞴多語を須へすして可なり、一僧あり問ふて曰く、寒暑到來、如何が廻避せんと、洞山曰く、何ぞ無寒暑の處に向つて去らざると、僧の曰く、如何

あるか是れ無寒暑の處と、山曰く、寒時は閻黎を寒殺し熱時は閻黎を熱殺すと、顧ふに、おれ天下人の尋ねて得さるの處、身を藏して影を露はすもの、而も眞は僞を掩はず、曲は眞を藏さゞるあり、絕壁の間に餓虎に遇ふ、何等一場の愁歎ぞや、知らず、大海を掀騰して須彌を踢倒するの洞山、今何れの處にかある、君誤つて其無寒暑の處に著し尋ぬるおとを止めよ、寒殺熱殺の時は是れ蓋天蓋地、寸毫の計度を容れざるなり、黃龍拈して曰く、洞山袖頭、領を打し腋下、襟を剜ぐると、旨ひかな云ふあとや如今逈般の僧あつて予に此の問處を擬し來らんか、良久して云はん、安禪は必ずしも山水を須へず、心頭を滅却すれば火も自ら涼しと、一たび洞山圈續の落處を明辨し得ば、垂手還つて万仞の崖と同しく、正偏の按排自然に恰好たらんや必、琉璃古殿人扇し去り、忍俊たる韓狨空しく階に上るを見よ、三更初夜月明の前、怪むおかれ、相逢ふて相識らさるおとを、懇々として猶ほ舊日の嫌を懷ふは、是れ正中偏にあらすや、失曉に老婆古鏡に逢ふ、分明にして覿面更らに眞あく、更らに頭に迷ひ還つて影を認むるを休めよとは、即ち偏中正の謂、而まて正中來とは何ぞ、無中に路あつて塵埃を出だす、但だ能く當今の諱に觸れず也た前朝斷舌の才に勝れるもの是れのみ、若し夫

れ雨及鋒を交へて避くることを須へず、好手還つて火裏の蓮に同じ、宛然として自ら衝天の氣あるものは衆中至にして、有無に落ちず誰か敢へて和せん、人々盡く常流を出でんと欲す、折合して還つて炭裏に歸り坐するは衆中到是れなり、浮山の遠錄公はこれを以つて五位の公案となしぬ、君もし此の一則を會得せば餘者は自ら解せんあり、洞山曰く、何ぞ無寒暑の處に向つて去らざると是れ偏中正を明すもの寒時は閻黎を寒殺し熱時は閻黎を熱殺とは、是れ偏中を示すあり、故に知んぬ、正と云ふと雖ども却つて是れ偏、偏と云ふと雖ども、却つて是れ圓あるあとを、古先生曰く、若し劒刃上に向つて走らば則ち快、若し情識上に向つて見れば則ち遲と、翠微曾つて竹を指して曰く、這の一竿竹恁麼に長きを得、那の一竿竹恁麼に短きを得ると、雖か恁麼に熱ずと云ふ、何ぞ早く鑊湯炉炭裏に廻避せざる、衆苦も到る能はずと云ふにあらずや、聞說らく、曹洞門下、出世不出世、垂手不垂手あり、若し不出世あらんか、目に雲霄を視、若し出世あれば、便ち灰頭土面目に雲霄を視る、即ち是れ万仞峯頭、灰頭土面は即ち是れ垂手邊の事ありと、蓋し鄙に入りて手を垂るゝと孤峯頭上に獨立すると等しく、灰頭土面即ち万仞の峯頭、歸源了性と差別智と異あきか如く、万仞の

峯頭即ち是れ灰頭土面たることを了せん、誰れか這裏に向つて兩橛の會を作すものぞ、洞山曾つて雲巖に問ふて曰く、無情の說法汁麼の人か聞くことを得ると、巖の曰く、無情の說法無情にして聞くあとを得と、山曰く、和尚聞くや否やと、巖の曰く、我れ若し聞けば汝即ち吾か說法を聞くを得ずと、山の曰く、若し恁麼ならば、即ち其和尚の說法を聞かずと、巖の曰く、我か說法汝尚ほ聞かず、何に況んや無情の說法をやと、宛として風、藥蔓を吹いて樵徑に迷ひ、兩芦花に暗うして釣船を失する底、洞山たるもの會せしや否や、乃ち偈を述し雲巖に呈して曰く、也大奇也大奇、無情說法不思議、若將耳聽終難會、眼處聞聲方可知と、密かに疑ふ、その眼處の聞聲とは赤か黑か抑また佛か祖か、曰く、無情說法即ち是れのみ、謂ふ處の無情說法とは、何ぞ、瞎漢未た知らざるか、虛空說法するに口語に因らざるあとを、木人は獅子吼をも恐れざるあり、洞山異日また雲巖に問ふて曰く、和尚百年の後、忽ち人あり還つて師の眞を遂ひするや否やと問はゞ、如何んか秖對せんと、巖の曰く、但だ伊に向つて道へ、只だ這箇是れと、洞山良や久うす、巖の曰く、這箇の事を承當せんには、大に審細にすべきと、噫々この這箇の事や、千古万古墨漫々、溝を塡め壑を塞へて人の會するを許さゝる處

殘紙裏に求め、口談上に付し得べきの事ならんや、果然、洞山の俊機を以つてして猶ほ疑に渉る、後ち水を過ぎて影を覩るに因つて、卓然として前の旨を豁悟せり、知らす如何んが會了せる、洞山乃ち一偈を頌出して曰く、切忘從他覓迢々與我疎我今獨自往處々得逢渠渠今正是我我今不是渠應須恁麼會方得契如々と、鉄牛は今や欄邊の草を喫み盡しぬ、天關を廻はし地軸を轉するの手段ある、素より其の處、洞山々々會せる人には明歴々露堂々たるも、不了者には成窟成窟たらんのみ、恨むらくは鳴鵲噪の休する時おきことを。

『擘開玉峽千尋水
收得驪龍一顆珠
袖裏携歸東海上
靈光映奪萬珊瑚』

全機の麗蘊

全機老成して枯木華を生ず、明々たる百草頭何ぞ祖意を論ぜん、祖意明々たり、誰か百草と謂ふや、双眼分明にして後鼻直垂す、是れ不昧本來の人、柳綠花紅直ちに法王身おるものにあらすや、何が故ぞ、直下直下の覯、沒絃彈琴の裡、不同の趣を捉らへ來りて獨り妙と云ふ、禮拜未た黑白を辨せずと雖とも、暗中に弄巧の便を得て自ら拙を成すと云ふに至つては、豈に尋常の野狐精を以つて議すべきの沒滋味あらんや、顧ふに省旨と領悟、両口元より一舌なきあり、君よ眞箇にあの奥を道破し去らんと要せば、論談口議の兒戲を擲却し來りて、其の參得の實際に試尋せよ、借問す、方法と侶たらざる、是れの什麼人ぞと、予は未た哲學科學を識らすと雖とも、科學哲學の者流、能く之れに答ふるの辞ありや否や、請ふ見よ日用事無別、唯吾自偶諧、頭々非取捨、處々沒張乖、朱紫雖爲號、青山絕點埃、神通並妙用、運水及搬柴、と、是れ其の問者が石頭に口を掩はれて省旨せる時の頌にして、十方同聚會、個々學無爲、此是選佛場、心空及第歸、とは、同問を拈して馬大師のために、汝が一口に西江の水を吸盡せんを待て、即ち汝

に向つて道はんと云はれて領悟せる時の頃にあらずや、蓋し銀山鉄壁、擬議すれば則ち髑髏前に鬼を見、等思すれば、則ち黑山下に打坐するの危機、單提獨弄、帶水拖泥敲喝俱に行くの大漢にあらさるよりは、焉んぞ爾かく明々として果日天に麗き、颯々として清風地に匝するの活腕に出づるを得んや、列刹相ひ望んで至る處龐公を競譽するもの、素より偶爾の事にあらざるあり、後ち藥山に槃桓すること、既に久しくして遂に辞し去らんとす、藥山ために彼れに至重し、十人の禪客に命して相送らしむ、時に皚雪の降するに値ふ、龐居士便ち雪を指して曰く、雪好片々として別處に落ちずと、全禪客あるものあり、聲に應して曰く、什麼の處にか落在すると、風おきに浪を起せば、相隨つて釣に上り來る、居士便ち打つあと一掌せり、全の曰く、居士也た草々たるあとを得ざれと、是れ棺木裏に瞠眼せるものあらずや、居士の曰く、汝恁麼に禪客と稱せば、閻老子未だ汝を放さゝるあらんと、豈に只た閻老子のみ放過せずと云はんや、全の曰く、居士は作麼生ぞと、彼れは依然として龕心を改めざるあり、あれ頭めより尾りに至るまで、便を着けさるもの、居士又た打づあと一掌せり、雪上に霜を加へ、花上に錦を舖くの景、而して曰く、眼見て盲の如く、口說へて啞の如しと、蓋し、全

や、令を行ふ能はずして居士其の一半を行ふ、令行ふと雖ども全は不得草々と酬對しぬ、必ずしも居士問端の落處を知らさるにはあらず、別に機鋒のあるありて、卷舒一ならさるのみ、惜ひかな杓柄溪に達せず、居士の架下に落つて其の聲の中を出つる能はざりしあとを、遂に居士をして打掌更らに、半語斷和の句あらしむるを致す、若し當時に雪竇老あらしめは必ず初問の處に雪團を握つて打ちしならんか、而も慶藏主は道ふ、居士の機や掣電の如し、汝か雪團を握るを待たば幾く時にか到らん、聲に和して便ち應じ聲に和して打たば、方さに始めて勦絶せんと、問ふに雪を以つて一色邊の事を明すは、禪家由來の常用たり、雪竇自ら佗の打處を頌して曰く、雪團打雪團、龐老機關沒可把と、誇るあるに似たりと雖とも、竇老果して龐老の落節處を知るや未だしや、次韻して曰く、天上人間不自知と、然らは此の消息、竇老還つて知ると云ふか、又た曰く、眼裏耳裏絶瀟灑と、是れ箭鋒相柱のみ、蓋し眼裏も雪、耳裏も也た雪、正に一色邊に住在しぬ、之れを普賢の境界一色邊の事と云ひ、又た之れを打成一片と云ふ、雪門道へるあり、直ちに盡乾坤大地、纖毫の過患おきを得るも、猶ほ物のために轉ぜらる、一色を見ざれは始めて是れ半提、若し全提を要せば須らく向上の一

路あるあとを知つて始めて得べし、這裏に到つて是の大用現前、針劄不入にして他人の處分を聽かさるべしと、吁龐蘊居士の如きは、實に活句に參して死句に參せさるの人と云ふべきか、流石宗徹文俊の質老も、此に到つて頭殺も了んぬ、乃ち機を轉して曰く、瀟灑絕、碧眼胡僧難辨別と、既に碧眼の胡僧、尙ほ辨別し難しと云ふ、吾人また更らに何をか說かん、頭上漫々脚下漫々たり、好雪片々今も猶ほあり、知らす龐士の處在、君も別か將た同か、擬議すればまた龐老をして、眼見て、盲の如く、口說へて啞の如しと、笑ひ去らしむるを致さん、喝。

峻機劉鉄磨

龜毛を鉄牛背上に刮くり、兎角を金翅の腰下に截るの、名婦、高々たる鋒頂に立つて深々たる海底を行く、佛眼尙ほ覷ふ能はず、魔外焉んぞ知り得んや、流星に似たるの眼聖電の如きの機、禪界また得易からさるの巨靈なるかな、劉鉄磨は女性のみ、久參して機鋒の峭峻ある、何ぞ一に茲に至るや、當時壽沖の獰龍、潙山老を去るあと、十里にして庵を卓す、一日飄然として潙山を訪ふ、山、鉄磨の來るを見て便ち問ふ、老僧中汝來るかと、知らす探竿影草何れの處に向つて聲能を見んとする、鉄磨の曰く、來日臺山に大會齊あり、和尙還つて去るや麽やと、善射の一箭、苟しくも虛りに發せす、富士山邊に鼓打ては琵琶湖畔に舞ふとかや、潙山便ち身を放つて臥す、果然命中せり而も遠煙浪の裏、別に青山の孤峻たるものあり、鉄磨便ち出で去る何ぞ機を見ることの猛速ある、借問す、これ禪か又た是れ道か放臥出去、嘆んで無事の會と作す、可か不可か按するに作家の相見や、隔墻角を見て早く是れ牛なるを知り、隔山烟を見て便ち是れ大なるを識るが如く、拶着すれば、動じ來り、捺着すれば、轉じ去る、潙山と臺山と、隔

ること數千里、鉄磨何等の沒情老婆ぞ、却つて潙山をして去つて齋せしめんとはする他なし這の老婆の意旨、早く潙山說話の根底を道破したれはあり、豈に參來線去放得收得兩々互へに相唱和して、明鏡の臺に當り、明珠の掌に在るか如く、胡來れは胡を現んし、漢來れは漢を現するものにあらすや、風塵草動に悉く端倪を究め、語隔つて意通ず、兩鋭耨塵なけれは、相照して影像の觀るべきなきか如く、機々相參ひ、句々相投す、誠に世諦の情見にあらさるあり、從顯老漢、極妙貼體、分明に這箇の消息を頌出して曰く、

> 旨騎騎馬入重城勅下傳聞六國清猶握金鞭問歸客夜深誰共御街行

と、急切の處自ら急切、緩慢の處自ら緩慢、一箇は放身して臥し一箇は便ち出て去る、君若し更らに周遍せば、一時に路を求むとも見べさらん、即ち同得同證能く茲に至れるものにあらさるおきを知らんや、僧あり風穴に問ふて曰く、潙山の曰く、老悖牛、汝來るやと、意旨如何と、風穴曰く、白雲深き處金龍躍ると、僧また問ふ、只だ劉鉄磨の來日臺山に大會齊あり、和尚還つて去るや麼やと道ふか如き、意旨如何と、風穴の曰く、碧波の心裏、玉兎驚くと、僧重ねて問ふ、潙山便ち臥勢を作す、意旨如何と、風穴曰く、老倒疎慵無事の日、閑眠高臥青山に對すと、知らす從顯老人の頌處と、別か將た同か、一條の

柱杖や、兩人相招きて相扶く、あれ同往又た同來の消息と云ふ、果して非か、今夜西齋風物惡しく、君は巴蜀に向ひ、我は湖南に向ふ、而も行へて何をか作さんと欲する、看ずや機、位を離れざれば毒海に墮在するあとを、雲収まつて星月山殿に浮び、雨過ぎて風雷石壇を繞くるの光景、誰か劉鉄磨に於て闕如たりと云ふ、曰く潙山放身して臥し鉄磨便ち出去すと、あれ豈に吾人方寸の消息を傳ふものと知らすや、雲門の曰く昨日一僧あり、天台より來つて却つて南岳に往へて去ると、誤つて一着を放過すれば二義に落在せん、三搭すれとも遂に頭を廻さゝるに終らんのみ境致隔身、左撥右轉し看よ、鉄磨何處にか出て去ると、

と、千賀浦頭は古來隆奥の名勝たり、白沙青松元と他景の凡と一視し難きものあつて存す、美神と默契して快絶禁する能はず而も文字を以つて記すべきあとを覺えさるなり、止みんぬるかな、蕉翁の詞藻用ゆるに處なく

『松島やあゝ松島や〳〵』

外、言ふ處を知らさりき、芳野は「我邦人の永く忘るへからざる畏と哀との歴史の地蒲山總へて馨旭の花を以つて錦舗爛熳たり花精の襲來する處、胸裏發感して貞室自ら貞室を忘し

『あれは〳〵とばかり花の吉野山』

と吟す、あの刹那詩人の胸中、何の思量かある、予之れを南華の莊翁に聞く、睡中の天地に無我有の鄉、荒漠の野あり、至人眞人の優遊する處と、

『桃花流水在人間』　武陵豈必皆神仙

知らす何人か此の消息を捉らへて無我有の天地に入り、吾人と共に精靈勞鬱の際に相見て一笑するものゝ、優遊すべきの樂境地、豈に吾人の方寸を去る遠きにあらんや、鈍蛙柳條に攀ちて道風の筆鋒、書の心髓を貫く、管城子また蛙蟲の一動に見るべかりしか故にあらすや、鶏鳴の一聲、吾人毎朝聽くに馴れて何等の感あるなし、而も圓悟の耳朶を戲殺して佛果茲に豁然大悟せりき、浮雲散し靈して日光耀々、山上麓下の風光自ら常日と異あるものありしためか、一見忽然として葉山の身心脫落し了んぬ一は鶏鳴のみ一は光耀のみ、両師をして悟道の秘奥に頓入せしめしもの眼裏何物かあつて映せしとする、吾人は眞に此の間に於て言語道斷の境を認知すると同時に、あの境や、詩と禪とか相互妙融の處、感應道交の消息を洩示するものなりと斷言して憚らさるあり、

或は『詩を論ずるあと禪を論ずるか如し』と云ひ、『詩を學ふあと渾べて參禪を學ふに似たり』と云ひ、或は『詩は禪を離れず禪は詩と離れす』と爲し、『詩に參あり禪にも亦た參あり、禪に悟あり詩にも亦た悟あり』と爲す、必ずしも斬新の造言にはあらさるあり、古先哲既に支那の舊日に於て道破せるの鐵案たるもの、禪や元と論すべきものにあらすと知らは、詩遂に議すべからさるを了せん、想ふに詩は是れ精禪微妙の感動、禪は是れ絶慮無相の靈界、精禪感動の詩、眞に言舌を容るべきの範圍にあらさるあり、『詩人玉屑』に云はすや、『禪道は惟た妙悟にあり詩道も亦た妙悟にあり』と

『雨後來尋鶯嶺春
不勞拈起一枝新
飲光尊者呵々笑
人看花兮花看人』

餘瀝

如上記し來り拈じ去りて、餘瀝滾々たり、論すへく議すへきもの、豈に一二にして止まらんや、曰く、禪とは何ぞや、曰く其功果は如何、曰く、倫理との關係、曰く、其世界觀の如き及ひ人生觀の如き、誠に好箇の問題にあらすとせんや、且つは哲學としての禪、宗教としての禪、識すべく論すへきもの列擧し來れは僕を代ふるも及ぶべからさらんとす、焉んぞ『活禪錄』一部の負へ得べき責あらんや、想ふに詩は文學の精にして畫は美術の粹たるもの、今これを捉らへ來りて如何が禪と交渉關係するかに看んと欲す、必ずしも沒趣味の閑題にあらさるへきか

詩と禪及ひ畫

山色巍々として紅果の光明十方を照すあり、溪聲潺々として不斷の八音を長へに弄す、瞻仰し去り啼聽し來りて錦腸無限の感慨に滿たさる、乃ち謳ふて曰く、

『溪聲便是廣長舌　山色豈非清淨身』

夜來八万四千偈　他日如何擧似人』

と、千賀浦頭は古來陸奥の名勝たり、白沙青松元と他景の凡と一視し難きものあつて存す、美神と默契して快絕禁する能はず而も文字を以つて記すべきあとを覺えさるなり、止みんぬるかな、蕉翁の詞藻用ゆるに處なく

『松島やあゝ松島やゝゝ』

外、言ふ處を知らさりき、芳野は我邦人の永く忘るへからざる畏と哀との歷史の地滿山總へて磬旭の花を以つて錦舖爛煖たり花精の襲來する處、胸裏發感して貞室自ら貞室を忘じ

『おれはゝゝとばかり花の吉野山』

と吟す、おの剎那詩人の胸中、何の思量かある、予之れを南華の莊翁に聞く、睡中の天地に無我有の鄉、荒漠の野あり、至人眞人の優遊する處と、

『桃花流水在人間』　武陵豈必皆神仙（ナランヤ）』

知らす何人か此の消息を捉らへて無我有の天地に入り、吾人と共に精靈勞鬱の際に相見て一笑するものゝ、優遊すべきの樂境地豈に吾人の方寸を去る遠きにあらんや、鈍蛙柳條に攀ちて道風の筆鋒書の心髓を貫く、管城子また蛙蟲の一動に見るべかりしか故にあらすや、鷄鳴の一聲、吾人毎朝聰くに馴れて何等の感あるなし、而も圓悟の耳朶を驚殺して佛果茲に豁然大悟せりき、浮雲散し盡して日光耀々、山上麓下の風光自ら常日と異なるものありしためか、一見忽然として葉山の身心脫落し了んぬ一は鷄鳴のみ一は光耀のみ、兩師をして悟道の秘奧に頓入せしめしもの眼裏何物かあつて映せしとする、吾人は眞に此の間に於て言語道斷の境を認知すると同時に、おの境や、詩と禪とか相互妙融の處、感應道交の消息を洩示するものなりと斷言して憚らさるあり、

或は『詩を論するおと禪を論するかゝ如し』と云ひ、『詩を學ふおと渾べて參禪を學ふに似たり』と云ひ、或は『詩は禪を離れず禪は詩と離れす』と爲し、『詩に參あり禪にも亦た參あり、禪に悟あり詩にも亦た悟あり』と爲す、必ずしも斬新の造言にはあらさるあり、古先哲既に支那の當日に於て道破せるの鐵案たるもの、禪や元と論すべきものにあらすと知らは、詩遂に議すべからさるを了せん、想ふに詩は是れ精禪微妙の感動、禪は是れ絕慮無相の靈界、精禪感動の詩、眞に言吾を容るべきの範圍にあらさるあり、『詩人玉屑』に云はすや、『禪道は惟た妙悟にあり詩道も亦た妙悟にあり』と

詩や禪や共に妙悟を以つて極致となす、然り、詩禪は三昧より出つ、思議して得べきにあらず、拈華微笑の端的と、夢草清吟の消息と、曷ぞ異つて二あるべけんや、謂ふ處の妙悟とは何ぞ、言忘慮絶して廓然脫灑、即ち暫らく字に寫して妙悟と云ふ、妙悟果然、辭の以つて說明すべきあり、妙悟の禪、妙悟の詩、誰か能く痩紙裏に求め、口談上に付せんとする、詩話禪論の今に盛んにして經論語錄の古より絶えざるを怪まずんはあらざるあり、清虛冷澹の境、泉石松籟の談、中宵吟するに雪あり、空屋語るに燈なし、此の禪を悟つて此の詩あり、此の詩を悟つて此の禪あるなり、碧落の白雲、背て持寄するや否や、尙を耳を洗つて聽くべきものあり、

『詩悟必通禪』　功深自入玄
句非專鍛鍊　妙只在空圓

春草池塘夢　梅花水月天
寥々千載下　此意少人傳』

吁、此の意を傳ふるの詩人禪師眞に少きかな、知らず此の詩の作家は誰ぞ

『禪乃詩之躰　詩乃禪之用

禪猶是强名　詩亦重觀瀾
錢唐子英子　禪餐久出衆
妙語發天葩　諸老輒稱頌
明月滿松蘿　白雲生石澗
只可君自怡　此意與誰共』

と、番易の傳初庵をして謳はしめたる、實存老人即ち忌れ、更らに其の『詩を言つて敎祐上人に寄する』の藻に看んか。

『作詩有體製　作詩包六義
名世能幾人　言詩豈容易
淵明天趣高　工部法度修
謫仙思飄逸　許渾語工緻
郊嶋事寒瘦　元白極偉麗
休巳碧雲流　顯洪大法器
精英烱胸臆　芳潤沃腸胃
發爲韻淺音　淨盡塵俗氣
禪月懸中天　古風扇末世
專門各宗尙　家法非一致
參幻習唐聲　雕刻苦神思
竭來入禪門　忽得言外意
長吟復短吟　聊以寄吾志
匪求時人知　眩鬻幻名利

始信文字妙　妙不在文字
寒山題木葉　此心頗相似
古人不復作　三嘆而已矣』

食蜜忘中邊　無味乃眞味
霜重千林空　啼蟲四壁起

玆に至つて吾人の多言を要せず、此の詩一篇を捧げ來りて予が禪詩融妙論の証安にあらさるを証して止まんのみ、

畫に至つては如何、禪觀、草木國土一切禪、畫題國土草木一切畫本來無差別、那邊に向つて彼是を分たん、畫の禪にあるか、禪の畫にあるかを知らんと欲せば、須らく一心源頭より自己本來の面目を回看し來るべきにあらずや、畫理即禪、禪機即畫、融交の妙、繹演釋し去つて畫詩禪三觀不二の樂境を澄得すべきを信じて疑はず、謂ふ處の禪謂ふ處の畫、敢へて靜座冥想の禪にあらず亦た敢へて批拂點染の畫を云ふにあらさるあり、牛背の牧童、世尊一代の法門を片笛一曲の村腔に吹徹して、落暉を歸家に負ふの處、誰か是れを禪ならずと云ひ畫ならずと云ふ、抑も亦た詩趣の好箇にあらずや、破村の漁翁、祖錄師撰の津梁を晩棹一聲の欸乃に喝破して垂釣の妙を說くの邊、豈に詩味のみの光景とせんや、禪機あふれ畫理逸すべからざるあり、盡大地盡極

微法爾自然として活畫たり禪機たり詩趣たらずんばあらず、畫題の耳目は維摩無言の答處にも映射すべく、禪機の錦線は輞川無聲の詩韻に振觸すべしと云ふ、斷して誣妄の頑說にあらさるを自證して耻さるなり、區々の例喩今何かせん、而も禪機畫理相涵泳して優に一源に溯棹するもの、予あれを南宗王維輞川叟の流派に見るや久し、曰く。

『行到水窮處　坐看雲起時』

と、是れ叟か悟道の活機を畢示せるの語、眞に硬劍々地活殺の心劍あるかな、禪豈に曹溪の一滴にのみ求めんや、畫焉んぞ狩野の泪汁にのみ局すと云はんや、詩畫共に禪と合一すと知らずや。

『參禪非易事、況復是吟詩、
妙處如何說、悟來方得知、
天風吹沅溢、霜月照蓮漪、
賴有師兼善、當今一白眉』

活禪錄參考援引の書目

佛祖統記
景德傳燈錄
增續傳燈錄
唐高僧傳
鶴林玉露
首楞嚴經
正宗記
皇朝類苑
拈古三百則
維摩經羅什譯
碧岩錄圓悟
漁隱叢話
法華經羅什譯
華嚴經探玄記法藏
六祖壇經
楞伽經
宗門雜錄
宋高僧傳
歇行錄
禪林類聚
從容錄
圓覺經
玉海
傳光錄笠山

釋門正統
普燈錄
聯燈錄
書史會要
五燈會元
虛堂語錄
百丈清規
楚石語錄
唯識論
宗鏡錄
人天眼目
夢溪筆談
僧史略
皇朝類苑

楊文公談苑
佛祖通載
編年通論
僧寶傳
空谷集
臨濟語錄
正法眼藏 道元
聯頌集
貞和集抄
無門語錄
灌居稿
續稽古略
本朝文粹
明極唱和編

懷風藻
元亨釋書 虎關
濟北集 虎關
空華集 義堂
少林一曲 嵩山
聽雨集
妙心六祖傳
正宗讚
大慈語錄
佛地論
坐禪用心記
信心銘拈提
金剛經
寶林傳

沙石集 無住
東海一漚集 中巖
蕉堅稿 絕海
梅花無盡藏 萬里
諸偈類要
十玄談 同安
天童語錄
無門關
西域記
智度論
瓔珞經
起信論義記 法藏
寶慶集
佛性論

宏智頌古
圓悟語錄
寶鋩三昧
證道歌弘覺
百法問答抄
大智偈集
遺落錄
白雲集

此の他、參考援引に資せるもの、今列擧するに暇あらざるあり、乃ち以下總べて省略に隨ふ。

中峯語錄
林間錄
參同契
祖庭事苑
學道用心集
永平廣錄
詩人玉屑

『仲靈一筆春秋、筆埋沒、湖山烟雨、中輔教遺編誰、可續、緇林棣蕚落、西風』

援引參考書目終

後引

『爭如獨坐虛牕下、葉落開花自有時』、耳底泉聲、眼前山色、一念機を忘れば大虛玷なし、荊棘參天、蒺藜滿地、卓然倒まに鐵馬に騎つて、豈裕に上下するは誰ぞ、狸奴を拜し白牯を揖し、鬼窟裏に向つて活計をおすは、吾人の本領にあらざるかり、佛海呑舟の鱗、祖天摩雲の翼、瓦礫を牯して黃金となし、死蛇を弄して活龍となす、忽然山崩して禪珠を其の頸下に捕獲せるもの、前後撰して二十有三、目一連成卷、題して『活禪錄』と云ふ、名題の理由や多々、舒題乃至餘瀝は即ち是れ、蛙し來りて讀んで字の如しと曰はんのみ、蓋し禪機や。

本來文字言語の葛藤を離絕し、偉人焉んぞ筆頭紙底の盡すべき處ならんや、筆管を剪斷して蒼龍窟とおし、口端を棘冶して白虎林となすと否とは、權柄手に在り殺活時に臨むの具眼漢なるか然らざるかに依つて分るゝ處、秋月何を以つてか悲しく春月何か故に樂しき、月は一、古今冷々として規道を廻り行くなり、觀者の心二なるかためにあらずや、啼鳥歌むの時や、山自ら寂々、野花殘るの處、月獨り蒼々、一部の衆

紙、鳥跡の文、眞箇に著者の本面目にあらざるあり、而も渡頭の輕雨塞梅に酒げば、實際溶々として雪水の來るを禁ずる能はず、不文源頭の雨、流れて有文の溪をなす、また不離不即の妙諦たるものにあらずや、只た三寸の舌根を弄して涅槃妙心の自躰を瞞昧せさらんを要するのみ、嗚呼禪界の風光、水急にして月を流さゝるの處、鮎魚濺測として竹竿に上るを見るも、鐵船無源の巨濤に浮ふの邊、天地寂として覺面に消息を失ふ、道の裏著者の多舌また一辭の枯すべきなきを悲むなり、止みんぬるかな、乃ち一喝茲に筆を擱して天に擲却し了んぬ。

放下身心如弊帚　拈來瓦礫是黃金
驀然一下打得着　大地山河一法沈

牛込の僑舍に於て

一如居士　藤波恒識す

終

明治三十四年八月廿九日印刷
同　三十四年九月一日發行

定價金五拾錢

著作者　藤波一如
東京市神田區錦町一丁目十番地

發行者　大月隆
東京市神田區錦町二丁目三番地

印刷者　池田良藏
東京市神田區錦町二丁目三番地

印刷所　知足堂

發兌元　文學同志會
東京市神田區錦町一丁目十番地

著作權所有

●文學同志會出版圖書目錄

美妙

定價　二十錢
郵稅　四錢

天然及び人事の美より筆を起し有形及び無形の美を詳論し美に對する東西の議論を調和して或は分析的に或は綜合的に一上一下自然人事有形無形あるとあらゆる宇宙間の美を捕へ來つて眼前に羅如たらしめ美に對する吾人の感想をして氷解了得せしむ殊に後篇に於て文學の目的文學の調和に關する卓論あればあるべからざるの書也

前篇●第一章聲音より來るの美妙●色より來るの美妙●情より來るの美妙●知に來るの美妙●自然に表るゝの美妙●心靈に現るゝの美妙●調和の美妙●結論

後篇●文學の效用●文學の目的●文學の發達●文學の調停

人生の目的

定價　二十五錢
郵稅　四錢

●第一章緒論●第二章飲食主義●第三章勤勞主義●第四章競爭主義●第五章智識主義●第六章良心主義●第七章忠孝主義●第八章幸福主義●第九章自愛主義●第十章他愛主義●第十一章兼愛主義●第十二章保存主義●第十三章飲食主義批評●第十四章勤勞主義批評●第十五章競爭主義批評●第十六章智識主義批評●第十七章良心主義批評●第十八章忠孝主義批評●第十九章自愛主義批評●第二十章他愛主義批評●第二十一章兼愛主義批評●第二十二章保存主義批評●第二十三章結論

家の寶

定價　三十錢
郵稅　六錢

本書は文學會の方針とする家政部發表の書にして各專門大家の家制意見及び家に起る万般の事業方法を敍へ其頃目にても五百有餘あり二十八年初版を起し今二十三版を重ね部數二十七万部を發賣せる書なり手に取りて其眞價を知れ初は二冊なりしも今は合本となせり

人生の初旅

定價 二十錢
郵税 四錢

人の一生中に如何なる事が起るか如何に歩まさる可かさるか如何にせは立身すべきか如何なる人が失敗せしか本書は未聞快絶の實行録なり詩文あり散文あり小説あり議論あり先づ一生涯の記録と思つて可なり

人生の老旅

定價 二十錢
郵税 四錢

世に不幸の人多しと雖も己が涙の洩し場なき人はゞ苦痛の人はあらさるべし人生の老旅は是等の人の情友となり人なき處に於て深く兄姉に同情を表し其煩悶を慰む可し
本書は人生の初旅の後篇なり初旅を讀む人は必ず此後篇を讀まさる可らず

婦人實務録

定價 二拾錢
郵税 二錢

此書は議論にあらず婦人の實際毎日に心得さるを得さる教訓心得方針を信切に說き荷も婦人として知らさる可らさる氣内書なり
●緒論●家政の觀察●氣風の觀察●物品の置所●勝手口の出入●一家の慈善心●華美贅澤●家庭の遊戯●家庭の養育●女髮結●家庭と音樂●家庭の紀念會●生活費と事業費●家政と裁縫●歳暮の家賃●庖厨雜俎十八件●家庭の談話●家庭の玩具●乘馬術と育兒法●不注意●兒童と飼ひ物●育兒保險●家庭教育と幼稚園●兒童と地理思想●愛情の誤用●家訓十四件

馬琴妙文集

定價 二十錢
郵税 四錢

散文序文詩文碑文戯文戯曲文錦文尊曲亭馬琴全著述中の粹を撰み秀を集めたるもの一讀しにあらざるを知るに足る

立身の事蹟

定價 二十錢
郵税 四錢

世には失策を以て充たせり失策とは先に失策に陷らさる方法を講するは立身の急務なるべく古今の聖賢偉人と座右に立談し彼等が失策と成効の事蹟を尋ね本書を友とするもの立身せさらんと欲するも豈に夫れ得べけんや

山高水長

定價 二十錢
郵税 四錢

語らんと欲する事を語らずして人に知らしめ言はんと欲する事を口に明に言はずして其言聲の美を知らしむ是れ新体詩の特色なり坐らから天地の絶美を味はんと欲するものよこれを山高水長に求めよ
●獨歩吟外十七篇●つハね緒外二十二篇●喞語外二十一篇●うなれ松外三十三篇●仙金堂曉夢外二十六●野篇外の小草外十八篇●雨鮮鳥語集外六篇●微笑外四篇●山村水郭外二篇●はなれ駒外二十三篇●樹の雫外十一篇●忘れ草外十篇

斷巖絶壁

定價 三十錢
郵税 四錢

文天祥正氣の歌を始めとして和漢の文粹を集めたるものにして今回本會にて出版せり庭夏緑陰の下本書を繙かは心神自ら清涼に浴するの感あらん實に現代の珍書なり

人生の氣力

定價 二十五錢
郵税 四錢

船舶波を犯して走るは蒸力・勢力あるを以てなり社會の迫害を排して能く身の安全を圖らんとせば須らく呑海の氣力を養はさるべからず本書は即ち吾人の蒸氣力なり
●第一章人生は氣力を養はさるべからず●第二章人生と云ふ活物●第三章知識の運用●第四章情欲の應用●

第五章人間の目的●第六章人間の事業●第七章人間の本分●第八章完全なる人間となり得る順路●第九章官吏學者教育家實業家政治家の標準

吾人の生活

定價　二十五錢
郵税　四　錢

本書は文明の生活なり內地雜居後の生活なり日本人として文明的社交を知らんと欲せは本書の他に其友なし

風月萬象

定價　三十五錢
郵税　六　錢

風月に嘯きて萬象を觀す快の樂大なるもの也篇中自然を歌ふの妙音大珠小珠玉盤上に落つるの感あり文に志あるの士は飲くべからざるの書なり

松風吟月

定價　三十錢
郵税　六　錢

論文あり記事文あり紀行文あり詩歌あり賦あり一讀して松濤琴を鼓し月下步吟を試むるの感あり妙味津々として盡きず蓋し人生の快樂を知らんと欲するものは此書を繙くに若くはなし

人生の片影

定價　十　錢
郵税　二　錢

●父の面影●新生涯●社會●朋友●讀書●人生の覺悟●目次の大要斯の如し

鴨長明海道記

定價　十五錢
郵税　二　錢

風雪の裝遊稿に曰く長明が海道記一帖は荷ふに重しとせず意馬に鞭をかなてゝ閑步の毋遠ものとなれり彼一帖を帶るに便の人の芳緣に乘じて俄に獨步の遠行を企てり貞應二年卯月上旬に更に都を出で一朝に旅たつとかけり折ふしのよく似たれば先達にたゝみて所々と指南とせんが爲なりと挿畫入にして美本なり

廻國雜記

定價　二十錢
郵税　四　錢

こは准后道興親王の御作なり尊き雲の上人の雜感にして和歌あり唐詩あり誠に天下の珍本なり山に詠し水に吟じ風流閑雅情趣掬す可し

人生の悔悟

定價　二十錢
郵税　四　錢

人世悔悟すべき事多し而して悔悟するの人尠し本書を讀んで愧然たるなからんや●父母に別れし悔悟●婚入りをせし悔悟●物を輕信せし悔悟●都合の飲食物●人を信用せし悔悟●正直の悔悟●交際を擴めし悔悟●學問を學びし悔悟●一期の失望●二期の失望●三期の失望●四期の失望●都會にありし人の悔悟●富家に生れし人の悔悟●時間を徒費せし悔悟●物に溺れし悔悟●喫烟を始めし悔悟●身を虛弱にせし悔悟

禪學斷片

定價　二十五錢
郵税　四　錢

禪學の妙味を味ふるの人は能く世に處し人に交る蓋し禪機は悟道の奧意なり此書は深遠なる禪を通俗に記述したるもの必ず一讀し置かざる可らず本書の目次は●人心●人心の眞覺●人の上中下●人心滿ち難し●人心の眞僞●人生觀●放逸の人●安心と眞心●本心と血

氣●苦心と得意●歷心俗氣●悠然たる會心●末成心●若心●小心罵々●一念の不二●一念の貪欲●一個の信念●觀念●念想造成●惜念●惜念●感情●眞嘘●逆悦と順境●淡泊と濱遊●俗稚混合●多欲と無欲●慾界と仙諸●美言と座言●美惡と取捨●善處の惡根●嘘と壽命●討と賓●恥の遠近●力針●有義無饒の善慾●無智の謀●敵と味方●仇●と諂媚●物の動敎●物の適皮●物我の兩忘●寬平と悠長●熱閣と冷落●忙處と死時●盜と冗●劇飲と嘔吐●意の偶州●三寸の舌加●潟水に於ける錢●樂屋のぶき●彭法師●蛙●六惜●異忘想●無分別●分別の的外れ●腹の虫●無形の樂●無名無位ノ樂●若樂境●樂の定義●人の樂む沙●若中の樂●骨折損●骨淨し●非戸飢の茶院●人恐は道の紛●猫と傘●猫に經節●世の重荷●世味●世道●世路無●世事悠々●世の變貶●世の中●世の燥佛●面倒なる出●在世の八●裕世風俗●富と仁●富蔣と仁養●富貴と泉右●牛●和氣熱小●和氣と喜神●最上の文章●詩思と野興●情欲●老悠●大事と小事●好利者と好名者●東精●吉人と凶人●恩蘇●施恩●恩裡害を生寺●答に手間入れす●借金●眼と閑て色を說く●本來前月●無我の境●著眼●卓見●學者の心●學者ゝ心路●學者の商慢●學者ノ迂淵●學者と道後●歷病の大德●阿房と先生●自己●自心●自適●自得●自分は留守●會待●會いと破機●會系遊にめらず●根氣手にるり●客お歩能者●放逃と豪議●閑早して不善●表裏の姿●賊の便化●勿恐●精料白管●進取の氣●捲土重來●立身のと足●皈一●一色●一段の好色●櫻上の一睡●娟說と包容●近いて染主す●橋と踏●珍●興●ゞ計と鶏●愚者と財●有の工く●食籍●餒人と変者●氣皮風雅●還源の要道●進德修行の砥石●道德と功業●君子の大量●飮讓●道を讓ら篇第一個な境界●完に處らす●皮胸●慎獨●戒獨●以我轉石●隱士●至人は皆靜●山男の腕次●雲水的趣味●白雲話のし●跡ゞ藏すに如す●去影存心●眞念灰冷●力有皆閑也●爲類寂姿のま●幽遂●大卒●靜夜の鐘辭●落花の哆●雨除と半夜●名月●今日●明日●光陰消過●動花早逸●気外い影●雨忙●蝦夢●●に夢●極婦の同居●解數の玄機●幼境と異栖●玄肖●機會●空理の礼●深さ乃●美婦醜心●娃邪の淵叢●天の機賊●天規ヶ樂む●大機に一竹●大理路と人慾師●大命●人性と天綴●神味●敬理●浴沙●心キ●心界●心光●心の城郭●心ノ臨若●心猿●心非と才華●心事の現卒使心性四段●心裡ノ庸貨●心遊さ客●若心●疑心●守身本偉●い府●名閑は諸賤ゞ敵●名根と客落●勞力と近用●奇特●有爲し戀●足れ露誠●存陶●眞理●禍の根原●仙臨にも脊山わり●三つゞ魂●因果●朱微ノ遠●●鬼神●地獄●餓鬼●畜牛●修羅●人間●大ト●佛牢●光明と晴味●禍福さ心非●破れ、料●毀答●洗ぶ●森の山風●春が●八算の花鳥●銀捨山の秋風●秋の山猿●休下の身●檸の歌●是納ゞ月●卑庵し歌●草庵の落首●女心はこりたうき●粉ゞ歌●附祭●法衣に勝●活身の引導●鮮魚の引導●進の死牛●三途川の渡守●余持と盜入●内爪と砂糖●空膜と粗戸●洪風せぬ法●夫人に念佛●滑貧ゞ樂む●塔所と會得●化貧と庸貨●百万石の笹ノ露●庸貨皮膜の開●人の末期●博徒を發●遊ふ女と誠●勘忍●花斷を燒く●死せる殺●血よ三中將●不角京●金を貨す心

艶麗文集

艶中の粹を拔き艶中の粹を集めたるもの文筆に志すものは勿論其他坐右の伙を貪るの人は之れを伴侶とせよ
珠音玉聲の間を驚かすに足るものあり

定價二十錢
郵稅四錢

滑稽妙文集

一讀頤ヶ解き讀の處ろ換へしむ殊に其妙なるもの而已を集めたれば須らく腹帶を締めて始めて此卷に向ふ可し

●自贊●影法師問合の文●女人形の記●戲佛辭●湖佛竹表●遺鳥骨表●俳諧類文●蛙の野遊●他力信心●發
虫をきゝに行く辭●貧ノ贊●卓刈の記●山竿ノ說●紀行●簑虫の記●七种の歌●嵐雪文集の序●近江八景の
序●ヨ姓諧大明凡自序●桃季集の序●にらが春序●番椒序●近代艶隱古序●落柿舍の記●柴賢の說●敢鉦の
辭●贈新道小辭●娘拾ゝ賦●紀行●悠然の賦●月和山の賦●公平傳●痴氣の傳●飲食色欲の兆●氣てとそ辭
●川袋自序●枕記●川女ノ說●鋼亭の記●六徳膝記●吳材の排●古眠の辨●自得ノ游●指鉢の傳●鬼の修●
●朝鞍の辭●借物の痒●白物ノ譜●白鳥譜●朔甚論●松茸頌●詩姿切ハ頌●瓢の辭●香切雀●雅兎合親●青
原●眞乳●木挽町●達敎諧贊●豆乃誰卷ノ序●すり小木の辭●鳥亭蔦七変辭詞●替書帖の序●酒色財
●滙米六部集序●太牛記卷妙自序●同序●飛花落莚●同三阿●贊世呂大意●追化物語ノ序●題古今百馬
庵卷首●色慾閼●山永の佛ゝ●糊米ハ佛●齒米ハ賦●くゝ物語自序●錐髓ゝ贊●剃髮の辭●戲才名所會
序●道中膝栗毛序●傾城水滸傳の序●白虫譜●沙彌六の辭●非友帖序●樂決川記●部屋川記●さしのくれ●
秋の辭發刊の文●夏衣念佛●借宅庵記●鷄の賦●草庵の落手●辭世●齒みがきの口上●清水餅口上●風流餅
酒論

定價三十錢
郵稅六錢

人物の裏面

人物の表面は皆人の知る所なり而して其心の異る恰も其面の如し本書は各種の人物の裏面を遠慮なく描き出

定價二十錢
郵稅四錢

して隔靴搔痒の感おからしむ且つ寸鐵人を殺す的の鋭鋒を以て其肺腑を抉出し照魔鏡に照らして殆ど焰羅王の前に立つの思わらしむ貧者も賤者も富者も貧者も男子も女子も座側に一本を供へて規戒とせは蓋し邦家の幸おり

戯曲妙文集

定價 三十錢　郵税 六錢

戯曲は我國に於て東西に誇るべきの妙味あり本書は其精妙なるものを収めて遺憾なからしむ

青年の將來

定價 二十五錢　郵税 四錢

將來の青年は如何にして立つ可きか二十世紀の曙光を迎ひしと同時に大に立場を定めざるべからず來れ幾多の青年必ず前途を指導し光明を與ふるものは蓋し本書の外に求むべきなし

◎將來青年の本領(一)◎其(二)◎海上生活の興味◎に關する文明の由來◎每に關する文學及び理想◎海の交通機關たる船の小歴史◎海國の人物と大陸の人物を論ず◎海國の詩人と天然◎海戰と陸戰◎海國々民の決心と覺悟

万情万眉

定價 拾六錢　郵税 貳錢

古今に卓絶せる新體詩數百篇を輯め劃切なる注釋を施し恰も百花の千園に咲けるが如く艶麗優美多情多恨を極めて讀者をして一誦恍惚たらしむ苟くも當代の新詩を味はんとするものは必ず此書を備へざるべからず

小文學

定價 貳拾五錢　郵税 貳錢

評せるもの嘗て曰く此書を讀まずんば人にあらず、これを繙かずんば俱に文學を語るに足らずと、いかに其奥味の深きかを知るべし

天然の聲

定價 參拾錢　郵税 四錢

◎目次◎見るさへに◎何地より◎園生の梅◎一間の香◎丸山環君に與ふ◎泣ぐ忍き◎雪の夜◎泉岳寺詣◎若くてよき者◎人類の標本◎初戀◎婦人哲學◎野邊の梅◎雨の眞間寺◎戰死者の墓前にて◎農夫◎生ける寫眞◎第二の故郷◎古蘭の花◎源平の戰◎宇治遊◎夜櫻◎悲◎雪◎そら御覽◎光陰◎あと木にまさる◎花の一日◎鮑井戸の藤◎子規◎八景◎今ぞよし◎春日詣◎梅雨◎花菖蒲◎雨夜◎挿秧◎戀◎富士の山◎踏◎み山の戸◎電信◎神人の差◎浴上美人◎夏の義◎乙女の顔◎ひ◎ぢよき◎巡り◎其時也◎人と電氣◎虹◎炎園◎誓◎不知界と不可知界◎火の花◎日光◎谷中の墓地◎不忍池◎安否◎朝顔日記◎虫聲◎人生◎賤が岳◎琵琶の北面◎秋の野山◎秋の清灌山◎昔狩◎秋の京都◎秋の暮◎落葉◎見て來たの記◎冬の夜◎夜の晝◎みるさへも◎雪の待乳山◎南船北馬◎年の暮◎除夜◎七福神◎寒談の夜◎行路難◎星月夜◎大内山◎和歌◎ダース◎内地雜居◎おやま草◎批評家に誨る◎富士◎子煩惱◎跳海陰山◎惜陰の賦◎所感

聖僧道元

定價 貳拾錢　郵税 貳錢

紀行あり隨筆あり詩歌あり漫録あり新體詩あり國文漢文其粹を競ひ妙を爭ふて興味津々讀まざらんとして讀まざる能はず春郊綠蔭の好友秋宵悲夜の伴侶たり

◎目次◎長夜獨嘯◎春々錄◎藤田東湖◎筑波の峯◎小松寺考◎かたみの袖◎王昭君◎秋山餘錄◎琴の音◎洪水◎月間の風味◎鹿島紀行◎雨瑞々◎崛月夜◎藤江亞山氏を輓す◎房總遊記◎井筒の水◎水馴掉◎遊五浦記◎戈枕◎首々◎半頭石◎青鞋◎梟◎花笠日記◎淫葉集◎謝焚く海人◎樂天地◎晃山紀勝◎他郷の情味◎黑髮山の髻◎谷滿が淵◎山中七月の月◎單嚴の月影◎情神の修養◎西山一夜◎黑白世界◎四幣朗◎乙女峠◎舟中の遊湖◎逆さ富士◎祖供の古關◎一樓の白雲◎地勢險要◎旅づと湯錄◎鈴の音◎四面楚歌◎鈴か嶺◎笠置◎都の月色◎布引の滝◎松風颯々◎山鈴花品◎嵯峨の奥◎松平砂白◎嵐山◎大悲閣◎關が原◎外數篇

遠く法を索めて海外に渡り、在唐數年、能く佛教の眞義を究め、千難万難幾多の新思想を齎らして歸朝したる聖僧道元の事蹟は、今や本書に依りて審かにおもんぬ、其筆を前提に起して、晩年と涅槃に終る、滔々數万言、評論的筆鋒を以て、敘述し、殊に附錄として傘松道詠を添へたるあと、俗塵に超越して、爽快無極、圖

民の必讀せざるべからざる書也、
◎目次●道元系統●前提●經歷●彼の幼時●出離解脱●渡唐●歸朝後の彼●彼の生涯●鎌倉時代と禪宗●彼の理想●無常觀●厭世と樂天●宗教家としての道元●晩年と涅槃●附錄●傘松道詠

研學の順序

定價 貳拾錢
郵税 貳錢

立身の秘奥は研學の如何にあり、其順を得れば成功し、順序を失へば必ず敗る、本書は此順序を明かに教へ、審かに論究せるもの、蓋し青年必讀の好書、學生無上の珍寶たり。
◎目次●研學の順序●學問の活用●政府と學問の保護●第一章●帝都學生の實況●第二章●學問の秘訣●學問の玄妙は專修の自然●貧富は學問の成否に關せず●學生と志望の遠大●分陰と愛惜●書中の要と摘記●戒意專心學に一なると他の嗜好●書の良否と注意●天才を恃むべからず●第三章●專學科の要旨及び其撰擇●法律學●政治學●經濟學●教育學●哲學●論理學●地文天文學●生理學●動植物學●金石學●博言學●文學●樣史學●天才と適合●體格と適合●時勢と適合●境遇と適合●嗜好と適合●第四章●立有の順序●剛毅●自助心●果斷の明●注意心の養成●第五章●學問の價値●後篇●女子學問の順序●第壹期●第二期●第三期

天籟万丈

定價 貳拾錢
郵税 四錢

唐朝の文豪韓退之の生涯を評論的筆鋒を以て叙述せるもの其剴切にして壯快なるは讀者の覺えず一讀三歎するを以て知るべしあれ江湖得難きの文字當代稀有の好著
◎目次●第壹章●彼が生れし時代●貞觀の平和●玄宗皇帝●安祿山●顏眞卿●韓愈生る●第貳章●彼が教育●彼が血統●彼は孤兒●兄の蓋陶●彼が自修●第三章●貞元初政●內憂外寇●陸贄の施政●斯の如き時勢●第四章●失意時代●師の聘書生●歷志を得す●諍臣論と上宰相書●京師を去る●鄭夫人死す●東都に行く●抗軍に佐たり●徐州に在り●答衛中行書と送孟東野●第五章●在朝時代●貞元の末政●彼れが責任●國子博士……人材登庸●監察御史●湯山の合●王●の叛●沈默時代●迎學解●勢漸く大●論淮西事宜狀●淮西の征從●憲宗漸く驕侈●佛教の盛時●佛骨表●愈佛を辯ず●潮州より袁州●第六章●掉尾的運動●復び朝に立つ●裴度朝に立つ●王庭湊を叱す●河北三鎭遂に唐の有に非ず●內廷の爭ひ●彼が最後●第七章●彼は常識の人なり●彼は憂國家也●彼が人物●亦何ぞ妥へん

近世社會主義評論

定價 壹圓
郵税 拾六錢

猶堂久松義典氏多年の研究を盡み滿腔の熱血を濺きて此書を著はす、論議の明晰所說の緻密は言はずもがな近世の社會主義を講明して洩すところなし、苟くも將に來らんとする新世界を知らんとするものは此近代希有の好書に接せざべからず

社會研究新論

定價 壹圓廿錢
郵税 拾六錢

身はいかゐる下層の悲境に沈淪し如何ゐる屈辱をも敢てするものは此書を讀むべと勿れ、社會に獻身したる猶堂氏が第二の新著世界唯一の此書が如何に社會に冒敵をおしつゝあるか日本の將來は此中によりて知るべく吾人の採るべき方法は此書によりて決すべし、社會の研究をおさん者此書を措て何をか求めむ

日本佛教十二傑傳論

定價 參拾錢
郵税 四錢

中村諦梁氏が全身の力を捧げて著せしもの各宗高僧の眞傳を詳かにして餘蘊なし文章の明快なるは師範として學ぶべく教理を明かにせるは各宗の綱要を知るべく近代の活文字當代無二の新著なり
◎目次●聖德太子●行基菩薩●最澄上人●空海上人●慈覺上人●日蓮上人●親鸞上人●良忍上人●源空上人●榮西禪師●明惠上人●道元禪師

郊外散策

定價 廿五錢
郵税 壹錢五厘

筆を淺井了意に始めて細川幽齋に終る其間三十名家の傑作紀行收めて本書にあり殊に一々作家の畧傳を添へたるは蓋し千古の名寶たらむ
◎目次◎旅行の心得……淺井了意◎旅に可愼事……橘南谿◎旅人の爲め……曲亭馬琴◎東海道の一……白柏

子武女◉東海道の二……鳥丸光廣◉大和めぐり一……三條公條◉大和めぐり二……建部綾足◉大和めぐり三……荒木田麗子◉伊勢詣……堯孝僧都◉富士紀行……堯孝僧都◉椿詣……村田春海◉信濃路……摩詰庵寶鈴◉蒲生氏郷紀行……蒲生氏郷◉杉田梅見……清水濱臣◉箱根越……太田南畝◉白川紀行……松平定信◉陸奥の記……二日坊◉嚴島詣……衣川長秋◉一畑藥師……藤井高尚◉九州道々記……豐臣勝俊◉住吉まうで……足利義詮◉高野山詣……三條實隆◉近江八景……茅淵の媼◉牛安紀行……太田道灌◉尾張路……源光行◉三河路……源光行◉身延まうで……清水濱臣◉富士登り……加茂季鷹◉江の島鎌倉の記……源長保◉善光寺紀行……堯忠法師◉佐渡が島……且水◉出雲詣……細川幽齋

虛心談

定価　貳拾錢
郵稅　四錢

其豪壯なるは一劍揮つて天地を割くが如くその勇健なるは一場以て宇宙を破るに似たり雄大の辯論達の論奇警の說當代無比の活文字古今未曾有の快談たりもしそれ氣を養ひ膽を練り腕を鍛へ脚を天下に伸はさむとする者は宜しく先づ本書に接し而して志望を果さるべし

活精神

定価　貳拾錢
郵稅　四錢

斬新豐富なる思想剛健なる快筆は恰も奈翁が歐州全土を蹂躙せしが如く正々堂々精神界を濶步して餘す所なしその議論の卓拔なる所說の痛快なるは茲にあれを言はずもがなの第二十世紀の活文界に於て先登第一天下に雄飛！社會に濶步して最後の勝利を博せんと欲するものは先づ宜しく此書に接するに如かじ◎目次◎人格◎天職◎自信◎青年の前途と一心不亂◎青年と希望◎青年の地位◎平民主義◎理想的觀察◎現金世界と其運命◎活學問◎感より生ずる人生の利害得失◎平常と非常◎立志と手段◎不羈獨立◎初步の思想◎書生の本領◎本邦婦人に自覺すべき事三◎强健と弱點◎愼重大度◎風雲兒◎國民の大學校◎服從◎規律と協同心◎毛頭無愛◎願くは挫折する勿れ貫徹せよ

呑氣文集

定価　三拾錢
郵稅　四錢

古今聖賢の呑氣なる塵外の逸語にして腑の洗濯をしながら文の粹に達する材料なり

社交記事論說文

定価　三拾錢
郵稅　六錢

あらゆる社交に關する記事論說文を載す社會を安全に渡らんとする者は必ず一書を座右に備へざるべからず

山水記事論說文

定価　三拾錢
郵稅　六錢

其名の如く山水に關する記事論說文を集錄す一讀深山に逍遙し再讀江河に遊ぶの感あり文を學び想を練らんとするもの必ずしも此書なかるべからず

小氣焰

定価　參拾錢
郵稅　貳錢

文章世界の愛讀者天下幾万の青年文士が其腦漿を絞りて著せし美文、韻文、俳文、散文、和歌、新體詩其他ありとあらゆる文章約數百篇を收む、雄渾なるあり、優麗なるあり、百篇百章自ら其趣を異にし一讀卷を掩ふ能はざらしむ

小哲學

定価　廿五錢
郵稅　四錢

超然隱士雲に隱れて社會の現象を批判す、諧謔諷刺其妙を極め觀察周到新智見を拓きて眞に小哲學の名に背かずあれを繙きて智識を增すべくあれを開きて鬱憂を忘るべし

作文指南

定価　廿五錢
郵稅　貳錢

急務機言

定價 廿五錢
郵稅 二錢

畑馬次郎氏自ら敢鞭を揮ふの傍實地の經驗に鑑みて此書を編す作法の明解例題の豊富世間有觸れたる書の比にあらず殊に學者に最も便ならしむる樣親切周到を極めたるは江湖讀者の滿足する所なるべし

悲哀の快觀

定價 參拾錢
郵稅 二錢

高橋秀臣氏が現今の弊政を憂ひ、政界の腐敗を掃蕩せんとして著せるもの全篇七章立言五万正剛純潔の氣自ら溢れて一躍天下を改造するの概あり苟くも將來政治の中堅に座し其敏腕を試みむとする青年は必ず一部を座右に備へざるべからず

活戀

定價 參拾錢
郵稅 二錢

◎書中の三大觀◎青さゝげ◎亡き母の日記◎初茄子籠

閨秀の佳人

定價 卅五錢
郵稅 四錢

櫻花爛熳として而も花不言を始として壹百有餘の雄篇は群星の蒼穹に羅列せるか如く万船の大洋に浮べるか如く正々堂々として各其壯觀を異にす嬌艶滴る計りの佳人あれば健腕杖を揮ふの快男子あり揚柳の下春水滔として流れ西岳遙かに半月を載せて一望無涯漠として天邊幽かに聲あるに似たり郊外の友煙籠の妻詩神と隔き美人と語らむとするものは本書を措いて他に求むべきものあれかからむか

特約大賣捌所

鹿兒島　吉田幸兵衛　長崎　安中半三郎
久留米　菊竹金文堂　大分　甲斐治平
大阪　丸善書籍株式會社　京都　東技律書房
佐賀　河内莊助　名古屋　川瀨代助
高松　宮脇仲次郎　博多　眞海書店
馬關　重野幾太郎　神戸　石丸日東館
豐前中津　梅津壽平　熊本　中山知新堂
仝豐津　佐野長七　小倉　中島卯助
岡山　森博文堂　姫路　木村治作
仙臺　有千閣　上諏訪　宮阪日新堂
弘前　今泉道次郎　豐橋　文海堂
金澤　宇都宮書店　富山　小林清重堂

福井　品川太右衛門
熊本　好文堂
新潟　北光社
秋田　成見清兵衛
靜岡　吉見義次
宇都宮　内田濱吉
掛川　三原屋書店
伊賀上野　安屋勝次郎
福井　松原日新館
三條　野島半七
松山　向井藏次郎
奈良　木原保吉
宇都宮　内山港三郎
名古屋　耐成堂

長野　西澤喜太郎
丸龜　鹽田書店
廣島　田中文友堂
廣島　井上龜吉
盛岡　鶴鳴閣
敦賀　山上宗平
岡崎　伊藤小文司
水戸　市毛淺太郎
高知　澤本駒吉
福島　鈴木萬助
鹿兒島　谷村藤吉
札幌　富貴堂
白川　石井書店
高田　高橋書店

高田　室支店
臺北　陽城博文堂
臺南　龍泉堂
臺中　棚邊書店
青森　今泉支店
八ノ戸　伊吉書店
明石　福井書店
仙臺　佐藤養治
大津　古川伊助
山口　超世館
陸前若柳　朝野堂
羽後横手　大澤鮮進堂
佐賀　大坪萬六
福知山　文進堂

德島　黑崎精二
岩國　白銀伊兵衛
和歌山　津田源兵衛
濱松　郁文舍
那覇　豐盛書林
伊賀上野　宮崎書店
千葉　立眞舍
臺南　小出書店
基隆　三益堂
臺北　城谷書店
臺中　丸野書房
松本　鶴林堂
水原　西村六平
高岡　學海堂

仙臺　木文書店　津市　關西圖書株式會社
福知山　明治館　長野　金華堂
高崎　喜久屋　柏原　谷基太郎
越後新井　本柏屋　越後新井　文進堂
函館　小島書店　長岡　目黑十郎
札幌　三澤書店　岐阜　榊信吉
甲府　内藤傳右衞門　熊谷　伊藤書店
酒田　鈴木喜八　武生　西村書店
平　清光堂　飯田　皆川半四郎
長岡　上田屋書店　信濃野澤　岩下袈裟吉
千葉　多田屋書店　小樽　白鳥書店
直江津　柿村書店　厚岸港　池田運次
山形　五十嵐書店　濱松　谷島屋
長野　萩原朝陽館　鶴岡　日向源吉

上田　百合舍書店　浦和　文華堂
稻荷山　小桝屋書店　朽木　宮川庸三郎
室蘭　最上谷書店　宇都宮　田邊忠平
四日市　伊藤書店　前橋　万卷堂
福島　漸進堂　前橋　黑崎惠次
大館　藤嶋常三郎　宮崎　津野融貫堂
佐倉　村山書店　佐倉　三成舍
佐原　正文堂　太田　宮田梧七
土浦　山口好之助　青森　尙文堂
八王子　いろは書房　八王子　尙文堂
須賀川　寶萊屋　松代　協和堂
磐城中村　丁子屋與七　三條　原山書店
沼津　文林堂　水戸　川又銀藏
熊本　芹川書店　柏原　中井正吉

善通寺　筒井兵林館
羽前新庄　大泉善助
足利　三泉堂
一ノ關　文港堂
郡山　虎屋忠左衛門
羽前本莊　吉田政五郎
藤岡　文開堂
米澤　誠文堂
彦根　夏川書店
上州藤岡　文開堂
伊勢山田　古川小三郎

大賣捌所

大坂　松村九平

新發田　大竹新平
丸龜　開文舍
桐生　三泉堂支店
廣島　畠山書店
廣島　長谷川增太郎
名古屋　三輪伊六
岐阜　文港堂
七尾　北陸館
魚津　清明堂
桑名　中津原書店
淡路洲本　福浦文藏